

始



375  
3  
268

一四

兵器保存要領

第二卷

自第四篇  
至第十篇

昭和十二年三月陸軍省印刷

# 兵器保存要領

## 總目次

網領	第九篇	眼鏡、計測器及寫真機類
總則	第十篇	通信機類
第一篇 通則	第十一篇	照明機、聽音機及情警報機類
第二篇 兵器構成ノ材料及素質	第十二篇	動力及電機器具器材
第三篇 兵器保存用材料及器具	第十三篇	工具及器具類
第四篇 刀、劍、喇叭及銃器類	第十四篇	鐵道車輛及軌道材料
第五篇 火砲	第十五篇	氣球
第六篇 彈藥及火工具	第十六篇	軍樂器
第七篇 一般車輛及馬具	改正理由書	
第八篇 自動車及戰車類		

## 綱領

第一 兵器ハ戰捷獲得ノ重大要素ナリ蓋シ其威力ハ直接勝敗ノ決ヲ左右スルノミナラス克ク之ニ信賴シテ必勝ノ信念ヲ牢固タラシメ得ヘキヲ以テナリ故ニ兵器ハ常ニ之ヲ尊重愛護シ君國ノ爲ニ死生ヲ俱ニスルヲ以テ武人ノ本懐ト爲スヘシ

第二 兵器保存ノ目的ハ兵器ニ對シ常ニ適切ナル保護ヲ加ヘテ其精度能力ヲ保全シ以テ戰時ニ際シ完全ニ其威力ヲ發揚セシムルニ在リ

第三 取扱及手入れノ周密ナルト検査及格納ノ適切ナルトハ兵器保存ノ要道ナリ而シテ死生ノ關之ヲ取扱ヲ誤ラス凶德ノ際克ク手入ヲ怠ラサルハ實ニ旺盛ナル兵器尊重心ノ發露トシテ精到ナル訓練ニ依リ甫メテ茲ニ到ルヲ得ヘシ故ニ兵器ノ保存ハ教育ト須臾モ離ルヘカラサルモノニシテ彼此相俟テ戰闘ヲ完全ニ遂行シ得ルモノトス

第四 兵器保存ノ要道ハ兵器ノ構造機能ニ精通スルト保存ノ原理ヲ會得スルトニ依



リ初メテ其實施完キヲ得ヘク又之ニ依リ兵器使用ノ的確ヲ期シ以テ其威力ヲ發揚スルニ遺憾無キヲ得ヘシ  
輓近兵器ノ種類益々増加シ且其機構愈々精緻トナレルニ伴ヒ兵器智識ノ向上ヲ要スルコト亦往時ノ比ニアラス故ニ各級幹部ハ率先兵器ニ親炙シテ其機能ヲ究メ以テ之カ保存取扱ニ對シ確乎タル信念ヲ有スルコト緊要ナリ

(再錄)

### 總 則

- 第一 兵器ノ保存ハ本要領ニ依リ之ヲ行フノ外箇々ノ兵器ニ關スル細部ノ實施ハ當該兵器取扱法ノ規定ニ從フモノトス
- 第二 兵器ノ保存ヲ良好ナラシムル爲ニハ單ニ其方法ヲ誤ラサルヲ以テ足レリトセズ兵器構成材料及素質ノ概念ヲ會得シ其精神ヲ理解シテ之カ實施ノ的確ヲ期スルヲ要ス之カ爲此等材料及素質ニ關シ其大要ヲ説明ス
- 第三 兵器保存ノ方法ハ本規定ノ精神ヲ了得シ兵器ノ現況ニ適スル如ク實施スルヲ要スルモ何等據所ナク猥ニ之ヲ變更スルコトハ嚴ニ戒ムルヲ要ス
- 第四 兵器ニ對スル周到ナル教育ノ實施ハ其保存ヲ身好ナラシムル要件ナリ之カ爲一般教育ハ勿論手入、檢查、格納等ノ時機ヲ恰ク利用シ實際的教育ヲ施スノ著意ヲ緊要トス
- 第五 普通手入ト精密手入、一時格納ト長期格納等兵器ノ種類ニ依リ其區分明確ナ

ラサルモノニ在リテハ其目的ニ鑑ミ適宜取捨シテ實施スルモノトス

第六 本要領中温度ハ總テ攝氏トス

第七 兵器保存用器具ハ其標準様式ヲ示シタルモノニシテ之カ整備ハ經費ノ關係等ヲ顧慮シ部隊ノ實情ニ即スル如クスルモノトス

第八 本要領ハ主トシテ平時屯營ニ於ケルモノヲ基準トシテ記述シ以テ保存ノ萬全ヲ期スルヲ主眼トス而シテ陣中ニ於テモ勉メテ之ヲ準用スヘシト雖器具、材料等ノ關係上必スシモ之ニ據リ難キ場合アルヲ以テ平時野外ノ訓練等ヲ利用シ之カ應用ノ方法ヲ教育シ置クヲ要ス

第九 兵器ノ格納及格納品ノ手入ハ主トシテ多數格納ノ場合ニ就キ記述セルモ其他ノ部隊ニ於テモ勉メテ之ヲ準用スルモノトス

ラサルモノニ在リテハ其目的ニ鑑ミ適宜取捨シテ實施スルモノトス

第六 本要領中温度ハ總テ攝氏トス

第七 兵器保存用器具ハ其標準様式ヲ示シタルモノニシテ之カ整備ハ經費ノ關係等ヲ顧慮シ部隊ノ實情ニ即スル如クスルモノトス

第八 本要領ハ主トシテ平時屯營ニ於ケルモノヲ基準トシテ記述シ以テ保存ノ萬全ヲ期スルヲ主眼トス而シテ陣中ニ於テモ勉メテ之ヲ準用スヘシト雖器具、材料等ノ關係上必スシモ之ニ據リ難キ場合アルヲ以テ平時野外ノ訓練等ヲ利用シ之カ應用ノ方法ヲ教育シ置クヲ要ス

第九 兵器ノ格納及格納品ノ手入ハ主トシテ多數格納ノ場合ニ就キ記述セルモ其他ノ部隊ニ於テモ勉メテ之ヲ準用スルモノトス

兵器保存要領

第四篇 刀、劍、喇叭及銃器類

兵器保存要領

第四篇 刀、劍、喇叭及銃器類

目次

第一章 刀、劍及槍	一頁
第一節 手入	一
第一款 常用品ノ手入	一
第二款 格納品ノ手入	二
第二節 取扱	四
第一節 格納	四
第二節 檢査	七
第一款 常用品ノ檢査	七

第二章 喇叭 ..... 一一

第一節 手入 ..... 一二

第一款 常用品ノ手入 ..... 一二

第二款 格納品ノ手入 ..... 一四

第二節 取扱 ..... 一五

第三節 格納 ..... 一五

第四節 検査 ..... 一六

第一款 常用品ノ検査 ..... 一六

第二款 格納品ノ検査 ..... 一七

第三章 銃 ..... 一八

第一節 要則 ..... 一八

第二節 小銃 ..... 二九

第一款 手入 ..... 二九

其一 常用品ノ手入 ..... 二九

其二 格納品ノ手入 ..... 三三

第二款 取扱 ..... 三五

其一 使用上ノ注意 ..... 三五

其二 分解結合上ノ注意 ..... 四〇

第三款 格納 ..... 四〇

第四款 検査 ..... 四三

其一 常用品ノ検査 ..... 四四

其二 格納品ノ検査 ..... 五五

第五節 拳銃 ..... 五六



四

第一款 手入 ..... 五六

第二款 取扱 ..... 五六

    其一 使用上ノ注意 ..... 五六

    其二 分解結合上ノ注意 ..... 五七

第三款 格納 ..... 五八

第四款 検査 ..... 五九

第四節 機關銃 ..... 六〇

第一款 手入 ..... 六〇

    其一 常用品ノ手入 ..... 六〇

    其二 格納品ノ手入 ..... 六四

第二款 取扱 ..... 六五

    其一 使用上ノ注意 ..... 六五

    其二 分解結合上ノ注意 ..... 七二

第三款 格納 ..... 七三

第四款 検査 ..... 七五

    其一 常用品ノ検査 ..... 七五

    其二 格納品ノ検査 ..... 九〇

第四章 擲彈筒 ..... 九一

第一節 手入 ..... 九一

    第一款 常用品ノ手入 ..... 九一

    第二款 格納品ノ手入 ..... 九二

第二節 取扱 ..... 九三

第三節 格納 ..... 九五

第四節 検査 ..... 九五

目次

五



精 密 手 入		普通手入
鞋	刀(槍)身	鞋
一 刀ニ在リテハ鏝口及鏝板ヲ抽出シ劍ニ在リテハ彈鎖子抽出桿ヲ以テ上、下部鎖子ヲ脱ス 二 洗滌用油ヲ鞋内ニ注入シ手入用桿ヲ以テ底部ヲ攪拌シ適宜鞋ヲ動カシテ不潔物ヲ溶解除去シ該油ヲ去リテ乾燥セシム 三 「スピンドル」油ヲ注入シテ内部ヲ洗滌シタル後倒立シテ油ヲ滴下セシム 四 銃劍鞋底ニ汚油膠著シテ右ノ方法ヲ以テ除去シ得サルトキハ彈鎖子抽出桿ニテ乾布ヲ挿入シ之ヲ拭除スヘシ 五 雨水等ノ著シク侵入セル場合モ右ニ準スヘシ	普通手入ニ準スヘシ	一 外面ヲ乾布ヲ以テ輕ク拭淨シタル後薄ク「スピンドル」油ヲ塗布スヘシ 二 塵埃ノ附着セルモノハ表面ヲ毀損セサル如ク乾布ヲ以テ輕ク拭除スヘシ 三 泥土ノ附着セルモノハ濕布ヲ以テ輕ク拭除スヘシ 四 鐵ノ素地部ニ發錆セルモノノ手入ハ刀身ニ同シ

第二款 格納品ノ手入

第二 格納品ノ手入ハ常用品ノ精密手入ニ準スルノ外左ノ要領ニ依リ實施スルモノナルモ之カ爲方式ヲ定メテ作業スルヲ有利トス

一 格納前ノ手入

1 拭 淨

舊油ヲ除去シ各部ヲ検査スヘシ

舊油ノ除去困難ナルモノハ與熱「スピンドル」油ニ浸漬シテ除去スヘシ

2 塗 油

一時格納ノ爲ニハ「バラワセリン」若ハ「ワセリン」ヲ、長期格納ノ爲ニハ「ベトロラタム」ヲ塗布スヘシ塗油ハ各部等齊ニシテ緻密ナル被膜ヲ構成セシムル爲加熱溶解セル油中ニ浸漬スルヲ可トス

鞋ノ内部ニハ「ベトロラタム」「バラワセリン」「ワセリン」ヲ塗布セサルモノトス

二 格納間ノ手入

概ネ格納前ノ手入ニ準スルモ舊油ノ除去ニハ與熱「スピンドル」油ヲ使用スルヲ可トス

格納間ノ手入方式ノ一例ヲ示セハ附録第一ノ如シ

刀劍及槍

## 第二節 取扱

四

### 第三 使用上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 屈曲、折損、打痕等ヲ生セシメサルコト  
屈曲セルモノハ工具ヲ以テ修正スルヲ要ス然ラサレハ折損スルコトアリ
- 二 刀(劍)身ヲ鞆ニ挿入スルニハ鯉口ニ切込ヲ生セサル如ク注意シ又雨水等ノ附著セ  
ルモノハ十分之ヲ拭淨スルコト  
下部彈鎖子ノ浮キ上リタル鞆ニ劍身ヲ挿入スルトキハ往々劍身尖部ニ反起ヲ生スルコトアルヲ  
以テ彈鎖子抽出桿ヲ以テ下部彈鎖子ヲ十分壓入スルコト
- 三 鞆ヲ強磨シ錆染又ハ「メツキ」ヲ剝脱セシメサルコト
- 第四 分解結合ハ精密手入、修理等特ニ必要アル場合ニ行フモノニシテ其方法竝實施上  
ノ注意附録第二ノ如シ

## 第三節 格納

### 第五 格納ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

#### 一 刀、劍、槍(第一圖)

- 1 附屬革具ヲ分離シ成ルヘク塵埃及外氣ノ交感尠キ位置ヲ選ヒ員數ノ點檢容易ナ  
ル如ク架ニ托シ防塵ノ處置ヲ施スヘシ  
但刀、劍ヲ架ニ托スルニハ架ノ木部ニ直接觸接セシメサル爲亞鉛「メツキ」鐵線  
(板等ヲ介在セシムヘシ)
- 2 長期格納ノ爲ニハ特ニ彈鎖子、鯉口、駐爪ばね及切羽等ノ機能ノ衰損ヲ豫防ス  
ル爲軍刀ニ在リテハ刀身ト鞆トヲ分離シ已ムヲ得サレハ少シク抽出シ銃劍ニ在リ  
テハ劍身尖部ヲ下部彈鎖子ニ觸接セサル程度ニ抽出シテ格納スヘシ  
一時格納ニ在リテモ亦成ルヘク之ニ準スルモノトス

#### 二 附屬革具

### 第一篇第五章 皮革製品ノ部ニ依ルヘシ

刀劍及槍

五

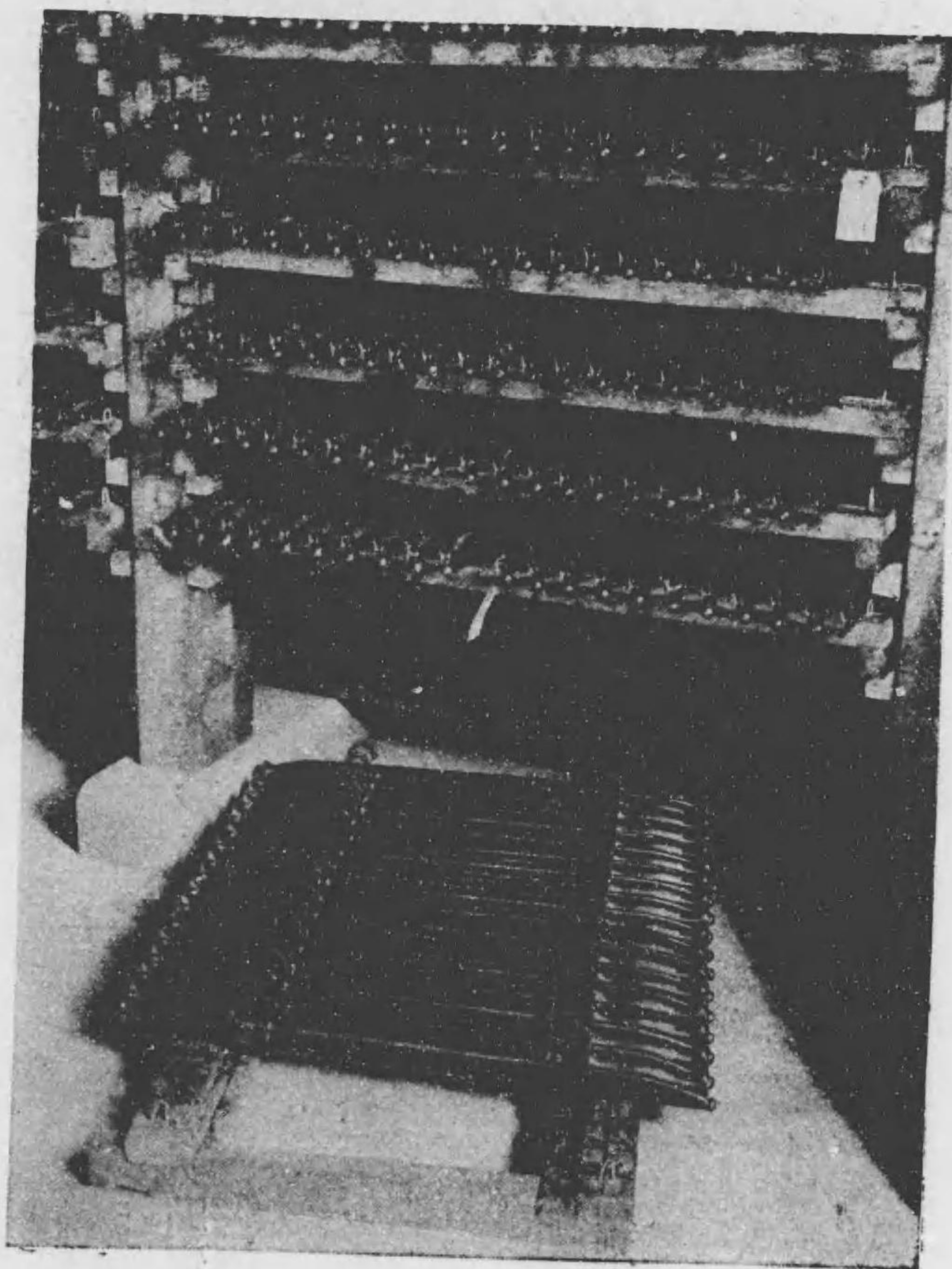
刀身	區分
損刀身傷ノ	著
六五四三二一 減肉彈缺刃腐 厚力損損部蝕 及衰損龜打鏽 良幅損裂、痕 ノ減、反 小曲	眼 點
	原 因
五減刃部ノ寸法ハ〇・ 耗トス	摘 要

第六 一般検査ノ主要ナル着眼點左ノ如シ  
一軍刀

第一款 常用品ノ検査

第四節 検査

第一圖  
刀劍ノ格納



身		劍	區分	著	眼	點	原	因	摘	要
機駐 能ノ		損劍 傷ノ	佩環 傷ノ							
動搖	運動不活潑	刀身ニ準ス	磨滅、變形	剝片ノ鞘内ニ殘存	一 軋リ、局部摩擦 二 破損	刀身ト鞘トノ番號ノ不一致	ばねノ衰損、局部摩擦、 發錆、手入不良(舊油、 汚垢ノ膠著)			
駐筒頭ノ戻回				反起又ハ屈曲セル刀身 ノ挿脱			緊定及目打ノ不良			

二 銃 劍

身		刀	鞘	
ノ駐爪 機能		損護 拳傷ノ	柄ノ 損傷	鞘ノ 損傷
刀身ノ自然脱出	刀身ト鞘トノ上下動搖	一 變形、動搖 二 指貫ノ衰損	一 動搖 二 柄材ノ磨滅、龜裂 三 小ねぢノ結合反對及 同頭ノ變形、過高	一 打痕、屈曲、裂傷、 二 衰損、離脱
ばねノ衰損、變形	一 ばねノ鉤部ト鏢口 トノ間隙過大 二 切羽ノ衰損			修理法不良、刀身挿脱 ノ不注意及減刃不良
				小ねぢノ落失及螺入不 良

劍身		鞘	
柄ノ損傷	鏢ノ損傷	上、下部ノ彈鎖子ノ機能及損傷	鞘ノ損傷
一 柄頭ノ動搖、打痕 二 柄木ノ磨滅、龜裂 三 柄頭、柄木間ノ間隙 四 過大柄頭ノ結合反對及同頭部ノ變形、過高	折損、變形、動搖	一 劍身挿脱ノ強弱 二 劍身ノ動搖及軋リ	一 打痕、屈曲、裂傷、 二 鈎環ノ動搖及同小ね 三 螺入不良 三 鏢ノ離脱
		修理法不良	
			上部彈鎖子ハ劍ヲ倒ニシシテ握リテ之ヲ上下ニ振ルモ劍身容易ニ脱出セス下部彈鎖子ハ劍ノ柄部ヲ握リ之ヲ廣側面ノ方向ニ振ルモ鞘底部ニ音響ヲ發セサルヲ良トス

鏢染ノ剝脱	鏢口ノ傷	鏢口ノ切込、動搖及鏢ト	修理不良、劍身挿脱ノ不注意及減刃不良
-------	------	-------------	--------------------

三 槍

區分	槍身ノ損傷	柄
著	槍身ニ準ス	柄ノ損傷
眼		一 木部ノ反張、龜裂 二 乳環ノ動搖、變形 三 千段卷ノ漆ノ剝脱及麻絲ノ緩解 四 鐳ノ打痕、變形、動搖 五 帶環ノ變形、動搖 六 腕貫革ノ衰損
點		

第二款 格納品ノ検査

第七 格納品ノ検査ハ概テ常用品ノ検査ニ準スルモ格納前ノ検査ニ於テハ特ニ各部發錆

刀劍及槍

ノ有無、機能ノ良否及塗油ノ適否ニ注意シ格納間ノ検査ニ於テハ特ニ塗油ノ有効期限及各部發錆ノ有無ニ注意スヘシ

## 第二章 喇叭

### 第一節 手入

#### 第一款 常用品ノ手入

第八 常用品ノ手入ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

##### 一 日常ノ手入

- 1 各部ヲ離脱スルコトナク外部及漏斗狀ノ内部ヲ清淨ナル乾布ヲ以テ拭淨スヘシ  
鐵部ニハ「スピンドル」油ヲ塗布スヘシ

- 2 懸紐及握卷ハ常ニ清潔乾燥ニ保チ塵埃、污垢ノ附着セルトキハ之ヲ除去シ要ス

レハ日乾後輕打スヘシ

##### 二 使用後ノ手入

- 1 吹口(口)ヲ離脱シテ唾液ヲ除去スヘシ

- 2 汗等附着シテ甚シク汚レタルトキハ含水布片ニテ拭ヒタル後乾布ヲ以テ拭淨スヘシ

- 3 雨雪等ノ爲濕潤セシトキハ成ルヘク速ニ之ヲ拭除シ又泥土、塵埃ノ附着セシトキハ徐ロニ之ヲ除去シ過度ニ摩擦セサルヲ要ス

##### 三 一箇月ニ概ネ一、二回行フ手入

吹口(口)、伸縮管、緊定螺及緊定螺壓螺ヲ離脱シテ行フモノトス

- 1 吹口(口)及伸縮管ノ内部ニ附着セル唾液及之ニ因リテ生シタル固著物ハ柔軟ナル布片ヲ通シテ除去スヘシ



- 2 體ノ内部ニ水或ハ温湯ヲ數回注入シ十分洗滌シタル後徐ロニ回轉シテ全ク水分ヲ除キ漏斗狀ノ内部ヲ乾布ヲ以テ拭淨スヘシ
  - 3 吹口(口)、伸縮管及體ノ外部ヲ揮發油ヲ浸マセタル布片ヲ以テ拭淨シ更ニ乾布ヲ以テ其油分ヲ十分除去スヘシ
  - 4 黃銅部ニ發錆若ハ甚シク汚點ヲ生シ除去シ難キトキハ真鍮磨ヲ用ヒ徐ロニ之ヲ拭淨スルコトヲ得
- 但真鍮磨ハ金質ヲ減耗セシムルヲ以テ已ムヲ得サル場合ノ外使用セサルヲ要ス殊ニ光澤ヲ出サンカ爲ニ之ヲ使用スヘカラス

### 第二款 格納品ノ手入

第九 格納品ノ手入ハ常用品ノ手入三ニ準シテ實施スルモノトス

特ニ懸紐及握卷ハ第一篇第七章毛類及毛製品ノ部ニ依リ殺蟲、防蟲ノ處置ヲ講スヘ

シ

### 第二節 取扱

第十 使用上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 喇叭ハ軟質ノ金屬ヨリ成リ打痕ヲ生シ易キヲ以テ丁寧ニ取扱ヒ特ニ他物トノ觸突ヲ避ケ地上又ハ棚上等ニ置クトキハ顛倒ヲ避クル爲横ニ倒シ置クコト
- 二 手入不良ナルトキハ各部ノ機能ヲ害シ又微細ナル損傷ト雖往々發音ヲ妨ケ音色ヲ損スルコトアルヲ以テ特ニ注意スルコト
- 三 緊定螺ノ緊定ハ伸縮管ヲ保持スルヲ以テ度トスヘシ緊定強キニ失スルトキハねぢ部ヲ損傷スル虞アリ

### 第三節 格納

第十一 格納ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

一 懸紐及握卷ヲ離脱シ吹口(口)及緊定螺ヲ緩メ棚上又ハ箱内ニ收容シ成ルヘク塵埃ノ附著ヲ豫防スヘシ

塵埃及濕氣ノ内部ニ侵入スルヲ防ク爲吹口(口)及漏斗狀ヲ「バラフィン」紙等ヲ以テ被包スルヲ可トス

二 自在環等鐵部ニハ「ペトロラタム」ヲ塗施シ置クモノトス

三 懸紐及握卷ハ第一篇第七章毛類及毛製品ノ部ニ依リ特ニ蟲害ヲ豫防スヘシ

四 一時格納ノ場合ニ於テモ成ルヘク毛製品ハ分離格納スヘシ

第四節 検査

第一款 常用品ノ検査

第十二 一般検査ノ主要ナル着眼點左ノ如シ

握卷	懸紐	吹伸體		區分	著眼點	原因
		口	管			
損傷	手入	損傷	機能	緊定螺ノ機能不良	ねぢノ變形、磨滅、打痕 手入不良	
			吹口、伸縮管ノ裝脱困難			
蟲害、衰損	一 塵埃、汚垢ノ附著 二 乾燥不十分	打痕、變形、鏈ノ變形、切損	接合部空氣漏	接合部ノ打痕、變形	接合部ノ打痕、變形	
				鐵著部ノ剝脱		

第二款 格納品ノ検査

第十三 格納品ノ検査ハ概テ常用品ニ準スルモノトス

### 第三章 銃

第十四 本章ハ小銃、拳銃及機關銃ニ區分シ要則ニ於テハ小銃、拳銃、機關銃ノ手入ニ關スル共通事項ヲ記述ス

眼鏡ニ關シテハ第九篇ニ依リ又機關銃様式ノ機關砲ニ關シテハ機關銃ニ準スルモノトス

#### 第一節 要 則

十五 常用銃ノ手入一般ノ要領左ノ如シ

##### 一 拭淨

- 1 塵拂等ヲ以テ外部ノ土砂、塵埃等ヲ清掃ス
- 2 布片ヲ以テ外部ノ舊油、污垢、泥土及著色部、木部ノ油氣ヲ拭淨ス

- (イ) 凹部、隅角部等ハ木又ハ竹片ニ布片ヲ被ラセタルモノヲ以テ綿密ニ拭淨ス
- (ロ) 著色部ヲ強磨スヘカラス(照星、照尺ニ關シテハ特ニ注意スヘシ)
- (ハ) 泥土ノ固著セルモノハ濕布ヲ以テ之ヲ濕シタル後徐ニ除去シ以テ著色ヲ剝

- 3 素地部ニ發錆セルモノハ第一篇第三章金屬製品ノ部ニ示ス方法ニ依リ徐ニ除去ス

##### 二 塗油

各部拭淨後素地部、錆染、染烘部ニ塗油ス此際塗料部、木部ニ油ヲ流下セサル如ク

注意スヘシ

- 1 樞軸部、摩擦部ニハ稍、多ク塗油スヘシ
- 2 錆染、染烘部ニハ薄ク塗油スヘシ

注意 本章ニ於テ單ニ「塗油」ト稱スルハ「スピンドル」油ヲ塗施スルヲ謂フ

第十六 腔中及藥室ハ銃身ノ要部ニシテ其良否ハ直接命中精度及銃ノ命數ニ至大ノ關係ヲ有スルヲ以テ之カ保存手入ニハ十分周密ナル注意ヲ拂フヘシ  
腔中及藥室ノ手入ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

一 日常ノ手入

- 1 銃(銃身)ヲ略、水平ニ臺上又ハ架上ニ托シ遊底等ヲ離脱シ保心筒ヲ裝シタル洗矢ノ洗管ニ布片ヲ卷キテ之ヲ腔中ニ挿入シタル後保心筒ヲ尾筒ニ裝シ徐ロニ洗矢ヲ進退シテ舊油ヲ拭淨シ洗矢ヲ抜キタル後保心筒ヲ離脱スヘシ
- 2 藥室掃除棒ノ先端割目ニ布片ヲ卷キ藥室内ノ舊油ヲ拭除スヘシ
- 3 油布ヲ洗管若ハ藥室掃除棒ニ卷キ腔中及藥室ニ塗油スヘシ

注意

- 1 腔中ヲ拭淨スル際ハ腔綫ニ準シテ洗管ヲ旋回セシムルヲ要ス故ニ旋回セサル洗矢ヲ使用スル場合ニ於テハ其旋回ニ抵抗セサル如ク注意スヘシ

- 2 腔中ノ拭淨ニ方リテハ銃ヲ常ニ同一狀態ニ於テ臺上ニ托スルコトナク適時之ヲ回轉シテ銃腔ノ同一部ヲ偏磨セシメサル如クスルヲ要ス又洗矢ノ類ヲ直接腔面ニ接觸強磨セサル如ク注意スルコト緊要ナリ故ニ洗矢、綑杖ノ運動方向ハ銃身軸ト同一線上ニアル如クスルト共ニ常ニ之カ矯正ニ注意シ屈曲セルモノハ使用ヲ避クルヲ要ス保心筒内孔ノ偏磨開大セルモノモ亦同シ
- 又洗管、藥室掃除棒ニ布片ヲ卷クニハ金屬部又ハ木部ヲ露出セサル如ク注意ス
- 3 過度ノ磨拭ハ腔中ノ磨滅ヲ來シ銃ノ命數ヲ短縮セシムルヲ以テ手入ニ方リテハ銃腔ノ狀態ト布片汚損ノ景況トヲ顧慮シ其方法竝拭淨回数ヲ適正ニスル如ク注意ヲ要ス

二 射撃前ノ手入

腔中及藥室ヲ丁寧ニ拭淨シタル後油布ヲ以テ薄ク塗油スヘシ

但空包射撃前ニ在リテハ「スピンドル」油、「ワセリン」又ハ「ペトロラタム」ト「スピンドル」油ノ混合油ヲ稍、多量ニ塗布スルヲ可トス

注意

- 1 實包射撃前腔中ニ多量ニ塗油スルハ却テ害アルモノトス特ニ冬季ニ於テ然リトス
- 2 腔中藥室ハ特ニ嚴密ニ點檢スルヲ要ス

三 射撃後ノ手入

射撃後ニ於ケル手入ノ良否ハ腔中ノ保存ニ影響スルコト大ナルモノアルヲ以テ手入ノ時機ヲ失セサルコト及其方法ヲ誤ラサルコトニ就テハ特ニ深甚ノ注意ヲ必要トス

疲勞困憊セル時及雨雪天或ハ夜間ノ射撃後等ニ於テ然リトス

射撃後ハ發錆ノ防止、附著燼渣ノ除去ヲ容易ナラシムル爲直ニ腔中、藥室ノ手入ヲ行フヘシ若直ニ手入ヲ行フノ餘裕ナキトキハ稍、多量ニ腔中油ヲ塗布シ燼渣ヲ浮出サシメ一時同部ノ發錆ヲ防止スルト共ニ爾後ニ於ケル手入ヲ容易ナラシムルヲ要ス

射撃後ノ手入ノ要領左ノ如シ

區分	要領	洗滌(拭淨)法	摘要
銃	一 腔中洗滌液(以下洗滌液ト略稱ス)又ハ礮砂液ニテ洗滌ス 二 布片ニテ拭淨シ腔中ヲ點檢シ腔中油ヲ塗布シテ數時間乃至十數時間放置シ發錆ノ素因タル燼渣等ヲ浮出サシメ布片ニテ拭淨ス 三 爾後布片汚損ノ狀況竝腔中ノ状態ヲ顧慮シ燼渣ヲ完全ニ除去シ得ルマテ一、二ヲ反復ス 四 保存ノ爲「スピンドル」油ヲ塗布ス	一 準備 1 拳銃、小銃ニ在リテハ游底、彈倉等ヲ離脱シ機關銃ニ在リテハ銃尾機關ヲ分解ス 2 洗滌液ハ洗滌器ノ種類ニ依リ要スレハ下洗用、中洗用及仕上洗用等ノ數段ニ區分ス 二 洗滌 銃ヲ洗滌臺ニ托シ(若ハ昇降軸ヲ扛起シテ銃口部ヲ下降シ)旋回洗矢ヲ進退シテ洗滌液ニ	狀況之ヲ許ス限リ本號ノ手入ヲ行フモノトス

<p>ヨリ汚垢燼渣ヲ洗滌除去ス 洗滌ニ用フル洗矢ノ頭部ニハ植物纖維製洗頭(纖維ハ「タワシ」ニ用フル椰子ノ纖維、刷毛ニ用フル「メキシコフアイバー」俗稱「パキン」ノ如キ靱性大ナルモノ)又ハ布片ノ類ヲ附ス</p>	<p>一 腔中油ニテ拭淨ス 二 前號ニ同シ 三 前號ニ同シ 四 「スピンドル」油塗布 五 前ニ洗滌液洗滌ヲ行ヒ得ルニ至レハ前號ニ依ル手入ヲ行フヘシ</p>
<p>腔中油ヲ浸マセタル布片ヲ洗管ニ巻キ腔中ヲ拭淨ス</p>	<p>一 「スピンドル」油ニテ洗滌ス 二 爾後爲シ得レハ前各號ニ依ル手入ヲ行フヘシ</p>
<p>「スピンドル」油ヲ以テスル洗滌ハ前二號ノ手入ニ比シ其效果十分ナラサルコトニ注意スルヲ要ス 狀況萬已ムヲ得サル場合ニハ假令水洗スルモ之ヲ行ハサルニ優ルモノトスル</p>	<p>洗滌液ニ依ル洗滌ニ準ス</p>

<p>洗滌液及腔中油共ニ之ヲ有セサル等已ムヲ得サルトキ</p>	<p>射撃後直ニ手入ヲ行フノ餘裕ナキトキ</p>
<p>一 「スピンドル」油ニテ洗滌ス 二 爾後爲シ得レハ前各號ニ依ル手入ヲ行フヘシ</p>	<p>稍、多量ニ腔中油ヲ塗布シ一時發錆ヲ防止スルト同時ニ爾後ニ於ケル手入ヲ容易ナラシム</p>
<p>洗滌液ニ依ル洗滌ニ準ス</p>	<p>重錘式塗油紐ノ洗頭及布片ニ腔中油ヲ浸マセ藥室部(銃口)ヨリ重錘ヲ挿入シテ銃口(藥室部)ヨリ引出シ腔中ニ塗油ス</p>
<p>「スピンドル」油ヲ以テスル洗滌ハ前二號ノ手入ニ比シ其效果十分ナラサルコトニ注意スルヲ要ス 狀況萬已ムヲ得サル場合ニハ假令水洗スルモ之ヲ行ハサルニ優ルモノトスル</p>	<p>重錘式塗油紐ノ洗頭及布片ニ腔中油ヲ浸マセ藥室部(銃口)ヨリ重錘ヲ挿入シテ銃口(藥室部)ヨリ引出シ腔中ニ塗油ス</p>

注意

銃尾(四四式騎銃等ニテ銃口蓋ヲ裝シタル場合ニ在リテハ銃口)ヨリ銃口(藥室前方部)附近ノ附著物ノ除去困難ナル爲銃口(銃尾)ヨリ手入ヲ行フノ已ムヲ得サル場合ニ在リテハ手入具ヲ銃口(藥室前方)部ニ接觸セシメサル如ク布片等ニテ保持スヘシ

四 風塵雨雪ヲ蒙リタル時ノ手入

1 雨雪侵入シタル虞アル場合ニハ先ツ乾布ヲ以テ十分水氣ヲ吸收除去シタル後塗油スヘシ

2 砂塵侵入シタル虞アル場合ニハ洗管ニ緩ク油布ヲ巻キ徐ニ銃口外ニ押シ出シ布片ヲ交換シテ之ヲ反復シ全ク砂塵ナキヲ確メタル後塗油スヘシ

最初ヨリ日常手入ノ如ク行フトキハ磨粉ヲ以テ腔中ヲ摩擦スルト同様ノ結果ヲ來スヲ以テ腔中ノ損傷、磨滅ヲ大ナラシムルニ至ルヘシ

銃口部ヨリ手入ヲ行フトキハ腔中ノ塵埃ヲ藥室ニ集ムルカ如キ結果トナルヲ以テ特ニ藥室ノ手入ニ注意スルヲ要ス

第十七 銃腔面ニ附著セル被甲ハ勉メテ之ヲ除去スルヲ要ス之カ爲除銅液(已ムヲ得サル場合ニハ被鋼實包)ヲ用フモノトス

一 除銅液ニ依ル被甲除去ノ要領左ノ如シ

要

領

摘

要

一 準備

小銃ハ遊底彈倉等ヲ離脱シ機關銃ハ銃身ヲ分解シ腔中ヲ清拭シタル後揮發油ニテ殘油ヲ十分除去シ之ヲ甲圖ノ如ク懸吊シ下端ニ圖ノ如ク注液管ヲ裝著ス機關銃ノ「ガス」漏孔ハ之ヲ閉塞ス

二 實施

漏斗ヨリ徐ニ液ヲ注入シツツ之ヲ上ケテ腔中ニ液ヲ充滿セシメタル後「ゴム」挾ヲ閉塞シ連結用「ガラス」管以下ヲ脱シテ放置ス(乙圖)注液後數分ニシテ液ハ被甲ヲ溶解シ始メ視察用「ガラス」管内ノ液ハ漸次變色シ概ネ三〇—四〇分ニテ濃藍色ヲ呈スルニ至ルヲ以テ被甲附著ノ程度ニ應シ液ヲ更新シ液ノ變色ヲ認メサルニ至ルマテ之ヲ復行スヘシ

三 洗滌

除去完了後ハ「アムモニア」ノ殘存セサル如ク清水ヲ以テ十分ニ洗滌シタル後水分ヲ除去シ「スピンドル」油ヲ塗布スヘシ

一 除銅液ハ使用直前ニ調製スヘシ

二 液ハ亞鉛ト作用スルトキハ鋼ニ對シテ腐蝕性ヲ生スルヲ以テ容器等ハ亞鉛「メツキ」錢板ヲ使用スヘカラス

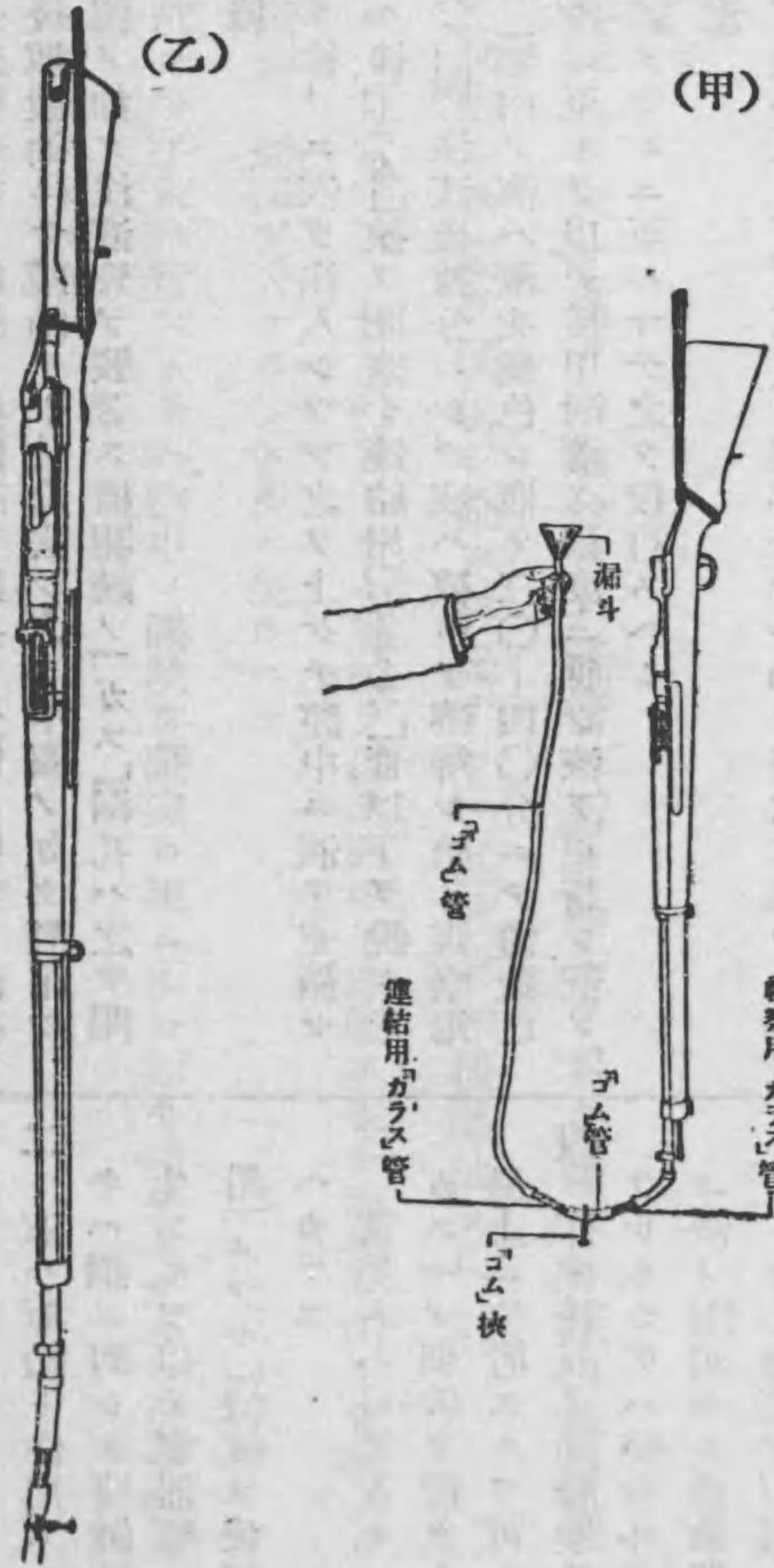
三 實施者ハ「アムモニアガス」ノ刺戟ヲ避クル爲風上ニ位置スルヲ可トス

四 作業後液ノ洗滌十分ナラサルカ又ハ銃身外面等ニ液ノ附着セル儘放置スルトキハ發錆ノ原因トナルコトアリ

實 施 要 領 圖

第 二 圖

機關銃ハ銃身後方段部又ハ駐柁ニ綱ヲ結束シテ懸吊スルモノトス



二 被鋼實包ニ依ル被甲除去

成ルヘク多數彈射擊後銃身加熱ノ状態ニ在ル間ニ於テ被鋼實包ヲ連續發射（小銃ニ在リテハ一回約一〇發、機關銃ニ在リテハ一回二〇―三〇發）スヘシ

第二節 小銃

第一款 手入

其一 常用品ノ入

第十八 常用品ノ手入ハ遊底、彈倉等ヲ離脱シ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス  
但腔中藥室ノ手入ハ第三章第一節要則ニ依ルヘシ  
一 日常ノ手入



區分	銃 尾 機 關	其 他 鐵 部	木 部
要 領	<p>一 遊底ヲ分解シ刷毛若ハ布片等ヲ以テ各部品ノ舊油及塵埃ヲ拭淨シタル後刷毛若ハ油布ヲ以テ鐵部ノ摩擦部ニハ稍、多量ニ其他ノ部分ニハ輕ク塗油スヘシ</p> <p>二 圓筒ノ内外部、隅角部、溝部及擊莖ばね室等ノ拭淨塗油ニハ圓筒掃除桿ヲ使用スルヲ可トス</p>	<p>布片ヲ以テ舊油及塵埃ヲ拭淨シタル後油布ヲ以テ塗油スヘシ</p> <p>軸部、摩擦部ニハ稍、多量ニ塗油スヘシ</p>	<p>布片ヲ以テ外部ヲ拭淨シ塵埃ヲ除去スヘシ</p> <p>木部ニ附著セル油ハ十分ニ拭除スヘシ</p>
摘 要	<p>塗油多量ニ失スルトキハ徒ニ塵埃ノ附著ヲ増加スルノミナラス過剩ノ油ハ底部ニ滯溜シ外部ニ漏出流下シテ銃床ヲ汚損シ且射撃ニ方リ射手ノ眼ニ入ル等却テ有害ナル結果ヲ來スヲ以テ常ニ其量ヲ適度ナラシムルヲ要ス</p>		

二 射撃前ノ手入

腔中藥室ノ手入ノ外日常ノ手入ニ準シ實施スルモノトス

三 射撃間ノ手入

銃ハ手入ヲ行ハスシテ相當多數ノ射撃ニ耐ヘ得ヘシト雖發射彈數ノ累加ニ伴ヒ施油ノ缺乏、燼渣ノ堆積等ハ逐次機能ヲ害シ故障ヲ發生セシムルニ至ルヲ以テ射撃間機會アル毎ニ其時ノ狀況ニ適應シテ手入ヲ行フコト必要ナリ特ニ多數彈發射後手入ヲ行ハスシテ放置スルトキハ各部ノ冷却ト共ニ燼渣膠著シ機能ヲ害シ手入ヲ困難ナラシムルヲ以テ射撃後成ルヘク速ニ各部ノ拭淨ヲ行フヲ要ス

而シテ之カ實施ノ要領ハ利用シ得ヘキ時間ノ長短ニヨリテ異ルヘシト雖主トシテ發射ノ爲燼渣ノ附著シ易キ部位、(腔中及藥室圓筒包底面、同擊莖室) 又ハ異物ノ介在シ易キ部位(藥室、尾筒内部等)ノ手入ヲ行ヒ或ハ摩擦多キ部分ニ塗油スル等狀況ニ應シ機敏ニ點檢手入ヲ行フヲ要ス

### 四 射撃後ノ手入

日常ノ手入ニ準スルノ外左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

区分	要	領	摘	要
銃尾機關	「ガス」ヲ蒙リ燼渣ノ附着セル部分ハ成ルヘク速ニ腔中ニ準シ腔中洗滌液又ハ礮砂液ニテ洗滌スルカ又ハ腔中油ニテ拭淨スヘシ			
其鐵ノ他部	布片ニテ燼渣、污垢ヲ拭淨シタル後塗油スヘシ			圓筒包底面、擊莖室及擊莖先端等直接「ガス」ヲ蒙ル部分ヲ放置スルトキハ腐蝕シテ射撃機能ヲ害スルニ至ルヲ以テ特ニ手入ニ注意スルヲ要ス

### 五 長期連續使用後又ハ雨雪風塵ヲ蒙リタル場合ノ手入

日常手入ニ準スルノ外左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

区分	要	領

銃尾機關及部	木著	部色	及部
一 雨雪ニ遇ヒタル後ノ手入ニ於テハ乾布ヲ以テ水氣ヲ十分除去スルコト必要ナリ 特ニ手入困難ナル隅角部等ニ水氣ノ殘留セサル如ク注意スヘシ	一 泥土附着セシトキハ過度ニ摩擦スルコトナク且他ヲ汚損セサル如ク拭淨スヘシ	二 塗料塗施部ハ他部ニ害ヲ及ス虞ナキ場合ニ限り要スレハ水洗スルコトヲ得	三 塗漆剝脱シタルモノハ該部ヲ揮發油ニテ拭淨シタル後亞麻仁油ヲ塗布シ其吸收ヲ待チテ乾布ヲ以テ磨拭スヘシ
二 砂塵ノ除去ニ方リテハ之ヲ其面上ニ壓著セサル如ク注意スヘシ			

### 其ニ 格納品ノ手入

### 第十九 格納品ノ手入ハ常用品ノ手入ニ準スルノ外左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス之

カ爲方式ヲ定メテ作業スルヲ有利トス

#### 一 格納前ノ手入

##### 1 拭淨

銃

舊油ヲ除去シ各部ヲ検査スヘシ

舊油ノ除去困難ナルモノハ與熱「スピンドル」油ニ浸漬シ（浸漬困難ナルモノハ「スピンドル」油又ハ「テレピン」油ニテ之ヲ溶解セシメ）テ除去スヘシ

2 塗油

一時格納ノ爲ニハ「バラワセリン」若ハ「ワセリン」ヲ、長期格納ノ爲ニハ「ペトロラタム」ヲ塗布スヘシ塗油ハ各部等齊ニシテ緻密ナル被膜ヲ構成セシムルヲ要ス之カ爲加熱熔融セル油中ニ浸漬（浸漬困難ナルモノハ刷毛等ニテ塗布）スルヲ可トス

二 格納間ノ手入

概ネ格納前ノ手入ニ準スルモ舊油ノ除去ニハ與熱「スピンドル」油ヲ使用スルヲ可トス格納間ノ手入方式ノ一例ヲ示セハ附録第三ノ如シ

第二款 取扱

其一 使用上ノ注意

第二十 銃口、照星、照尺及遊底ヲ地ニ觸レシメ又銃ヲ依托スル際照星ヲ直接他物ニ接觸セシムヘカラス

第二十一 銃ヲ使用セサルトキハ遊底ヲ閉鎖シ擊莖ヲ擊發後ノ位置ニ置キ銃口ニハ銃口蓋ヲ裝スヘシ

木、紙、布片等ヲ以テ銃口ニ假栓スルコトハ該部ノ保存上有害ナルヲ以テ避クルヲ要ス

第二十二 彈藥ハ先ツ彈倉内ニ裝填シ遊底ニヨリ藥室ニ裝入スヘシ彈藥ヲ最初ヨリ藥室ニ裝入シ遊底ヲ閉鎖スルトキハ抽筒子ヲ害スルモノトス

但狹窄射擊用實包ハ最初ヨリ藥室ニ挿入ス

第二十三 糊杖裝入ニ際シ銃床ノ糊杖室底ヲ擊突セシムヘカラス

第二十四 起伏劍ヲ有スル銃ノ劍ハ必要以外ニ屢、起伏セシムヘカラス又伏劍ハ靜ニ之ヲ行ヒ起劍ノ際ハ過度ニ力ヲ加ヘサルヲ要ス

第二十五 酷暑地ニ於ケル使用上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 炎天下ニ於テハ油ノ流出、乾燥竝鐵部ノ發錆速ナルヲ以テ油ノ選擇補充ニ注意シ塗油ノ量及回數ヲ増スコト

二 塗油ノ流出ヲ防止スル爲必要以外ノ場合ニハ銃ヲ水平ニ靜置スルヲ可トス各種油壺ノ口栓ハ特ニ確實ニ密塞シテ油ノ浸出ヲ防止スルコト必要ナリ

二 射擊間放熱ヲ良好ナラシムル爲狀況之ヲ許セハ時々遊底ヲ開キテ腔中ノ通風冷却ニ勉ムルコト

三 日光ノ直射ニ依リ銃身ハ加熱シ木部ハ變歪ヲ生スルニ至ルヲ以テ狀況之ヲ許セハ

日蔭若ハ通風良好ナル場所ニ置クヲ可トス

第二十六 極寒地ニ於ケル使用上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 機關部ノ塗油凍結シテ機能ヲ害シ又ハ破損スルコトアルヲ以テ耐寒性「スピンドル」油已ムヲ得サレハ「スピンドル」油ニ燈油ヲ混合シタルモノヲ使用スルカ或ハ適宜塗油ノ量ヲ減少スルカ又ハ輕ク塗油ヲ拭除スルコト

1 燈油ハ鐵部發錆ノ媒介ヲ爲スヲ以テ之ヲ混合スル場合ハ其量ヲ適當ニシ且使用後ノ手入ニ注意シテ拭淨ヲ頻繁ナラシムルコト

特ニ混合油ヲ使用シタル儘室内温暖ナル場所ニ長ク置クトキハ發錆シ易キヲ以テ注意スルコト

2 發錆ノ虞アルヲ以テ塗油ヲ拭除セル儘ノ銃ヲ室内ニ放置セサルコト

二 射擊ニ先タチ必ス空撃ヲ行ヒ擊發力ヲ検査シ若過弱ナリト認メタルトキハ部品ノ異狀ノ有無、抗力ノ適否、手入ノ良否等ヲ檢シテ之ヲ處置シ擊發ニ支障ナカラシメ

置クコト

三 火薬燼渣ト脂油ト混シテ凍結シタルモノ及蠟劑等圓筒頭部附近ニ膠著シテ故障ヲ生スルコトアリ此等ハ銃身冷却後ハ除去困難ナルヲ以テ成シ得レハ射撃間又ハ射撃直後ニ於テ之ヲ拭除スルコト

四 銃ヲ使用セサル間ハ成ルヘク掩蔽部、家屋内等暖カキ場所ニ置キテ凍結ヲ防キ已ムヲ得ス屋外ニ配置スルトキハ成ルヘク毛布、蓆等ヲ以テ之ヲ掩ヒ爲シ得レハ内部ニ火氣ヲ收容シ以テ不時ノ射撃開始ニ支障ナカラシムルコト

注意

- 1 銃ヲ屋外ヨリ室内ニ携行スルトキハ室内ノ水分鐵部ニ凝著シテ發錆ノ基因ヲ爲スヲ以テ之ヲ拭淨シ特ニ腔中ノ手入ヲ勵行セサルヘカラス
- 2 極寒地ノ屋内ニハ煖爐(温突)アリテ撒水ノ注意ヲ怠ルトキハ室内ノ濕分著シク減少シ遂ニ銃床ヲ過度ニ乾燥セシメ銃鍊、銃身等ノ動搖ヲ來スニ至ルヲ以テ銃架ハ成ルヘク煖爐ヨリ遠キ位置ニ設ケ且室内ノ濕度ヲ適當ニ保持セシムヘシ

第三十七 風塵甚シキ時ニ於ケル使用上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 塵埃ノ附着、侵入ヲ防ク爲外部ノ塗油量ヲ輕減シ且成ルヘク使用直前マテ銃口蓋ヲ裝シ置クコト

二 塵埃ヲ蒙リタル後射撃ヲ實施スル場合ニハ狀況之ヲ許セハ腔中ヲ拭淨シ特ニ銃口部ヲ點檢スルコト

第二十八 雨雪天ニ於ケル使用上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 雨雪ニ遇ヒタル銃ハ時ヲ得ハ直ニ手入ヲ實施スルコト

銃ノ内外部ニ附着セル水分ハ發錆ヲ速ナラシムルノミナラス其儘射撃スルトキハ腔中ニ存スル水滴ノ爲銃身膨脹スルコトアレハナリ

二 雨雪ノ腔中ニ浸入スルヲ防ク爲「ワセリン」、「ベトロラタム」又ハ布片等ヲ以テ銃口部ヲ填塞スルコトハ避クルヲ要ス銃口部ヲ填塞シタル儘射撃スルコトキハ銃身膨脹ヲ生起スルコトアレハナリ

三 銃身ト銃床トノ接際ニ大ナル遊隙ヲ有スルモノハ「バラフィン」ト「ペトロラタム」ヲ混シタルモノ又ハ蜜蠟ヲ附著シ雨水ノ浸入ヲ防クコト

其二 分解結合上ノ注意

第二十九 分解結合上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 各部品ヲ他物ニ撃突セシメサルコト照門、照星ニ於テ特ニ然リ
- 二 遊底離脱ニ方リ撃莖駐脚筈ニ依リ床鼻ヲ損傷セシメサルコト
- 三 遊底ヲ尾筒ニ結合スルニ方リテハ自體ノ結合ノ正否ヲ檢シタル後遊底駐子ヲ外方ニ開キテ結合シ引鐵ヲ引キテ撃莖ヲ撃發後ノ位置ト爲シ置クコト

第三款 格納

第三十 長期格納ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

一 銃

屬品類ヲ分離シ塵埃及外氣ノ交感尠ク且出納ニ便ナル位置ヲ選ヒ格納用銃口蓋ヲ裝シ遊底ヲ閉チ撃莖ヲ撃發後ノ位置ニ置キ通常木被ト床尾トニ依リ銃架ニ托シ防塵ノ處置ヲ施スヘシ(第三圖)

特ニ腔中、藥室及遊底ノ塗油ノ變敗ニ因ル油燒、發錆等ノ防止ニ注意スヘシ

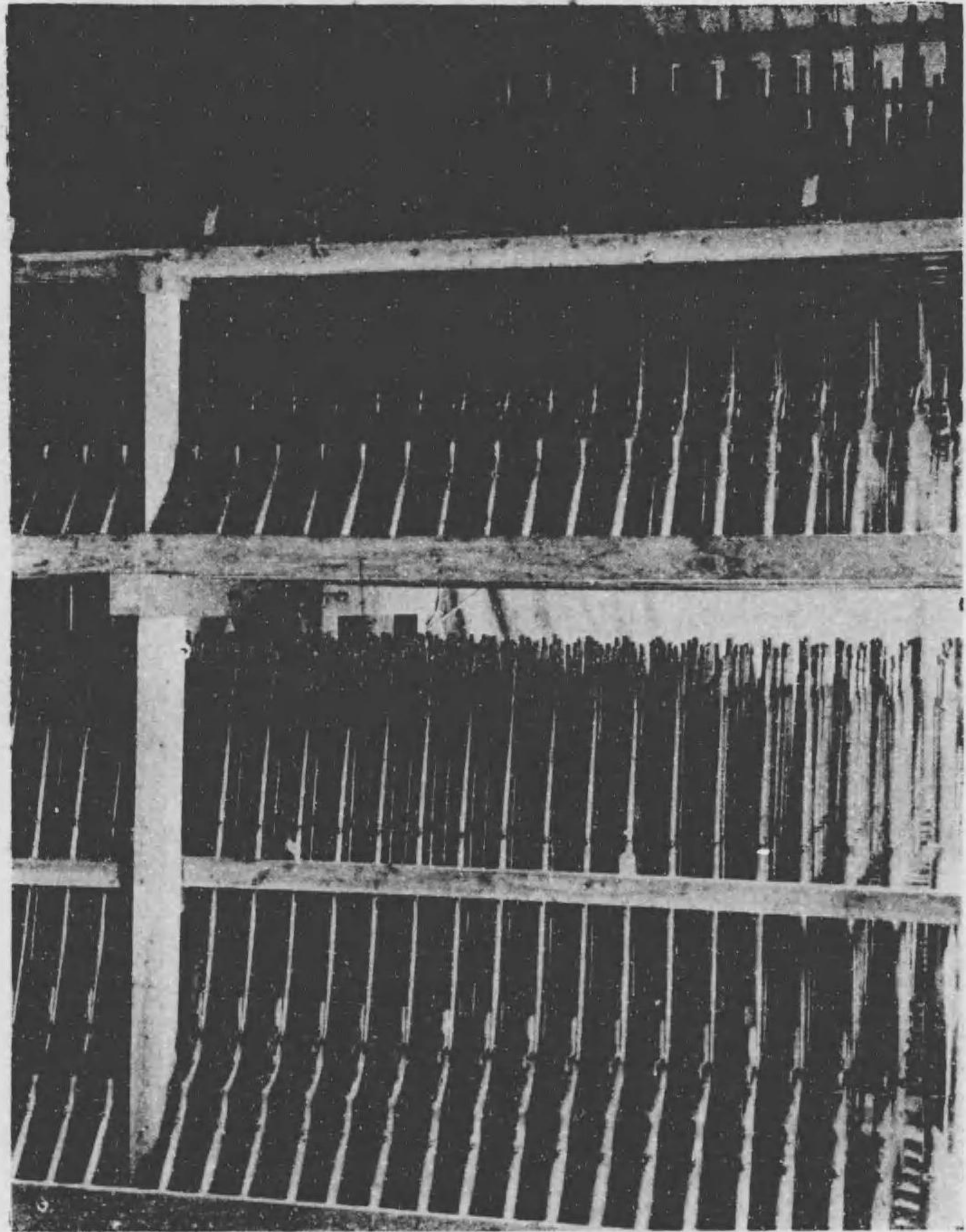
二 屬品

革具ハ成ルヘク密閉格納シ金具類ハ防錆ノ處置ヲ講シ通常箱内ニ收容スルモノトス彈藥盒ハ油壺、轉螺器ヲ脱シ員數ノ點檢ニ便ナル如ク基數ヲ定メ糸類ヲ以テ結束スヘシ

此際變形、毀損、卸ニヨル表皮ノ搔痕等ヲ生セシサル如ク注意スルヲ要ス

第三十一 一時格納ハ長期格納ノ要領ニ準スルモ要スレハ屬品類ヲ結合ノ儘格納スルコトヲ得

第三圖  
小銃ノ格納



#### 第四款 檢 査

第三十二 檢査ノ要領ハ其目的及時間並檢査人員及其素質等ニヨリ必スシモ一定シ難シト雖其一例ヲ示セハ左ノ如シ

##### 一 檢査ノ準備

- 1 机上ニ手入毛布ヲ敷キ銃ノ保護並故障、損傷等ノ標記ニ便セシメ良銃ヨリ逐次腔中損傷程度ニ應シ排列シ加修ヲ要スルモノハ之ヲ區分シ其箇所ヲ標示ス
  - 2 腔中及藥室ノ塗油ハ十分ニ除去シ視視ヲ容易ナラシム
  - 3 銃ノ履歷表、檢査並手入用具ヲ現場ニ準備ス
  - 4 排列場所ハ室外ヲ可トス
- ##### 二 檢査實施ノ要領

- 1 結合狀態ニ於テ行フ檢査  
銃ノ一側ヨリ逐次一定セル順序ニ從ヒ結合、機能、手入並損傷ヲ檢査ス

2 分解状態ニ於テ行フ検査

分解セル部品ニ付結合時検査不可能ナリシ部品ニ就キ検査ス特ニ結合時ニ於ケル検査ノ成績ヲ参照シ不良若ハ故障原因ノ探求ニ遺漏ナカラシムルヲ要ス

3 属品類ニ就テハ整備、手入及損傷ノ状態ヲ検査ス

其一 常用品ノ検査

第三十三 一般検査ノ主要ナル着眼點左ノ如シ

一 結合

著眼點	原因	摘要
銃身動搖	一 上(下)帯ノ動搖 二 銃床ノ屈撓 三 尾筒長、短小ねぢノ弛緩	往々命中精度ヲ害ス 特ニ上帯ノ動搖及過縮ニ於テ然リ
上(下)帯ばね機能不良	一 ばねノ衰損 二 小ねぢノ弛緩 三 ばね室ニ污垢附著	

床冠ノ動搖	駐栓孔ノ開大若ハ缺損	
柵杖ノ脱出	上帯ばね及鈎部衰損	
柵杖室ノ突破	柵杖挿入法ノ不良	
用心鐵ノ突起、偏倚及動搖	小ねぢノ弛緩及緊定ノ不良	
彈倉ノ動搖		
彈倉底板動搖	鈎部及駐子ノ磨滅	
尾筒長(短)小ねぢ緊定不良	一 緊定不十分	往々命中精度ヲ害ス
床尾板木ねぢ及床尾鑷環木ねぢノ弛緩	二 ねぢ孔磨滅	
銃床ト木被、銃身、尾筒及上支鐵間ノ間隙過大	一 木部ノ乾燥及衰損	間隙過大ナルモノニハ蜜蠟ヲ附著ス
床尾板ノ銃床端面トノ間隙及銃床面ヨリ突出度ノ過大	二 木ねぢノ弛緩	
合番號ノ不合		



二機能

著眼點	安全裝置機能不良	抽筒不良	蹴筒不良	受筒板ノ扛彈作用不良
原因	一 安全筒ノ磨滅 二 尾筒延長部安全筒溝ノ反起 三 逆鉤軸及逆鉤頭後面ノ磨滅	一 抽筒子爪部ノ磨滅、變形及缺損 二 ばね部ノ衰損 三 藥室不良	蹴子磨滅	一 彈倉ばねノ衰損、折損、變形 二 彈倉内部ノ軌リ
摘要				

銃

機	擊						
	長	軌	逆	一	二	早	弱
半閉鎖落	落	落	落	落	落	落	落
避害筒ノ變形、偏位、過短	一 變形引鐵第二段形部ノ磨滅、 二 逆鉤、引鐵軸ノ磨滅	一 逆鉤ト同室トノ摩擦 二 逆鉤面ト擊莖擊發段ノ 三 鉤面ト變形反起 手入不良	引鐵取附角度不良	一 逆鉤頭若ハ擊莖擊發段ノ磨滅變形 二 引鐵浪形部ノ磨滅			
遊底ノ閉鎖完全ナラサルトキニ於テ擊發可能ナルモノニシテ槓脚ト尾筒同室下部トノ間隙四耗以上ノモノハ修理ス	第二段以後ニ於ケル引鐵ノ引キ長キモノ	引鐵ヲ引クトキ指ニ軌リヲ感スルモノ	引鐵ヲ逆ニ引キタルトキ擊發スルモノ	引鐵ノ第一段ヲ引キタルトキ擊發スルモノ	遊底閉鎖ト同時ニ擊發スルモノ	引鐵ヲ僅ニ引キタルトキ擊發スルモノ	引鐵ノ抗力ノ過弱ナルモノ
				引鐵ノ抗力ノ過弱ナルモノ 精査ニシテハ 檢査ニシテハ ルニシテハ 引鐵ニシテハ 用器ヲ檢			

身			
室 藥 及 中			
傷		損 入	
曲	疵	膨	
リ	痕	眼	
一 取扱不良(轉倒、打撃等) 二、銃床ノ屈撓 三 上(下)帶ノ過締	一 手入ノ不良 二 射撃時ノ異物介在 三 異物著セル彈藥ノ裝填 四 停止場手入ノ除去法不 五 填塞シ場合ノ除去法不 良	一 腔中ニ異物(塵埃、土砂雨 雪、氷、油布等)ノ介在若ハ 被甲、硬鉛等ノ著積射撃 不良實包ニ特ニ裝藥ノ濕 潤ノ使用ニ因ルニ發火 若ハ停彈	2 スニ反射シ以テ藥室內ヲ照明 ク 鏡面ニ疵痕ヲ生セサル如 多シ 膨脹ハ上、下帶照星坐等ノ外 用ニヨリ銃身ノ局部的狹窄作 シ受クル部位ニ生スルコト

三 損傷及手入

銃	區分	著眼點	原	因	摘	要
腔						
手						
被甲附著	腐蝕	燼渣異物ノ附著	手入並手入後ノ點檢不良			
	蝕痕		手入不良特ニ手入時期ノ遲延			
			腔中磨滅特ニ腐蝕等ニヨリ腔 面粗鬆トナル銃及多數彈ヲ 連續射撃シタル時ニ多シ			
						藥室ヲ檢査スルニハ藥室檢査 鏡ヲ使用スルヲ可トス (用法) 1 鏡面ヲ後方ニシ藥室內ニ 挿入シ銃口ヲ低下スルトキ ハ頭部ハ藥室ノ弧接部ニキ 持セラレ其位置ヲ保定シ銃 尾ヨリ射入スル光線ハ鏡面
著劍(起劍)機能ノ不良			一 鈎部ノ磨滅、變形 二 ばねノ衰損若ハ折損 三 小ねぢノ弛緩			引鐵ヲ半ハ引キ之ヲ放ツトキ 舊位ニ復セサルモノ
機發擊			一 逆鈎頭部及擊發段ノ觸接 二 逆鈎ばねノ衰損 三 逆鈎ト同室トノ軌リ 四 手入不良			



銃 鉸 及 床 銃		機 尺	
傷 損		傷	
銃床ノ曲リ	銃床木部ノ龜裂 打痕(特ニ銃把部) 下部及床口 支鐵後端及床口 木附近	上支鐵上面及安 全筋溝ノ打痕 反起	鑄染ノ剝脫(特ニ照門及照星)
乾濕ノ影響	一 多シ 二 上支鐵後端木部相當溝ニ 餘裕ナシ	取扱特ニ分解結合法不良	照門部ノ打痕
			遊標ノ動搖及表尺板分畫ノ不一致
			表尺板ノ動搖
			致
			一 軸及軸孔ノ磨滅 二 裝著部間ノ遊隙
			一 ばねノ衰損 二 變形 三 駐鉤鉤部及吻合溝ノ磨滅
			遊標ノ上縁ハ表尺板ノ距離刻 線ト○・五耗以上相違セサル ヲ要ス

準 照		照 星		底 遊	
照		照 星		脚駐莖擊子筒抽	
損		損		傷 損	
表尺板ノ屈曲	表尺板ノ起伏機能不良	照尺軸ノ回轉不良	頂ノ打痕及磨滅	照星ノ偏位	坐ノ動搖
遊標ヲ裝シタル儘強握ニ テ運動シ打撃ヲ加フ	一 ばねノ衰損 二 照尺軸ノ摩擦、過縮 三 表尺板下部ノ打痕及磨滅	軸ノ磨滅、屈曲			
	表尺板ヲ約起シテ キ原位ニ復シテ キ自然ニ起立セシ 尺板ヲ起立セシメ 上ニ對シ直メタル 面ニ對シ直メタル ヲ要ス	軸ハ表尺板ノ起伏ニ伴ヒ旋回 スルヲ要ス			
				照星及照星坐ノ刻線ノ合否ヲ 檢ス	
					爪部缺損及ばね ノ衰損
					桿部ノ動搖
					筒ノ磨滅
					内外套結合用小ねぢノ弛緩

品 屬		銃 床 及 鉸 鍊				
傷		損				
油漏 合革環 油壺ノ蓋 螺不具 環ノ衰損 及	藥室掃除器ノ屈 曲及磨滅	起、ねぢ部磨滅 及鐵部ノ腐蝕	洗管ノ屈曲、反 及鐵部ノ腐蝕	銃口蓋ノ變形	欄杖ノ屈曲、頭 部動搖及ねぢ部 磨滅	木被ノ龜裂及動 搖 欄杖室底ノ破損

第三十四 射撃ノ前後ニ於テハ各部特ニ腔中藥室及射撃機能ニ影響スル部分ニ就テ検査

スヘシ發射ニ際シ「ガス」ノ多量ニ後方ニ漏出セシトキハ藥莢、圓筒頭部、駐退柵、擊莖頭、抽筒子、藥室、尾筒駐退柵室等ニ就キ異狀ヲ檢スヘシ  
命中試験前ニ於テハ損傷、結合狀態等ニシテ命中精度ニ關係アル部分ニ對シテハ十分ニ注意シ検査ノ上要スレハ修理シタル後使用スヘシ  
然ラサレハ射撃ノ結果ヲシテ往々徒勞ニ歸セシムルコトアリ

其二 格納品ノ検査

第三十五 格納前ノ検査ニ於テハ特ニ各部發錆ノ有無、部品番號ノ合否、機能ノ良否及塗油ノ適否ニ注意スヘシ

腔中及藥室ノ検査ハ特ニ綿密ニ實施スルヲ要ス

第三十六 格納間ノ検査ニ於テハ塗油ノ有効期限及各部特ニ腔中藥室ノ發錆ノ有無ニ注意スヘシ

第三節 拳銃

第一款 手入

第三十七 手入ハ概ネ小銃ニ準シテ實施スルモノトス

第二款 取扱

其一 使用上ノ注意

第三十八 拳銃ハ構造精巧ニシテ各機關連繫シテ其機能ヲ發揮スルモノナルヲ以テ單ニ一部ニ生シタル故障ト雖直ニ全般ノ機能ニ影響シ其害ヲ逐次他ノ部分ニ及シ爾後ニ於ケル處置ヲ漸次困難ナラシムルニ至ルモノトス故ニ其取扱ヲ丁寧ニシ一ノ缺點ト雖之

ヲ看過スルコトナク速ニ其原因ヲ精査シ手入若ハ修理ヲ行フノ著意ヲ必要トス

第三十九 銃ヲ使用セサルトキハ機關部ヲ閉鎖シ擊莖ヲ擊發後ノ位置ト爲シ置クハシ木、紙、布片等ヲ以テ銃口ニ假栓スルコトハ該部ノ保存上有害ナルヲ以テ避クルヲ要ス

第四十 酷暑地、極寒地及風塵甚シキ時及雨雪天ニ於ケル使用上注意スヘキ事項ハ小銃ニ準スヘシ

但風塵甚シキ時ニハ囊ノ内部ハ特ニ清潔ニシ塵埃ノ附着ヲ防止スヘシ然ラサレハ銃外部ノ磨滅著色部ノ剝脫等ヲ生ス

其二 分解結合上ノ注意

第四十一 分解結合上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 各部品ヲ他物ニ擊突セシメサルコト照星、照門ニ於テ特ニ然リ

- 二 遊底結合後ハ引鐵ヲ引キ擊莖ハ擊發後ノ位置ト爲シ置クコト
- 三 細小ナル部品多キヲ以テ跳飛紛失セシメサルコト
- 四 結合後ハ所要ノ機能ヲ検査スルコト

第三款 格納

第四十二 長期格納ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

一 銃

- 屬品類ヲ分離シ員數ノ點檢容易ナル如ク箱内ニ收容シ銃口ヲ稍、高メニ托架ニ依托シ防塵ノ處置ヲ施スヘシ
- 1 銃身ノ直接格納托架ニ接觸スル部位ニハ油ノ吸收ヲ防止スル爲亞鉛「メツキ」鐵板等ヲ介在セシムヘシ
- 2 特ニ腔中藥室及銃尾機關ノ塗油ノ變敗ニ因ル油燒發錆等ノ防止ニ注意スヘシ

二 屬品

- 3 發射ノ反動ヲ利用スルモノニ在リテハ復坐ばね、擊莖ばね、門子ばねノ衰損ヲ防ク爲ばねヲ壓縮セサル如ク銃身ヲ分解シ置クヲ可トス
  - 1 囊ハ通常囊蓋ヲ卸ヨリ脱シ、成ルヘク密閉格納シ鼓卸ハ之ヲ離脱シ格納スヘシ
  - 2 金具類ハ防錆ノ處置ヲ講シ通常箱内ニ收容スヘシ
  - 3 懸紐ハ第一篇第六章麻及綿製品ノ部ニ依ルヘシ
- 第四十三 一時格納ハ長期格納ノ要領ニ準スルモ要スレハ結合ノ儘格納スルコトヲ得

第四款 検査

第四十四 検査ニ關シテハ小銃ニ準スルノ外取扱法ニ依ルヘシ  
射撃前ニ於テハ特ニ結合状態ヲ檢スルヲ要ス

第四節 機關銃

第一款 手入

其一 常用品ノ手入

第四十五 常用品ノ手入ハ銃尾機關ヲ分解シ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

但腔中藥室ノ手入ハ要則ニ依ルヘシ

一 日常ノ手入

銃	區分	要領	摘要
一	普通分解ヲ行ヒ刷毛若ハ布片等ヲ以テ各 部品ノ舊油及塵埃ヲ拭淨シタル後刷毛若ハ	塗油多量ニ失スルトキハ徒ニ塵埃ノ附 著ヲ増加スルノミナラス過剩ノ油ハ底	

部木	部鐵ノ他其	關機尾
布片ヲ以テ外部ヲ拭淨シ塵埃ヲ除去スヘシ 木部ニ附著セル油ハ十分ニ拭淨スヘシ	布片ヲ以テ舊油及塵埃ヲ拭淨シタル後油布ヲ 以テ塗油スヘシ 軸部、摩擦部ニハ稍、多量ニ塗油スヘシ	油布ヲ以テ鐵部ノ摩擦部ニハ稍、多量ニ其 他ノ部分ニハ輕ク塗油スヘシ 二 圓筒ノ内外部、隅角部、溝部及擊莖ばね 室等ノ拭淨塗油ニハ圓筒掃除桿ヲ使用スル ヲ可トス 部ニ滯溜シ外部ニ漏出流下シテ銃床ヲ 汚損シ且射擊ニ方リ射手ノ眼ニ入ル等 却テ有害ナル結果ヲ來スヲ以テ常ニ其 量ヲ適度ナラシムルヲ要ス 「ガス」漏レヲ生シ易キ部分例へハ銃 身、放熱筒ノ「ガス」漏孔附近、規整子及 「ガス」誘導螺ノねぢ部附近等ノ手入ニ ハ特ニ注意シ時期ヲ失セス之ヲ行フコ ト必要ナリ又手入ニ方リテハ該部ヲ強 擦研磨スヘカラス

二 射擊前ノ手入

腔中藥室ノ外日常手入ニ準スルモ機能ニ關係アル要部ハ特ニ丁寧ニ拭淨シ樞軸部、  
摩擦部等ニハ稍、多量ニ塗油シ且油ノ普及ヲ十分ナラシムル爲接觸部位ヲ廻轉シ若

銃



ハ相互ニ異動セシムヘシ  
 油槽ハ要スレハ分解ヲ行ヒ洗滌用油ヲ以テ汚物ヲ除キタル後舊油ヲ拭淨スヘシ  
 三 射撃間ノ手入

機關銃ハ手入ヲ行ハスシテ相當多數ノ射撃ニ耐ヘ得ヘシト雖發射彈數ノ累加ニ伴ヒ  
 施油ノ缺乏、燼渣ノ堆積等ハ逐次機能ヲ害シ故障ヲ發生セシムルニ至ルヲ以テ射撃  
 間機會アル毎ニ其時ノ狀況ニ適應シテ手入ヲ行フコト必要ナリ特ニ多數彈發射後手  
 入ヲ行ハスシテ放置スルトキハ各部ノ冷却ト共ニ燼渣膠著シ機能ヲ害シ手入ヲ困難  
 ナラシムルヲ以テ射撃後成ルヘク速ニ各部ノ拭淨ヲ行ヒ機能ヲ調整スルヲ要ス  
 而シテ之カ實施ノ要領ハ利用シ得ヘキ時間ノ長短ニヨリテ異ルヘシト雖主トシテ機  
 能上故障ノ基因タルヘキ要部ヲ檢シ發射ノ爲渣燼ノ附著シ易キ部位（腔中及藥室圓  
 筒包底面、同擊莖室、銃身後端面、活塞頭部、「ガス」唧筒内部、規整子等）又ハ異物  
 ノ介在シ易キ部位（藥室、閃子室、裝彈機室、尾筒内部等）ノ手入ヲ行ヒ或ハ摩擦多

四 射撃後ノ手入  
 キ部分ニ塗油スル等狀況ニ應シ機敏ニ點檢、手入ヲ行フヲ要ス  
 ・日常手入ニ準スルノ外左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

區分	要領	摘要
銃尾機關	「ガス」ヲ蒙リ燼渣附著セル部分ハ機ヲ失セス成ルヘク速ニ腔中藥室ニ準シ腔中洗滌液又ハ礮砂液ニテ洗滌スルカ又ハ腔中油ニテ拭淨スヘシ	活塞頭部、圓筒包底面、同擊莖室及擊莖先端等直接「ガス」ヲ蒙ル部分ヲ放置スルトキハ腐蝕シテ射撃機能ヲ害スルニ至ルヲ以テ特ニ手入ニ注意スルヲ要ス
其	一 特別分解ヲ行ヒ手入スルモノトス 二 規整子「ガス」唧筒、銃身外部ノ「ガス」漏孔附近ハ腔中洗滌液又ハ礮砂液ニテ洗滌スルカ若ハ腔中油ニテ拭淨シ其他ノ部分ハ布片ニテ燼渣、污垢ヲ拭淨シタル後含油布片ヲ以テ塗油スヘシ	「ガス」漏孔附近ノ如キ「ガス」漏レヲ生シ易キ部分ノ手入ハ特ニ注意シ該部ノ腐蝕ヲ豫防スルヲ要ス又急劇ニ燼渣ヲ除去セントシテ研磨強擦スヘカラス
鐵	三 「ガス」唧筒内部等ニシテ燼渣ノ膠著シ洗滌ニヨリ除去困難ナル部分ノ手入ニハ「ガス」搔ヲ使用ス此際ねぢ部ニ觸レサル如ク注意スヘシ	

三 長期連續使用後又ハ雨雪風塵ヲ蒙リタル場合ノ手入  
日常手入ニ準スルノ外左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

區分	要	領
銃及鐵 尾其 機他 關ノ部	一 雨雪ニ遇ヒタル後ノ手入ニ於テハ乾布ヲ以テ水氣ヲ十分除去スルコト必要ナリ 特ニ手入困難ナル隅角部等ニ水氣ノ殘留セサル如ク注意スヘシ 二 砂塵ノ除去ニ方リテハ之ヲ其面上ニ壓著セサル如ク注意スヘシ	
木著	一 泥土附著セシトキハ過度ニ摩擦スルコトナク且他ヲ汚損セサル如ク拭淨スヘシ	
部色	二 塗料塗施部ハ他部ニ害ヲ及ス虞ナキ場合ニ限り要スレハ水洗スルコトヲ得	
及部	三 塗漆剝脫シタルモノハ該部ヲ揮發油ニテ拭淨シタル後ニ亞麻仁油ヲ塗布シ其吸 收ヲ待チ乾布ヲ以テ拭磨スヘシ	

其二 格納品ノ手入

第四十六 格納品ノ手入ハ小銃ニ準シテ實施スルモノトス

第二款 取扱

其一 使用上ノ注意

第四十七 機關銃ノ機關部ハ各部連繫シテ其機能ヲ發揮スルモノナルヲ以テ單ニ一部ニ生シタル故障ト雖直ニ銃全般ノ機能ニ影響シ其害ヲ逐次他ノ部品ニ及シ爾後ニ於ケル處置ヲ漸次困難ナラシムルニ至ルモノトス故ニ其取扱ヲ丁寧ニシ一ノ缺點ト雖之ヲ看過スルコトナク速ニ其原因ヲ精査シ手入、交換若ハ修理ヲ行フノ著意ヲ必要トス

第四十八 多數彈ヲ連續發射スルトキハ銃身溫度急昇シ銃身命數ヲ著シク短縮セシムルニ至ルヲ以テ各銃ノ常用限度ヲ越ヘサルコトニ注意スルト共ニ狀況ノ許ス限リ銃ヲ冷却スルノ處置ヲ講スルコト必要ナリ

第四十九 機關部及實包ハ塗油缺乏スルトキハ故障ヲ生起シ易キヲ以テ油槽ノ油量ノ點檢ヲ怠ルヘカラス

塗油ヲ確實ナラシムル爲射擊開始前油導子ヲ壓シテ油ノ漏出ヲ促スヲ可トス  
油ノ品質竝寒暑ニ依リ油ノ漏出狀況ニ大ナル差異アルコトニ注意スルヲ要ス

第五十 銃ヲ使用セサルトキハ機關部ヲ閉鎖シ擊莖ヲ擊發後ノ位置ニ置キ銃口ニハ銃口蓋、銃覆ヲ裝スヘシ

發射ノ反動ヲ利用スル機關銃ニ在リテハ復坐ばねヲ緩メ置クヲ可トス  
木、紙、布片等ヲ以テ銃口ニ假栓スルコトハ該部ノ保存上有害ナルヲ以テ避クルヲ要ス

第五十一 空撃ハ保存上有害ナルヲ以テ必要ナル場合ノ外之ヲ避クルヲ要ス

第五十二 各部品竝屬品匣内ノ豫備品ハ主體ニ適合セシメ置クヲ要ス

又豫備品ハ本部品ノ故障ニ際シ直ニ使用シ得ル如ク整備シ置キ平素適宜交換シ交互ニ使用セサルモノトス

第五十三 屬品匣、中箱、器具類等ハ其填寫ヲ確實ニシ要スレハ木綿又ハ苧屑等ノ類ヲ以テ空隙ヲ填塞シ運動間收容品ノ動搖ヲ防クヲ要ス

第五十四 酷暑地ニ於ケル使用上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 炎天下ニ於テハ油ノ流出、乾燥竝鐵部ノ發錆速カナルヲ以テ油ノ選擇、補充ニ注意シ塗油ノ量及回数ヲ増スコト

塗油ノ流出ヲ防止スル爲必要以外ノ場合ニハ銃ヲ水平ニ靜置スルヲ可トス  
各種油壺ノ口栓ハ特ニ確實ニ密塞シテ油ノ浸出ヲ防止スルコトヲ必要ナリ

二 射擊間放熱ヲ良好ナラシムル爲狀況之ヲ許セハ時々銃尾機關ヲ分解スルカ已ムヲ得サレハ之ヲ開キテ腔中ノ通風冷却ニ勉ムルコト  
要スレハ銃身内外ニ扇風ヲ通シ又放熱筒ニ濕布ノ類ヲ卷クヘシ

三 日光ノ直射ニ依リ銃身ハ加熱シ木部ハ變歪ヲ生スルニ至ルヲ以テ狀況之ヲ許セハ銃覆等ヲ以テ覆フカ日蔭若ハ通風良好ナル場所ニ置クコト

四 氣温ノ上昇ニ伴ヒ一般ニ銃尾機關ノ運動ハ圓滑トナルヲ常トスルヲ以テ規整子ハ成ルヘク必要ノ程度ニ止ムルカ如キ小分畫ヲ採用スルコト

第五十五 極寒地ニ於ケル使用上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 機關部ノ塗油凍結シテ機能ヲ害シ又ハ破損スルコトアルヲ以テ耐寒性「スピンドル」油已ムヲ得サレハ「スピンドル」油ニ燈油ヲ混合シタルモノヲ使用スルカ或ハ適宜塗油ノ量ヲ減少スルカ又ハ輕ク塗油ヲ拭除スルコト

二 燈油ハ鐵部發錆ノ媒介ヲナスヲ以テ之ヲ混合スル場合ハ其量ヲ適當ニシ且使用後ノ手入ニ注意シテ拭淨ヲ頻繁ナラシムルコト

三 特ニ混合油ヲ使用シタル儘室内温暖ナル場所ニ長ク置クトキハ發錆シ易キヲ以テ注意スルコト

2 油ヲ拭除シテ射擊スル場合ニ在リテモ相當多數彈連發ヲナシ得ルト雖機關部ノ

摩擦ヲ顧慮シ狀況之ヲ許セハ通常數十發連發後輕ク注油スルヲ可トス  
發錆ノ虞アルヲ以テ塗油ヲ拭除セル儘ノ銃ヲ室内ニ放置セサルコト

3 油槽内ノ油ハ適當ノモノヲ得サルトキハ成ルヘク使用直前ニ注油スルヲ可トス  
油槽ニ依ル實包ノ塗油不能ナルトキハ刷毛ニ直接施油スルカ又ハ銃ノ熱スルマテ油布ヲ以テ藥莢ノ外面ニ塗油スルヲ可トス

二 射擊ニ先チ必ス空撃ヲ行ヒ擊發力ヲ檢查シ若過弱ナリト認メタルトキハ部品ノ異狀ノ有無、抗力ノ適否、手入ノ良否等ヲ檢シテ之ヲ處置シ擊發ニ支障ナカラシメ置クコト

活塞ノ前進緩慢ニシテ擊發不能ノ場合ニ於テハ先ツ手力ニヨリ活塞ヲ數十回進退シ要スレハ若干發ノ單發射擊ヲ行ヒタル後連續射擊ニ移ルヲ可トス

三 氣温零度以下ニ於テ射擊スルトキハ往々彈丸ノ蠟劑固著ノ爲送彈及抽筒機能ヲ妨

ケ連續射撃困難トナルコトアルヲ以テ豫メ彈丸ノ蠟劑ヲ拭除シ置クコト

四 火藥燼渣ト脂油ト混シテ凍結シタルモノ及蠟劑等活塞先端及圓筒頭部附近ニ膠著シテ故障ヲ生スルコトアリ此等ハ銃身冷却後ハ除去困難ナルヲ以テ成シ得レハ射撃間又ハ射撃直後ニ於テ之ヲ拭除スルコト

五 衰損セルばね類ハ新品ト交換スルコト

六 銃ヲ使用セサル間ハ成ルヘク掩蔽部、家屋内等温キ場所ニ控置シテ凍結ヲ防キ已ムヲ得ス屋外ニ配置スルトキハ成ルヘク毛布、蓆等ヲ以テ之ヲ掩ヒ爲シ得レハ内部ニ火氣ヲ收容シ以テ不時ノ射撃開始ニ支障ナカラシムルコト

銃ヲ屋外ヨリ室内ニ携行スルトキハ室内ノ水分鐵部ニ凝著シテ發錆ノ基因ヲ爲スノミナラス水分ハ機關部ニ浸入シ之ヲ室外ニ搬出スルヤ凍結シテ機能ヲ害スルコトアリ故ニ室内搬入後ハ十分之ヲ拭淨シ特ニ腔中ノ手入ヲ勵行セサルヘカラス又成シ得レハ氣温ノ急變ニ遭遇セシメサルヲ可トス

七 屬品中ノ豫備品ニハ「ペトロラタム」ヲ塗布スルコトナク「スピンドル」油若ハ「ワ

セリン」ヲ輕ク使用スルコト是急遽ニ豫備品ノ交換ヲ要スルトキ「ペトロラタム」固著シテ加熱スルニアラサレハ除去シ難ケレハナリ

第五十六 風塵甚シキ時ニ於ケル使用上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 塵埃ノ附着侵入ヲ防ク爲外部ノ塗油量ヲ輕減シ且成ルヘク使用直前マテ銃口蓋、銃覆、銃身覆等ヲ裝シ裝填孔部ハ適宜ノ方法ヲ以テ閉塞スルコト

銃覆等ノ内部ハ特ニ清潔ニシ塵埃ノ附着ヲ防止スヘシ然ラサレハ銃外部ノ搔痕、著色部ノ剝脫等ヲ生ス

銃覆等ヲ施シタルトキハ其下方ヲモ開放セサルコトニ注意スヘシ銃ヲ接地セシメアル場合殊ニ然リトス

二 塵埃ヲ蒙リタル後射撃ヲ實施スル場合ニハ狀況之ヲ許セハ腔中ヲ拭淨シ特ニ銃口部ヲ點檢スルヲ要ス

第五十七 雨雪天ニ於ケル使用上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 雨雪ニ遇ヒタル銃ハ時ヲ得ハ直ニ手入ヲ實施スルコト  
銃ノ内外部ニ附着セル水分ハ發錆ヲ速ナラシムルノミナラス其儘射擊スルトキハ腔  
中ニ存スル水滴ノ爲銃身膨脹ヲ生スルコトアレハナリ
- 二 雨雪ノ腔中ニ浸入スルヲ防ク爲「ワセリン」、「ペトロラタム」又ハ布片等ヲ以テ銃  
口部ヲ填塞スルコトハ避クルヲ要ス銃口部ヲ填塞シタル儘射擊スルトキハ銃身膨脹  
ヲ生起スルコトアレハナリ

其二 分解結合上ノ注意

第五十八 分解結合上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 各部品ヲ他物ニ擊突セシメサルコト照星、照門ニ於テ特ニ然リ
- 二 駐栓ヲ拔取ル際之ヲ飛散セシメサル爲成ルヘク左掌ニテ該部ヲ包ミ拇指及食指ヲ  
以テ栓拔ヲ保持シ駐栓頭部ヲ鎚打スルヲ可トス
- 三 遊底結合後ハ引鐵ヲ引キ遊底ヲ閉鎖シ置クコト

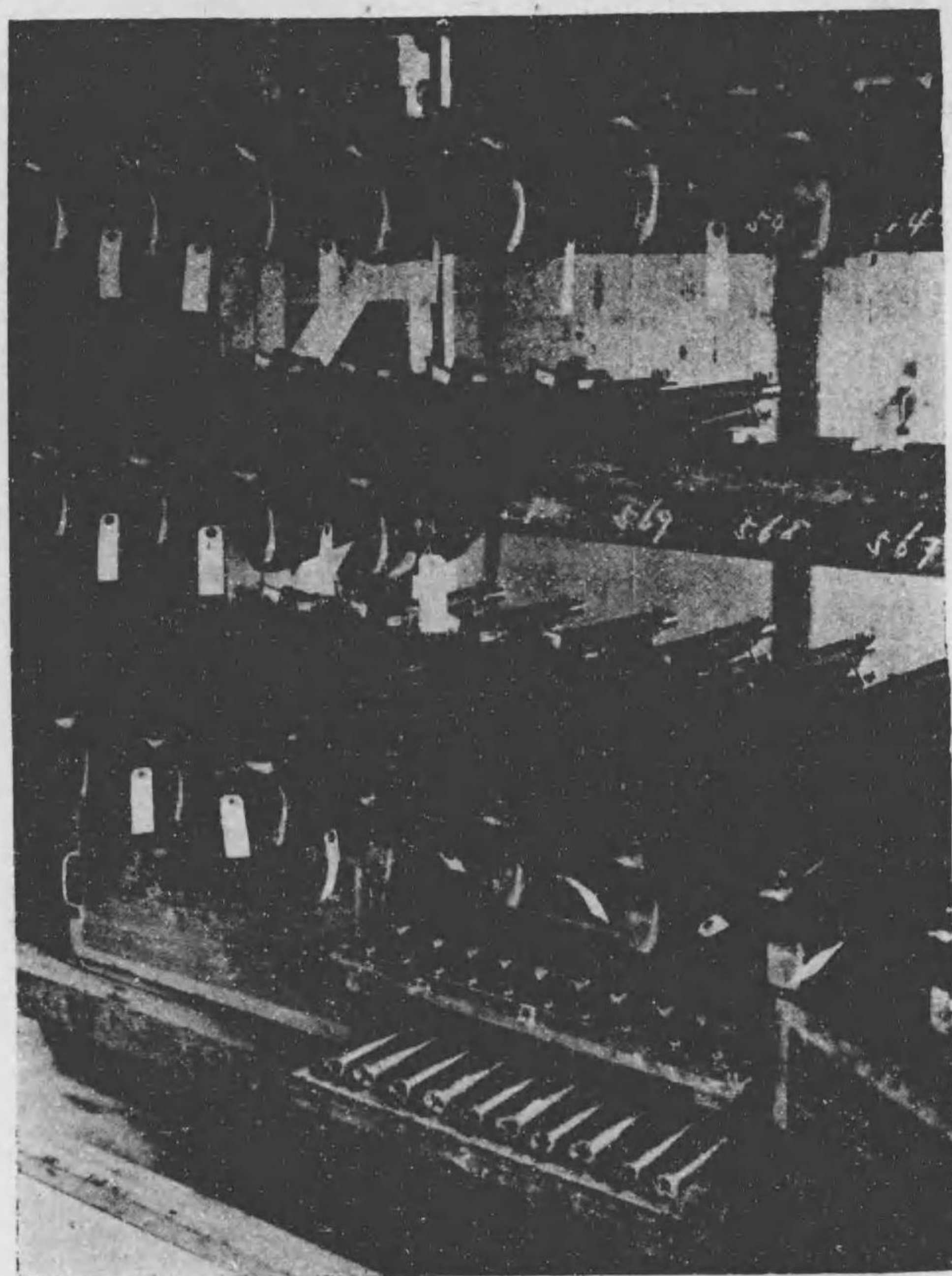
四 結合後ハ所要ノ機能ヲ検査スルコト

第三款 格 納

第五十九 長期格納ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

- 一 銃  
塵埃及外氣ノ交感尠ク且出納ニ便ナル位置ヲ選ヒ脚ヨリ脱シ（要スレハ銃身、放熱  
筒ヲ分離シ）又ハ装シタル儘格納スヘシ（第四圖）
- 1 豫備銃身ハ包布又ハ銃身囊ヨリ脱シ銃身孔蓋準梁覆ヲ除キ托架ニ依托シ若ハ箱  
内ニ收容ス
- 2 銃尾ハ之ヲ閉チ擊發機關ハ發射後ノ位置ニ置キ復坐ばねハ衰損ヲ防止スル爲抽  
出シ置クヲ可トス
- 3 銃身、尾筒等直接格納用具ニ接スル部位ニハ油ノ吸收ヲ防止スル爲亞鉛「メツ  
キ」鐵板等ヲ介在セシムヘシ

第四圖  
機關銃ノ格納



4 特ニ腔中及銃尾機關ノ塗油ノ變敗ニ因ル油燒、發錆等ノ防止ニ注意スヘシ  
5 銃ヲ離脱シタル脚ハ要スレハ折疊ミ格納スルコトヲ得

二 屬品

1 屬品匣收入品及豫備品ハ屬品匣又ハ屬品差ヨリ離脱シ發錆ノ虞アルモノハ防錆  
裝置ヲ施セル箱又ハ架内ニ格納ス特ニ復坐ばねハ屈曲セシメサルヲ要ス  
2 革具ハ成ルヘク密閉格納シ麻具ハ第一篇第六章麻及綿製品ノ部ニ依ルヘシ  
第六十 一時格納ハ長期格納ノ要領ニ準スルモ要スレハ各部ヲ結合ノ儘格納スルコトヲ  
得

第四款 檢 査

第六十一 檢査ノ要領ハ小銃ニ準シテ實施スルモノトス

其一 常用品ノ檢査

銃

第六十二 一般検査ノ主要ナル着眼點左ノ如シ  
一 結合

銃身ノ動搖	規整子ノ螺入困難及動搖	放熱筒、裝填架、「ガス」唧筒、油槽、用心鐵、床尾若ハ銃床ノ動搖	尾筒放熱筒結合部ノ弛緩
一 銃身駐定部ノ磨滅 二 緊定部ノ緊定不良	一 ねち部ノ腐蝕、變形 二 駐子部ノ磨滅、衰損	一 過度修理法不良 二 射擊ニヨル震動 三 等ノ諸原因ニヨル緊定部、鉤止部、軸或ハ軸孔等ノ磨滅開大	一 取扱ノ粗暴、分解結合ノ過度 二 射擊等ニヨルねち部、銃著部ノ磨滅、變形
摘	射擊後ノ手入ニ注意ス		命中精度ヲ害シ且活塞ノ軋リヲ生ス

銃ト脚(架)トノ結合困難	銃ト脚(架)トノ結合部ノ動搖	合番號ノ不合	二機能	著眼點	銃尾機關ノ軋	遊底閉鎖ノ狀態
結合部特ニ駐栓並駐栓孔部ノ變形、反起	結合部特ニ駐栓ノ磨滅並駐栓孔ノ開大	整備不十分、取扱不良		原因	一 摺合ハ七適合不良 二 反起、異物ノ介在 三 要部部品特ニ樞軸部ノ變形 四 復坐ばねノ衰損、變形	圓筒駐止部ノ磨滅
摘	一 手入並綿密ナル摺合ハセ、適合ヲ行フ 二 反起、變形、衰損セル部品ハ修理若ハ交換ス			摘要	一 藥室ノ後端ニ反起ヲ生シ 二 裝彈作用ヲ害ス 一 圓筒駐止部ノ磨滅 二 損傷シ抽筒作用ヲ害ス	



遊ノ 底ノ 閉ノ 鎖ノ 態	圓筒頭部藥室後端ヨリ過 度ニ後退	一 藥室ノ前接部ノ磨滅ニヨル 二 藥身ノ前段部ノ磨滅ニヨル銃 三 筒ノ前準梁部ノ磨滅ニヨル 四 筒ノ動搖	雷管脫出「ガス」漏等ヲ生ス
	一 逆鉤又ハ逆鉤駐子鉤部ノ 二 逆鉤ノ磨滅、缺損 三 逆鉤ノ變形、軸部ノ軋 四 逆鉤ノ折損、引鐵ばねノ衰 五 逆鉤ノ折損、缺損若ハ過	不發ノ原因ハ左ノ如シ 一 活塞後退不定 二 擊莖ノ折損、缺損若ハ 三 過短 四 擊莖ノ後端圓筒室、圓筒 五 擊莖ノ介在	
擊發機能不良	一 逆鉤又ハ逆鉤駐子鉤部ノ 二 逆鉤ノ磨滅、缺損 三 逆鉤ノ變形、軸部ノ軋 四 逆鉤ノ折損、引鐵ばねノ衰 五 逆鉤ノ折損、缺損若ハ過	一 逆鉤又ハ逆鉤駐子鉤部ノ 二 逆鉤ノ磨滅、缺損 三 逆鉤ノ變形、軸部ノ軋 四 逆鉤ノ折損、引鐵ばねノ衰 五 逆鉤ノ折損、缺損若ハ過	一 逆鉤又ハ逆鉤駐子鉤部ノ 二 逆鉤ノ磨滅、缺損 三 逆鉤ノ變形、軸部ノ軋 四 逆鉤ノ折損、引鐵ばねノ衰 五 逆鉤ノ折損、缺損若ハ過
	一 逆鉤又ハ逆鉤駐子鉤部ノ 二 逆鉤ノ磨滅、缺損 三 逆鉤ノ變形、軸部ノ軋 四 逆鉤ノ折損、引鐵ばねノ衰 五 逆鉤ノ折損、缺損若ハ過	一 逆鉤又ハ逆鉤駐子鉤部ノ 二 逆鉤ノ磨滅、缺損 三 逆鉤ノ變形、軸部ノ軋 四 逆鉤ノ折損、引鐵ばねノ衰 五 逆鉤ノ折損、缺損若ハ過	
抽筒不良	一 抽筒子ノ缺損、磨滅 二 抽筒子ノ變形、磨滅 三 抽筒子ノ軸坐ノ動搖若ハばね 四 藥室ノ腐蝕、膨脹若ハ異 五 油槽ニ依ル實包塗油ノ不 足	一 抽筒子ノ缺損、磨滅 二 抽筒子ノ變形、磨滅 三 抽筒子ノ軸坐ノ動搖若ハばね 四 藥室ノ腐蝕、膨脹若ハ異 五 油槽ニ依ル實包塗油ノ不 足	
	一 抽筒子ノ缺損、磨滅 二 抽筒子ノ變形、磨滅 三 抽筒子ノ軸坐ノ動搖若ハばね 四 藥室ノ腐蝕、膨脹若ハ異 五 油槽ニ依ル實包塗油ノ不 足		
蹴筒不良	一 蹴筒子ノ變形、磨滅 二 蹴筒子ノ軸坐ノ動搖若ハばね 三 蹴筒子ノ折損、引鐵ばねノ衰 四 蹴筒子ノ後退不足	一 蹴筒子ノ變形、磨滅 二 蹴筒子ノ軸坐ノ動搖若ハばね 三 蹴筒子ノ折損、引鐵ばねノ衰 四 蹴筒子ノ後退不足	
	一 蹴筒子ノ變形、磨滅 二 蹴筒子ノ軸坐ノ動搖若ハばね 三 蹴筒子ノ折損、引鐵ばねノ衰 四 蹴筒子ノ後退不足		

三 損傷及手入

送彈機能不良	一 鉤部、軸部、駐止部、爪 二 缺損、反起、磨滅、變形 三 ばねノ動搖、衰損、折損 四 活塞ノ後退不足 五 實包ノ占位不良
--------	---

身	銃	腔藥 中室 及	區分	著眼點	原	因	摘	要
	外	手入	小銃ニ準ス					
部	損傷	「ガス」誘導螺並同室ねぢ部 腐蝕						手入ヲ十分ニスルヲ 要スルコトハ避クルヲ 要ス
傷	銃身固定部ノ反起、磨滅 變形、龜裂							
銃口部ノ打痕								



關		機				
子	門	筒				
傷						
反動受面門子受痕ノ不正	龜裂、缺損	擊莖室ノ反起、腐蝕	下面ノ龜裂	駐止部ノ磨滅、反起	抽筒子室及同ばね室ノ變形、缺損	起準梁、蹴子溝ノ磨滅、反
四	三 二 一	二 一	三 二 一	自然衰損ナルモ空撃ノ反復ニヨリ促進ス	一 二	二 一
門子受面ノ不良	摺合ハセ適合不良 活塞後退過激 「ガス」壓ノ過強	撃莖折損 手入不良	門子受ノ摺合ハセ不良 抽筒困難 活塞後退ノ過激		抽筒子前端部銃身後端面ニ衝突 分解結合法ノ不良	圓筒ノ動搖 蹴子ノ變形、動搖

尾		銃		
圓		塞	活	
損		入	手	傷
前端突出部ノ衝痕反起、缺損	包底面ノ凹痕	擊針孔開大	擊莖室ノ腐蝕、錆痕	逆鉤、積桿等鉤部ノ磨滅、缺損、動搖
二	一	三 二 一		龜裂
圓筒ノ過進	銃身ノ結合不良	孔壁ノ腐蝕 擊針ノ屈曲 雷管突破		「ガス」壓ノ過強
		雷管ノ衝撃特ニ起緣室ノ大ナルモノニ多ク生起ス		引鐵積桿ノ操作不良
				尾筒放熱筒結合部ノ弛動、裝填架及彈送止ノ動搖 手入及取扱ノ不良



品 屬		(架) 脚			
傷損	入手	備 整	能 機 及 傷 損		
衰損、折損、缺損及變形	發錆、汚垢、燼渣ノ膠著 施油缺乏	員 數 ノ 過 不 足 適 合 不 良	姿勢ノ變換及折疊機能ノ不良	各部鉸著ノ弛緩及緊定機能不良	銃トノ結合部ノ開大、變形、動搖 樞軸部、連接部ノ動搖、龜裂、缺損
			一 自然衰損 二 取扱不良		

第六十三 射撃前後ニ於テハ各部特ニ腔中藥室及射撃機能ニ影響スル部分ニ就テ検査スヘシ

命中試験前ニ於テハ損傷、結合状態等ニシテ命中精度ニ關係アル部分ニ對シテハ十分ニ注意シ検査ノ上要スレハ修理シタル後使用スヘシ然ラサレハ射撃ノ結果ヲシテ往々徒勞ニ歸セシムルコトアリ

擊莖ヲ交換セシトキハ單發射撃ヲ行ヒ其長短適否ヲ検査ヘシ

擊莖過長ナルトキハ發射後雷管ノ凹陷セル底部ニ小孔ヲ穿チ或ハ擊莖頭ニテ活塞ノ前進ヲ支ヘ爲ニ折損スルコトアリ

過短ナルトキハ不發ナルカ又ハ雷管中心ニ擊莖頭大ノ圓孔ヲ穿ツコトアリ

第六十四 射撃間常ニ機關部運轉ノ状態ニ注意シ其異徴ヲ認ムルヤ機敏適切ノ處置ヲ執ルハ故障ノ累加増大ヲ防止スル爲殊ニ必要ニシテ圓滑ナル射撃ヲ施行シ得ル主要條件ナリトス

射撃間主トシテ検査ヘキ事項左ノ如シ

- 一 「ガス」壓ノ適否

特ニ爆音ノ調子ニ留意スルコト緊要ナリ

二 抽筒及蹴筒作用ノ良否

三 不發及突込ノ有無

四 送彈作用ノ良否

五 油槽内ノ油ノ有無

六 屢、擊殼藥莢ニ就キ雷管衝痕ノ狀況及藥莢外面ニ於ケル塗油ノ良否等ヲ檢スヘシ

第六十五 「ガス」壓ノ調節 「ガス」ノ一部ヲ利用シ發射機構ノ原動力トスル機關銃類ニ

在リテハ「ガス」壓ノ調節ハ機能調整ノ主體ヲ爲スモノニシテ其適否ハ實ニ其銃ノ運命ヲ左右スルモノナリ故ニ之カ決定ハ極メテ慎重ニ行ハサルヘカラス

「ガス」壓ノ調節適當ナラサルトキハ故障ヲ頻發スルノミナラス銃ヲ損傷シ易ク且命中精度ヲ害スルニ至ルモノトス

「ガス」壓ノ決定 「ガス」壓ヲ決定スルニ方リテハ各部品ノ適合及損傷ニ注意シ手入ヲ

完全ニ行フ等此等綜合機能ヲ點檢精査シタル後實射ニヨリ最モ適當ナル「ガス」壓ヲ求ムルコト必要ナリ

往々ニシテ各部品ノ摺リ合ハセ適合並塗油等ニ十分注意ヲ拂フコトナク射撃ヲ實施シ機能不良ナルトキ其原因「ガス」壓ニ在リト速斷シ單ニ其増減ノミニヨリテ之ヲ解決セントシ遂ニ適正ナル調節ヲ爲シ得サルモノアルカ如キ大ナル誤リナリ

決定スヘキ「ガス」壓ハ射撃ニ故障ヲ生起セサル限り小ナラシムルヲ以テ原則トス

「ガス」壓ノ點檢修正 「ガス」壓ハ一度決定後ハ安ニ變更スヘキモノニアラスト雖亦必スシモ之ヲ墨守スヘキモノニアラス諸種ノ關係ニ依リ種々變化スヘキモノナルヲ以テ狀況ニ應シテ適切ニ修正スルノ著意ヲ必要トス

「ガス」壓ヲ點檢修正スヘキ時期ハ之ヲ一定シ難シト雖概ネ次ノ如キ場合ニ於テハ點檢修正スルヲ可トス

一 新ニ銃ノ支給ヲ受ケタルトキ

- 二 銃ニ大修理ヲ加ヘタルトキ
- 三 主ナル部位ヲ交換シタルトキ
- 四 特ニ多數彈ヲ發射セシ後
- 五 氣象ノ著シク變化セルトキ
- 六 戰鬪射擊等特殊射擊ヲ行ハントスル前
- 七 潤滑油ヲ變更セシトキ
- 八 射擊中活塞後退不足ニ伴フ送彈不良、突込ミ、後退過激ニヨル擊突及過激ナル抽筒、蹴筒作用等ヲ頻發スルトキ

其二 格納品ノ檢查

第六十六 格納品ノ檢查ハ小銃ニ準シテ實施スルモノトス

第四章 擲彈筒

第一節 手入

第一款 常用品ノ手入

第六十七 常用品ノ手入ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

一 日常ノ手入

通常筒、柄桿、蓋板等ヲ離脱シ銃ニ準シテ實施スヘシ

二 射擊間及射擊後ノ手入

擲彈筒ハ射擊ノ際藥莢ヲ使用セサルヲ以テ擊發機ノ上部ハ每發直接ニ火藥「ガス」ヲ蒙リテ燼渣堆積シ要部ヲ發錆セシメ且彈丸ノ裝填及擊發機能ヲ害スルコトアリ信號彈等ノ如ク黑色藥ヲ裝藥トスルモノ特ニ然リ故ニ射擊間餘暇アル毎ニ又射擊直後十

分ナル手入ヲ行フノ餘裕ナキトキハ次ノ要領ニ依リ手入ヲ實施スヘシ

1 筒腔及筒底ねぢ部等ノ燼渣ヲ拭淨後塗油ス

2 柄身、柄桿頭、回轉筒竝整度器内部及擊發機關等燼渣、塵埃ノ附著シ易キ部分ハ分解ノ上拭淨塗油ス

分解手入ノ暇ナキトキハ回轉筒竝柄桿ノ窓部及筒腔ヨリ油布ヲ挿入シテ擊莖室外面、擊針孔等ノ燼渣ヲ除去シテ塗油ス

射擊後ハ各部ヲ分解シ銃ニ準シ手入ヲ實施スヘシ

注意

本章ニ於テ單ニ塗油ト稱スルハ「スピンドル」油ヲ示スモノトス

第二款 格納品ノ手入

第六十八 格納品ノ手入ハ銃ニ準シテ實施スルモノトス

第二節 取扱

第六十九 使用上注意スヘキ事項ハ概ネ銃ニ準スルノ外左ノ如シ

- 一 射擊ノ際駐板ノ位置ハ射擊ノ精度竝操作ニ關係アルノミナラス筒ノ保存ニ影響スルコト大ナルヲ以テ土質過度ニ硬キニ失スルコトナク又礫石等ヲ混セサル位置ヲ選ビ且發射ノ衝力ヲ駐板上等齊ニ受ケシムル如ク土地ノ小起伏ヲ利用スルカ又ハ土地ヲ掘開シ斜面ヲ附シ駐板ヲ平等ニ接地セシムルカ又ハ中介物ヲ使用シテ底板ノ全面ヲ支持スルコトニ留意スルコト特ニ岩石地、凍結地ニ於テ然リトス
- 中介物ハ藁束、卷布、高粱束、砂囊等ヲ以テ十分硬ク作り成ルヘク彈性ヲ有セシメサルヲ要ス

- 二 連續射擊ニ於テハ往々筒内ニ燼渣堆積シ彈丸ヲ裝填スルモ正シク筒底ニ達スルコトナク筒ノ中途ニ停滯スルコトアルヲ以テ射擊間ト雖筒内ノ手入及彈丸ノ點檢拭淨

擲彈筒



ヲ勵行スルコト

停滯セシ彈丸ヲ強テ筒底ニ達セシメントシテ筒口ヨリ木片等ヲ入レ彈丸ヲ撞キ或ハ筒ヲ立テ駐板ヲ激シク地上ニ打チ附クルカ如キコトハ腔發及過早發等ノ原因トナルヲ以テ嚴ニ之ヲ避クヘシ

三 發射ニ際シ裝藥筒ノ一部筒内ニ殘留シ擊發機能ヲ害スルコトアルヲ以テ爲シ得レハ筒ヲ倒シテ之ヲ檢スルコト

四 擊莖、擊針兩者結合ニ於ケル長サハ擊發機能ニ影響スルヲ以テ結合ノ際ニハ十分之ヲ螺入シ且連續射擊ノ際自然旋回シ長サヲ變スルコトアルニ依リ留意スルコト

又射擊後擊莖室ニ浸入セル燼渣ハ擊針ノ後退ヲ妨ケ次發裝填ノ際危險ヲ惹起スルコトアルヲ以テ點檢手入ヲ怠ラサルコト

五 風塵甚シキ時ニ於テハ携行間ニ於テ砂塵附着シ鏽染ヲ剝脫シ且射擊ニ支障ヲ生セシムルニ至ルヲ以テ成ルヘク手入用布ヲ以テ之ヲ被包シ少クモ筒口ヲ閉塞スルコト

第三節 格納

第七十 格納ハ銃ニ準シテ實施スルモノトス

第四節 檢査

第一款 常用品ノ檢査

第七十一 一般檢査ノ主要ナル着眼點左ノ如シ

一 結合

筒ノ動搖	著眼點	原因
一	ねぢ部磨滅、變形	
二	駐子(駐鉤)ノ磨滅	
三	駐子(駐鉤)ばねノ衰損	

擲彈筒

柄桿頭ノ動搖	一 ねぢ部ノ磨滅、變形 二 緊定螺ノ變形 三 緊定帶ノ動搖、駐釘ノ弛緩 四 凸齒及同吻合部ノ磨滅
駐板ノ動搖	一 駐筒ノ變形(鍍ノ弛緩) 二 ばねノ衰損 三 射擊ノ際駐板位置ノ不良
整度器ノ動搖	ねぢ部磨滅
回轉筒ト筒身トノ遊隙	手入不良ニ基ク磨滅

二 機能

著眼點	原 因
擊發機能	一 擊針ノ折損、缺損及戻回 二 擊莖ばね、引鐵ばねノ衰損 三 引鐵、逆鉤、遊子、擊莖等各鈎部ノ磨滅、缺損
擊莖ノ復位作用不良	一 各部ノ摩擦 二 接觸部、軸部ニ燼渣、異物ノ附著

回轉筒ノ回轉不良	一 回轉筒並筒身ノ反起、打痕 二 發錆並燼渣、異物ノ附著
整度器ノ回轉不良	一 齒車ノ齒ノ變形、反起、軋リ 二 擊莖室ねぢ部ノ變形 三 齒車軸ノ屈曲

三 損傷及手入

區分	筒	著眼點	原 因
	内筒		
部	外	損傷	手入
	傷		
筒		銃ノ腔中ニ準ス	回轉筒内面及窓部ノ錆痕、腐蝕

第七十二 射擊ノ前後ニ於テハ各部特ニ筒内及擊發機關ニ就テ検査スヘシ

擲彈筒

器度整		駐板		關機	
傷					
轉輪ノ動搖	齒車ノ齒及突筭ノ缺損、磨滅	變形、打痕	ばねノ衰損、折損	擊莖室 一 擊針孔ノ開大 二 縱溝及ねぢノ變形	ばね筒ノ逆結筒ノ受 連筒ノ受 ばね筒ノ受 鉤部、鏢部ノ磨滅
					遊逆引子鉤鐵 鉤部ノ磨滅、缺損 軸部ノ磨滅
					自然衰損

九九

發損		擊入手		桿傷		柄損		入手	
擊莖ノ屈曲及縱溝ノ變形	擊針ノ磨滅、折損、屈曲	軸部ノ施油不足又ハ過施	腐蝕	擊針、擊針孔及各筒内部ノ錆痕、腐蝕	ねぢ部ノ磨滅、變形	ばねノ衰損、折損	駐子(駐鉤)ノ磨滅、變形	各部ノ打痕、反起	柄桿ノ下部及底桿ノ屈曲、龜裂
									柄身内部及窓部ノ錆痕、腐蝕
									射擊ノ際駐板ノ位置不良

九八

其二 格納品ノ検査

第七十三 格納品ノ検査ハ小銃ニ準シテ實施スルモノトス

兵器保存要領 第四篇 刀、劍、喇叭及銃器類 終

附錄第一

刀、劍格納品ノ手入方式ノ例

一 刀、劍ノ手入

- 1 手入ハ舊油ノ除去、検査、除錆、塗油ノ順序ニ行ヒ通常與熱油ニヨル浸漬手入法ヲ用フルモノトス
- 2 舊油ノ除去 先ツ刀ノ柄頭、護拳、劍ノ柄頭ノ舊油ヲ除去シ次ニ刀、劍身ト鞆トヲ分離シ手入枠ニヨリテ與熱「スピンドル」油中ニ浸漬ス此際黃銅部品竝指貫切羽及鞆内部ニ「スピンドル」油ヲ附著セシメサルヲ可トス鞆及刀、劍身等ヲ浸漬スルニハ通常浸漬用具ノ大小ニ應シ數本以上ヲ同時ニ行フヲ有利トス
- 3 検査ニ方リテハ特ニ鞆ト身トノ吻合、機能ノ良否、發錆ノ有無ニ注意シ除錆ニ際シテハ過度ニ摩擦シ擦痕及著色ノ剝脱ヲ生セシメサル如ク注意ス

4 塗油 防錆油ノ浸漬、塗布ハ概ネ舊油ノ除去ニ準シテ之ヲ行フモ氣温ノ高低及與熱温度ニヨリ油膜ニ厚薄ヲ生シ油ノ有効期限ニ影響スルヲ以テ特ニ季節ニ應シ與熱温度竝浸漬時間等ニ注意スルヲ要ス

柄頭及護拳等ノ如ク油中ニ浸漬シ得サル部位ノ塗油ニハ刷毛ヲ用フルヲ可トス  
 鞆ノ内部ニハ「ベトロラタム」(「バラワセリン」)ヲ塗布セサルモノトス

二 屬品革具ノ手入

劍差釣革及帶革等ノ金具ニ生セル綠錆ハ勉メテ除去スルモノトス

三 手入後ノ處置

塗油終リタルモノハ刀ニ在リテハ刀身ト鞆トヲ分離シ劍ニ在リテハ劍身尖部カ下部彈鎖子ニ觸接セサル程度ニ挿入シ塗油ノ剝脫セル部分ヲ補修塗ノ上托架ニ托シ格納場ニ搬送ス

附錄第二其一

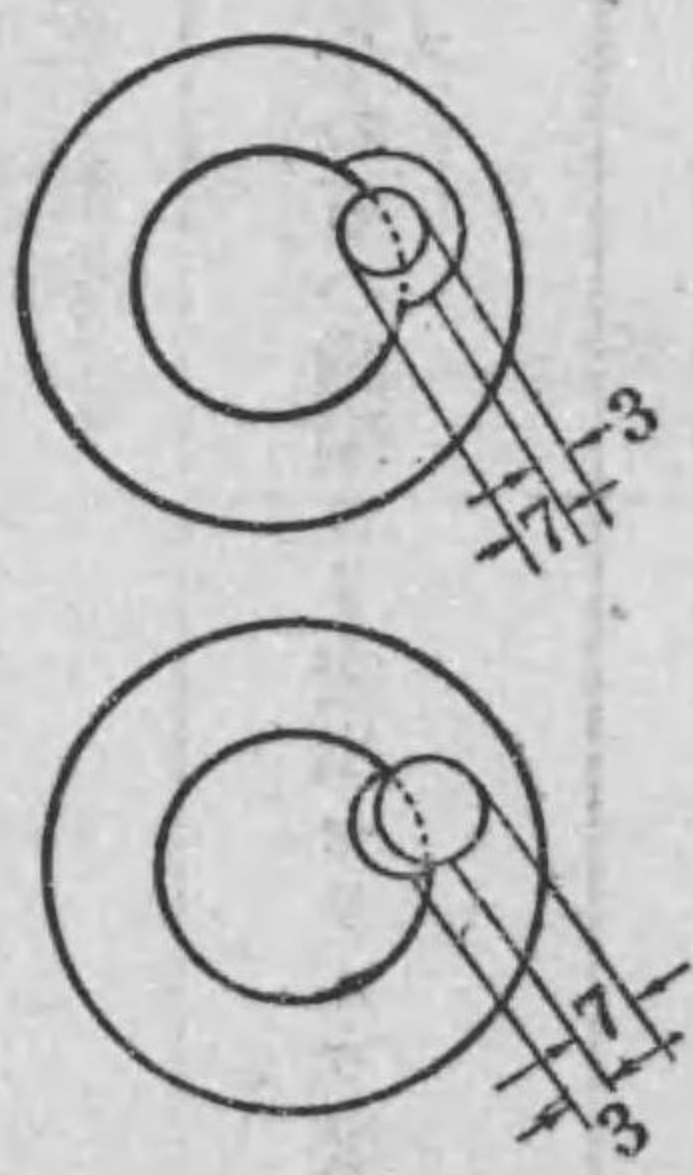
軍刀分解結合法

區分	刀		方	法	注	
	解	結				
	<p>一 蟹自轉螺子ヲ以テ柄頭「ナツト」ヲ戻同離          二 「ナツト」及同駐「ナツト」ヲ戻同離          三 刀身ヲ柄ヨリ抽出ス          四 柄頭ヨリ柄環ヲ脱ス、駐爪ばねヲ脱ス</p>	<p>一 駐爪ばねヲ裝シタル柄材ヲ柄體ニ裝著シ          二 駐爪ばねヲ柄環ニ挿入シ護拳ノ小端ヲ少          三 後更ニ柄頭ニ端ヲ柄環ニ挿入ス          四 切羽ヲ刀尖ヨリ結合スルハ誤リナ</p>	<p>一 蟹自轉螺子孔ヲ毀損セサル如ク注意スヘシ柄材駐「ナツト」分          二 解ノ際駐螺空轉スルコトアルヲ以テ柄頭「ナツト」ノ分解困難ナルトキハ蟹自孔ニ目打ヲ當テ之ヲ輕打ス          三 抽出困難ナルトキハ木槌ヲ使</p>			

附録第二其二

銃劍分解結合法

身	劍		區分	
	合	結 解 分		
	<p>一 駐筒ヲ柄頭ニ挿入シばねヲ裝シタル後駐筒頭ヲ螺著シ駐筒ト同頭ト接際線ノ内外何レカヨリ接際線ニ向ヒ稍、斜メニ目打ヲ刻ス</p> <p>二 柄木ヲ結合スルニハ小ねぢヲ駐筒頭側ノ柄木ニ裝シ駐坐ヲ他ノ柄木ニ裝シタル後柄木ヲ柄ニ裝著シ小ねぢヲ螺著ス</p>	<p>一 柄木小ねぢヲ戻回シ柄木ヲ離脱シ駐「ナット」及駐坐ヲ脱ス</p> <p>二 萬力(口銅ヲ裝ス)ニ駐筒頭ヲ咬ヘシメ劍身ヲ旋回シテ駐筒頭ヲ脱シ駐筒及ばねヲ離脱ス</p>	方	法
	<p>一 目打ハ左圖ノ如クナラシムルヲ要ス</p> <p>二 小ねぢハ駐坐及駐「ナット」ヨリ又駐坐ハ柄木ヨリ突出セサルヲ要ス</p>	<p>一 目打ハ左圖ノ如クナラシムルヲ要ス</p> <p>二 小ねぢハ駐坐及駐「ナット」ヨリ又駐坐ハ柄木ヨリ突出セサルヲ要ス</p>	注	意



附 録

一〇五

鞆		
合	結	解 分
	<p>鞆板ヲ鞆内ニ挿入シ其端ヲ鯉口ヨリ少シク出シ置キ鯉口ばねヲ兩鞆板間ニ挿入シ次ニ鞆、鞆板及鯉口ばねノ小ねぢ孔ヲ一致セシメタル上鯉口小ねぢヲ螺著ス</p>	<p>鯉口 小ねぢヲ戻回離脱シ次テ鯉口、鞆板ヲ抽脱ス</p>
	<p>小ねぢハ鯉口ヨリ突出セサルヲ要ス</p>	

一〇四

附録第三

小銃格納間ノ手入方式ノ例

式方入手	
考備	⑧⑦④①ハキトルス用使ヲ工女名〇一成編 1 スト番⑩⑨
適本例ハ兵器廠ニ於ケル標準方式ヲ示スモノニシテ軍隊等ニ於テハ状況ニ適スル如ク	⑩⑨ ⑧⑦ ⑥ ⑤④ ③② ① 務任 2 外部塗油 塗部油及結合 検査及塗油 仕上拭淨 洗滌 分解
	挺〇〇三約シト間時八働實日一率能業作 3 統系業作及置配ノ場業作 4

附録

鞋	
合	結 解 分
二 致 セ シ メ タ ル 上 鉤 環 小 ね ち ヲ 螺 著 ス	<p>一 下 部 弾 子 抽 出</p> <p>二 側 部 弾 子 抽 出</p> <p>三 方 部 弾 子 抽 出</p> <p>ニ 上 部 彈 鎖 子 抽 出</p> <p>一 輕 打 シ テ 之 ヲ 戻 離 脱 シ 鉤 環 ヲ 鑑 ノ 方 向</p>
ス 小 ね ち ハ 鉤 環 ヨ リ 突 出 セ サ ル ヲ 要	<p>上部彈鎖子ノ抽出困難ナルトキハ 木槌ヲ以テ鯉口ヲ輕打スヘシ</p>

領	
品 屬	合 結
塗油、結束等ノ順序ヲ以テ方式作業ニ依ルヲ可トス	<p>検査及塗油終リタルモノヲ結合ス</p> <p>部品ノ合番號ニ注意スルヲ要ス</p>

要 施 實 業 作					區 分 順 序
銃					
油 塗	查 檢	淨 拭	滌 洗	分 解	實 施 法
鋼製部品ハ與熱「ベトロラタム」中ニ浸漬ス	拭淨終リタルモノヲ細部ニ互リ検査ス	荒拭ヲ終リタルモノヲ更ニ精密ニ拭淨シ發錆セルモノハ除錆ス	分解セルモノヲ與熱「スピンドル」油中ニ浸漬シ（金屬籠ニ收容セルモノ籠共）舊油ヲ除去シタル後引上ケ油ヲ流下セシメテ荒拭ス		實 施 上 ノ 注 意
	一ノ腔中及藥室ノ検査ハ特ニ綿密ニ行フモ 二ノ銃番號ト部品トヲ對照スルヲ要ス	一 緊要部ノ拭淨ハ特ニ綿密ニ實施スルヲ要ス 二 除錆ノ爲ニハ木賊及磨粉ヲ「スピンドル」油ニテ練和シタルモノヲ使用スルヲ可トス	浸漬時間ハ氣溫、油ノ溫度竝浸漬物ノ肉厚等ニ依リ一定セサルヲ以テ目視ニ依リ適否ヲ判定スルヲ可トス		
	浸漬時間ハ洗滌ノ際ノ與熱未タ冷却セサル場合ハ略シ洗滌ノ時ト同様ナルモ既ニ冷却セルモノニ對シテハ約二倍ノ時間ヲ要ス而シテ此場合ニ被膜ノ状態ニ依リ目視ニテ之ヲ判定スルヲ要ス				



兵器保存要領

第五篇 火 砲

兵器保存要領

第五篇 火 砲

目 次

通 說	.....	一頁
第一章 手 入	.....	二
第一節 常用品ノ手入	.....	三
第一款 普通手入	.....	三
其一 日常手入	.....	四
其二 使用時ノ手入	.....	四
第二款 精密手入	.....	二一
第二節 格納品ノ手入	.....	二七
第一款 格納前ノ手入	.....	二七

目 次

第二款	格納間ノ手入	二九
第二章	取扱	三〇
第一節	分解結合上ノ注意	三〇
第二節	使用時ノ注意	四二
第三節	射撃時ノ注意	四七
第三章	格納	六一
第一節	長期格納	六一
第二節	一時格納	六九
第四章	検査	七一
第一節	常用品ノ検査	七一
第二節	格納品ノ検査	一〇二

兵器保存要領 第五篇 火 砲 目次終

兵器保存要領

第五篇 火 砲

通 說

第一	口徑ニ依ル火砲ノ稱呼左ノ如シ
大口徑砲	十九糎以上 <small>〔但本篇ニ於テハ固定式各種十五糎加農ヲ含ムモノトス〕</small>
中口徑砲	九糎以上十九糎未滿
小口徑砲	十二糎以上九糎未滿
第二	本篇中他ノ各篇ニ依ルヘキモノ左ノ如シ
電池及線索類	第一篇通則ニ依ル
機關砲(機關銃様式)	第四篇中ノ機關銃ニ準ス
火砲車輛及車輪	第七篇一般車輛及第八篇自動車、戰車類ニ依ル

通 說

眼鏡及電氣照準具 第九篇眼鏡及計測器類ニ依ル  
器具類 第十三篇工具及器具類ニ依ル

第三 本篇中單ニ「塗油」ト稱スルハ「スピンドル」油ヲ塗施スルヲ謂フ

第一章 手 入

第四 火砲ノ手入ハ其實施ノ程度ニ應シテ必要ノ部分ヲ分解シ且成ルヘク風塵ヲ避ケ得ル場所ヲ選定シテ行フヘシ之カ爲固定式火砲ニ在リテハ要スレハ風除ケヲ設ケ又ハ其周圍ニ撒水スル等ノ處置ヲ講スルヲ可トス

第五 手入用具ハ機能良好ニシテ火砲ヲ損傷スルノ虞ナク且塵埃等ノ附著セザルモノヲ使用スルヲ要ス

第六 電氣照準具ヲ裝著セルモノハ手入ニ際シ油ヲ電氣部品ニ附著セシメサル如ク注意スルヲ要ス

第七 砲塔火砲ノ手入ハ構造上已ムヲ得サルモノノ外本章ヲ準用スルモノトス

第一節 常用品ノ手入

第一款 普通手入

第八 常用品ノ普通手入ハ日常之ヲ行フノ外使用時ニ於テ所要ノ手入ヲ實施スルモノトス

第九 砲腔ハ砲身ノ要部ニシテ腔面ノ良否ハ直接命中精度及砲ノ命數竝腔發ノ誘起ニ至大ノ關係ヲ有スルヲ以テ之カ保存手入ニハ十分周密ナル注意ヲ拂フヘシ

第十 素地部ニ發錆セルモノノ手入ハ燈油(要スレハ燈油ヲ浸マセタル木賊)ヲ使用スルコトヲ得ルモ使用後ハ油氣ヲ十分ニ拭除スルヲ要ス  
鏽、布鏽等ハ之ヲ使用スヘカラス

其一 日常手入

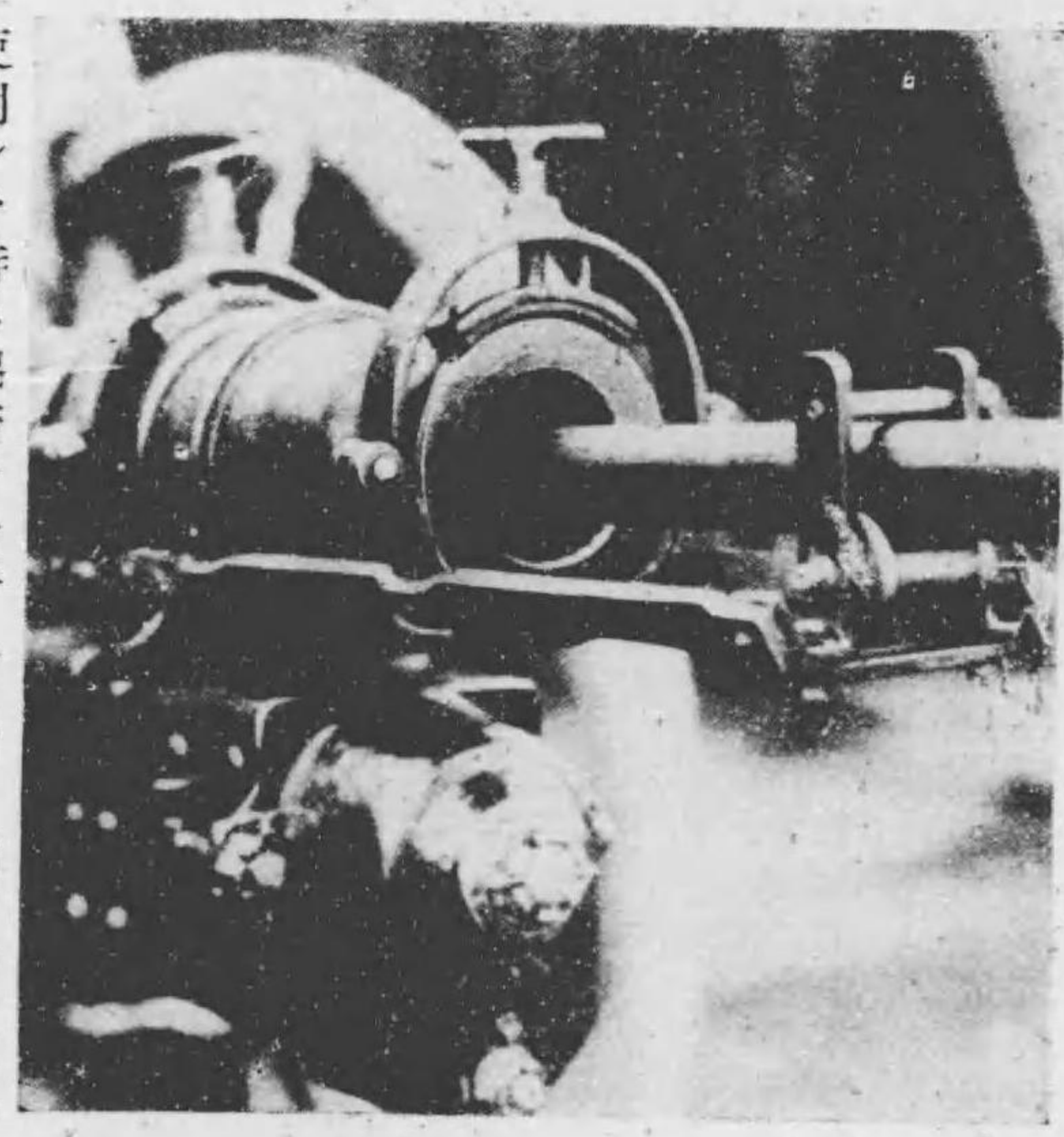
第十一 日常手入ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

區分	實 施 要 領
砲	一 小口徑砲ニ在リテハ通常閉鎖機ヲ離脱シ砲口保護器ヲ使用シ(第一圖)洗桿ヲ以テ、大、中口徑砲ニ在リテハ通常閉鎖機ヲ開キタル儘ニテ洗桿頭、清拭器ニ乾布ヲ纏ヒ人力又ハ機力ニ依リ腔内ヲ進退シテ拭淨スヘシ
砲	砲口保護器ヲ有セサル火炮ニ在リテハ洗桿柄又ハ清拭器ヲ牽引スル索繩ヲ以テ砲口ヲ偏磨セサル如ク砲身ニ角度ヲ附與スルカ又ハ手入者ノ位置ヲ高クスル等適宜ノ方法ヲ講スヘシ
	二 手入ノ際手入具ヲ砲口、砲尾及藥室緣端等ニ擊突セシムルコトナク又過度ノ磨拭ニ因リ腔面ヲ磨損セシメサルコトニ注意シ尙腔面ニ塵埃、土砂等附著セルトキハ先ツ之ヲ除去シタル後拭淨ヲ行フヘシ
	三 腔綫起部並塞環室ハ砲腔中特ニ緊要ノ部分ナルヲ以テ常ニ細密ナル點檢ヲ行ヒ手入、塗油ヲ十分ニシ防錆ヲ完全ナラシムルヲ要ス
	四 手入ハ腔面ノ状態ニ應シ乾布ヲ以テ之ヲ拭淨シタル後「スピンドル」油ヲ塗布シ又ハ腔中油ヲ浸マセタル布片ヲ洗桿頭ニ纏ヒ砲口ヨリ藥室ニ至ルマテ等齊ニ塗布シ

身 腔

手 入

第一圖



シ數時間乃至十數時間放置シテ發錆ノ素因タル燼渣等ヲ溶解セシメ布片ヲ以テ之ヲ拭淨シタル後「スピンドル」油ヲ塗布スヘシ

七 等ヲ使用シテ特ニ綿密ナル手入ヲ行ヒ稍、多量ニ塗油スヘシ  
 「アスベスト」塞環ヲ使用スルモノニ在リテハ砲腔ノ塗油多量ニ過クルトキハ射角ヲ附與シタルトキ塞環室ニ滲溜シ「アスベスト」環ニ浸潤スルヲ以テ注意スヘシ

五 腔面ニ塗油スルニハ油ヲシテ完全ニ全面ニ行キ互ラシムルコト肝要ニシテ洗桿頭ニ清淨ナル布片ヲ纏ヒ周圍ニ十分油ヲ塗リテ用ヒ腔綫ノ隅角内ニ普及セシメタル後布片ヲ減シ更ニ隔牆上面其他一般ニ普及セシムヘシ

五

砲		身		閉
閉鎖機室	塞環室	外	部	
<p>一 閉鎖機室ノ凹部、隅角部及ねぢ部等ハ木若ハ竹片ノ頭部ニ布片ヲ纏ヒテ使用シ限ナク拭淨スヘシ</p> <p>二 塗油ハ各部ニ普及スル如クシ特ニねぢ部等ノ摩擦部ニハ稍、潤澤ニ塗布スヘシ</p> <p>塞環室ハ閉鎖機室ニ準シ手入ヲ行フノ外特ニ緊塞面ハ注意シテ拭淨塗油シ其發錆ヲ防キ尙介在セル異物等ニ依リ疵痕ヲ生セシメサル如ク注意シ又手入ノ際疵痕等ヲ發見セハ直ニ之カ加修ノ處置ヲ講スヘシ</p>	<p>一 砲身外部ニ塵埃污垢等ノ附著セルモノハ雜巾、塵拂等ニテ掃除シ固著セルモノハ濕布ヲ以テ除去スヘシ此際塗料ヲ剝脫セサルコトニ注意スヘシ</p> <p>二 象限儀坐ハ土砂等ニ依リ疵痕ヲ生セシメサル如ク之カ拭淨ニ注意シ適宜塗油スヘシ</p> <p>三 注油箇所ニハ適宜「スピンドル」油ヲ注入スヘシ此際塵埃ヲ混入セシメサルコトニ注意スヘシ</p> <p>四 山砲其他ノ火砲ニシテ分解シテ搬送スル種類ノモノニ在リテハ其結合部ヲ解脫シ又ハ僅ニ移動旋回等ヲ行ヒテ拭淨手入ヲ施スヘシ</p>	<p>一 閉鎖機ハ小口徑砲ニ在リテハ通常離脫シテ各部ヲ分解シ大口徑砲ニ在リテハ之ヲ離脫スルコトナク擊發機關ヲ分解シテ各部ヲ拭淨スヘシ</p> <p>二 各部ノ拭淨ニ方リテハ附著セル塵埃、污垢ヲ十分除去シ又雨雪天ノ際水濕ヲ蒙リタルトキハ十分拭淨シ水濕ノ影響ヲ受ケサル如ク注意スヘシ大口徑砲ニ在リテモ斯クノ</p>	<p>如キ場合ニハ閉鎖機ヲ離脫分解シテ十分ニ手入スヘシ</p> <p>三 分解手入ヲ行フトキハ擊發機室其他ノ隅角部、溝等ハ布片ヲ纏ヒタル木又ハ竹片ヲ以テ拭淨シ閉鎖機開閉機關タル槓桿ノ摩擦部、齒桿、齒弧ノ齒部、鎖屏樞軸、扛子ノ頭部、槓桿握把ノ吻入スヘキ切欠部等其結合後外部ニ現ハレサル摩擦部ニハ拭淨後「ハラワセリン」ヲ塗布シ其他ノ素地部ニハ拭淨後「スピンドル」油ヲ普ク塗布スヘシ又注油孔等ヲ有スルモノニハ適宜「スピンドル」油ヲ注入スヘシ</p> <p>四 門管室ノ内面ハ腐蝕シ易ク從テ火門軸ヲ燒蝕シ又ハ打殼門管ノ抛出不十分ナルヲ以テ常ニ此部ノ手入ヲ爲シ内面ヲ平滑ニ保持スルヲ要ス</p>	

機 鎖

具塞緊	置裝閉開働自
<p>塞環ノ鐵部ハ十分注意シテ拭淨塗油シ之カ發錆ヲ防キ特ニ其緊塞面ニハ異物ノ介在等ニ依リ疵痕ヲ生セシメサルヲ要ス</p> <p>「アスベスト」環ハ石鹼水ニテ洗滌スルノ外絶對ニ油類ヲ塗布スヘカラス若油類ノ附著セルトキハ石鹼水ニテ洗滌スヘシ</p>	<p>一 通常各部ヲ分解セシテ閉鎖機ノ開閉ヲ行ヒ自働機關ノ素地部ヲ露出セシメテ塗油シタル上數回開閉ヲ行ヒテ油、污垢等ヲ溶解セシメ之ヲ十分拭淨シタル後塗油スヘシ但必要アルトキハ各部ヲ分解シテ附著セル舊油ヲ除去シ塵埃、污垢ヲ拭淨シ新ニ脂油ヲ塗布又ハ填實スヘシ</p> <p>二 注油孔又ハ摩擦部ニハ「スピンドル」油ヲ施スヘシ</p> <p>三 其他ハ閉鎖機ト同要領ニ依ルヘシ</p>

手入

- 一 搖架ハ通常分解スルコトナク外部ニ露出セル砲身滑走面ハ塵砂ヲ十分拭淨シタル後塗油スヘシ但取扱輕易ナルモノハ砲架ヨリ離脱シ手入ヲ行フヘシ
- 二 砲身移動裝置ヲ有スルモノ又ハ分解搬送様式ノモノニ在リテハ砲身ヲ移動又ハ分解シテ手入ヲ行フヘシ
- 三 表尺坐筒等ノ如ク螺桿ニ依リ其位置ヲ轉シ得ルモノハ之ヲ移動シ其啖合部ヲ拭淨シテ塗油スヘシ
- 四 表尺坐筒ノ表尺室、後坐尺導溝、同遊標、象限儀室等ノ隅角部ハ布片ヲ纏ヒタル木若ハ竹片ヲ使用シテ拭淨塗油シ、後坐尺ノ外部ニ露ハレサル摩擦部ニハ「パラワセリン」ヲ塗布スヘシ
- 五 其他ノ素地部ハ十分ニ拭淨シ樞軸、啖合部等ノ摩擦部、油溝其他ノ注油箇所ニハ適宜脂油ヲ塗施スヘシ
- 六 防塵裝置ノ絨布等ニ附著セル污垢ハ乾布ヲ以テ十分拭淨除去スヘシ
- 七 「ゴム」彈褥等ニ附著セル油氣及污垢ハ乾布ヲ以テ十分拭淨スヘシ
- 八 黃銅又ハ青銅製部品ハ拭淨後摩擦部ニ限り適宜塗油スヘシ
- 九 外部塗料ニ附著セル砂塵、污垢又ハ油氣ハ十分拭除シ其甚シク固著セルモノハ濕布ヲ以テ拭ヒ去ルヘシ此際塗料ヲ剝脱セサルコトニ注意スヘシ

- 一 外部ニ附著セル土砂、塵埃及油氣ヲ拭淨ス若其固著甚シキトキハ濕布ヲ用ヒテ拭淨スヘシ
- 二 摩擦部ノ防塵油變敗セルモノハ之ヲ除去シタル後新ニ塗油スヘシ
- 三 各隅角部、間隙部等ハ布片ヲ纏ヒタル木若ハ竹片ヲ使用シテ拭淨スヘシ
- 四 照準棍駐鉤、駐鋤吊鉤、搖架及砲尾托架等ノ各啖合部ニハ「パラワセリン」ヲ、架尾環ニハ防塵脂ヲ、各樞軸摩擦部及注油箇所ニハ「スピンドル」油ヲ給シ又制轉機ノ軸筒部ニハ要スレハ防塵脂ヲ填實スヘシ
- 五 砲架ノ箭材又ハ脚ヲ移動若ハ分解シ得ルモノハ之ヲ轉位シツツ蝶番、樞軸、齒弧、齒圈等ノ結合部相互ヲ拭淨塗油スヘシ
- 六 砲架ハ砲身ト架匡、大架ト小架等ノ如ク全周又ハ某角度ヲ旋回シ得ルモノハ之ヲ轉位ヲ行ヒツツ拭淨手入ヲ行フヘシ
- 七 水抜孔、油孔等ニ污垢ノ填塞シアルモノハ十分ニ之ヲ除去シ其流通ヲ計ルヘシ
- 八 車輪ハ要スレハ車軸ヨリ離脱シ軸臂轂筒等ニ附著セル舊油及污垢ヲ除去シタル後全面ニ防塵脂又ハ「グリース」ヲ塗施スヘシ
- 九 觀準儀室托坐ハ十分拭淨後薄ク塗油スヘシ又規整裝置ニ依リ移動シ得ルモノハ移動ヲ行ヒツツ各啖合部、啖合部、ねぢ部ヲ手入スヘシ
- 十 搖架耳(砲耳)蓋板ハ解脫シ砲耳若ハ搖架耳及同室ヲ拭淨塗油スヘシ
- 十一 砲耳移動裝置ハ轉把ヲ旋回シツツ各部ヲ拭淨塗油シ注油孔ニハ注油スヘシ又要スレハ鋼索ヲ伸張シテ之ヲ拭淨シ「メッキ」剝脱ノ爲發錆ノ徵アルモノハ僅ニ「ベトロラム」ヲ塗布スヘシ

床 砲	匡 架
<p>一 各部ヲ拭掃シテ附著セル土砂、塵埃、汚垢ヲ除去シ素地部ニハ塗油シ油壺等ニハ注油スヘシ</p> <p>二 泥土ニテ汚染シタルトキハ要スレハ水洗ヲ行ヒ拭淨スヘシ</p> <p>三 排水溝ニ土砂、塵埃ノ溜リアルハ之ヲ掃除スヘシ</p> <p>四 木製砲床ニ在リテハ蟻害ノ豫防及早期發見ニ注意スヘシ</p>	<p>一 齒圈ノ齒弧ヲ拭淨シテ介在セル異物ヲ除去シ塗油スヘシ</p> <p>二 軌道圓環、回轉輪ノ滑走部、内側齒圈及準輪軌面等ハ砲架ヲ回轉シツツ塵埃、汚垢ヲ拭除シテ塗油シ又排水孔ノ開通ヲ計ルヘシ</p> <p>三 外部ハ塗料塗抹部ニ附著セル塵埃、汚垢ヲ拭淨スヘシ</p> <p>四 輻輳軸ニハ十分給油シ輻輳外部ニハ薄ク「ベトロラタム」ヲ塗布スヘシ</p> <p>五 側架上面ヲ砲架ノ滑走スルモノニ在リテハ該滑走面ヲ拭淨塗油スヘシ之カ爲要スレハ砲架ヲ移動セシメテ行フヘシ</p> <p>六 扛起機裝置ヲ有スルモノニ在リテハ之ヲ轉位シ各部ヲ拭淨塗油シ注油孔ニ注油シ要スレハ分解シテ素地部ヲ拭淨塗油スヘシ</p> <p>七 露天ニ裝備シアルモノニ在リテハ雨雪ノ爲泥土ニ汚染シ又ハ水濕ヲ蒙リタルトキ適宜拭淨手入ヲ行ヒ發錆ヲ豫防スヘシ</p>

機 準 照	機 坐 復、機 退 駐
<p>照準機ハ各部ノ手入ヲ良好ニシ其操作ヲ輕快ナラシムルヲ要ス然レトモ過度ニ作動輕易ナルトキハ發射ノ激動ニ依リ不慮ノ誤差ヲ生スルコトアルヲ以テ各部ヲ適當ニ緊定シ置クヘシ</p> <p>一 高低方向用轉把(轉輪)ヲ旋回シツツねぢ部、齒弧、齒車軸托架室等ヲ拭淨シ塗油スヘシ此際蓋板ノ齒車被ハ開放又ハ離脱スヘク又封線ヲ施シアルモノハ特ニ必要ナルトキハ之ヲ開放シ内部ノ手入及給油ヲ行ヒタル後施封スヘシ</p> <p>二 樞軸、嚙合部、摩擦部等ニ適度ニ給油シ又注油箇所ニハ轉把等ヲ旋回シテ移動シツツ各部ニ給油ノ普及ヲ計ルヘシ</p>	<p>一 通常外部ニ露出セル部分ヲ拭淨シ素地部ニハ塗油スヘシ</p> <p>塗料塗抹部ハ搖架若ハ砲架ト同要領ニ依リ手入ヲ行フヘシ</p> <p>二 駐退液ニ「グリセリン」ヲ、緊塞具ニ革環ヲ使用スルばね復坐式駐退機ニ在リテハ毎月一回活塞桿ヲ若干抽キ出シテ革環ニ接觸スル部分ヲ拭淨シ要スレハ揮發油又ハ「テレピン」油ヲ以テ清拭スヘシ但強摩シテ該部ヲ磨損セサルコトニ注意スヘシ又腐蝕痕ヲ有スルモノハ該部ニ「ベトロラタム」ヲ薄ク塗布スヘシ</p> <p>右腐蝕防止ノ爲該部ニ「クロム・メツキ」ヲ施シ又ハ適當ナル塗料ヲ塗布スルコトヲ得然ルトキハ前記ノ手入ヲ省略シ得ルモノトス但「クロム・メツキ」作業ノ爲高熱ニ依リ金質ヲ變化セシムルコトナキヲ要ス</p> <p>三 後坐漏孔變換裝置ハ齒車、齒弧、永轉螺ノ嚙合部及準溝部ヲ拭淨シ「パラワセリン」(構造上已ムヲ得サレハ「スピンドル」油)ヲ塗布スヘシ</p>

手入



照準機

三 ばね式平衡機ハ齒車、鏈軸ヲ拭淨シタル後其啞合部又ハ摩擦部ニハ「ベトロラタム」若ハ「バラワセリン」ヲ塗布シ又鋼索ノ「メツキ」剝脱シ發錆ノ徴アルモノニ對シテハ僅ニ「ベトロラタム」ヲ塗布スヘシ又空氣式平衡機ハ空氣壓ヲ點檢シテ要スレハ補充スヘシ

四 指針臂、指針、分畫板及誘導螺桿ヲ拭淨シテ給油スヘシ

五 弧板及角度板等ハ拭淨シ塵埃、汚垢ヲ除去スヘシ

照準具

照準具各部ハ常ニ拭淨シテ清潔ニシ滑動部ニハ適度ニ注油シテ作動ヲ輕易ナラシムヘシ

一 照準具ノ手入ヲ行フニハ塵埃ヲ避ケ毛布等ヲ敷キタル手入臺上ニ於テ實施スヘシ

二 照準具ハ拭淨後鐵素地部ニハ適度ニ塗油シ磨滅及發錆ヲ豫防スヘシ

三 過度ノ磨拭ニ依リ磨損セシメ又ハ打痕、反起ヲ生セシメサル如ク丁寧ニ手入ヲ行フヘシ

四 眼鏡室ハ軟布、刷毛等ヲ以テ輕ク拭淨シテ塵埃、汚垢ヲ十分ニ除去シ鐵素地部ニハ僅ニ塗油スヘシ表尺室、觀準室等モ之ニ準ス

五 扇形板、修正圓筒等ノ黃銅部ハ乾布ヲ以テ輕ク拭淨シ決シテ強摩スヘカラス

六 齒車、齒弧等ノ啞合部、指針ノ滑走部及活塞螺ノねぢ部ハ拭淨ノ後適宜塗油スヘシ

七 傳動裝置ノ樞軸及接手部ハ十分拭淨シ適宜塗油スヘシ

八 注油孔ヲ掃除シ適宜注油スヘシ

射向盤

一 垂直軸托架裝入部ハ輕ク拭淨シテ塵埃、汚垢ヲ除去シ僅ニ塗油スヘシ

二 回轉盤ノ回轉螺桿及規整螺俯仰螺桿ハ旋回シツツ啞合部ヲ拭淨シテ塗油スヘシ

照準具

距離、射角板

一 各部ノ塵埃、汚垢ヲ丁寧ニ拭淨シ鐵部ニハ塗油スヘシ

二 指針、指針臂等ハ拭淨塗油シ又規整裝置ヲ有スルモノハ之ヲ移動シツツ手入ヲ行フヘシ

三 分畫目盛ニ塗料ヲ施シアルモノハ之ヲ剝脱セサルコトニ注意シ若剝脱シタルトキハ適宜補修スヘシ

表尺

一 表尺ハ軟布ヲ以テ幹及眼鏡室ヲ清拭シ十分ニ塵埃、汚垢ヲ除去シ僅ニ塗油スヘシ

二 回轉盤式表尺若ハ回轉シ得ル裝置ノモノニ在リテハ該部ヲ清拭シ僅ニ塗油シ且油孔又ハ摩擦部ニ適宜給油スヘシ

三 表尺補助桿ハ乾布ヲ以テ眼鏡室及底板部ヲ清拭シ塵埃、汚垢ヲ十分除去シ僅ニ塗油シ且樞軸部ニ給油スヘシ

觀準儀

一 脚竝外部ヲ輕ク清拭シ汚垢ヲ十分除去シ僅ニ塗油スヘシ特ニ脚ヲ磨損セシメサル如ク注意スヘシ

二 規整又ハ修正裝置ノ各部ハ轉輪ヲ旋回シツツ其吻合部ヲ拭淨シ摩擦部ニ塗油スヘシ

照準鼓

一 各部ノ手入ハ前各號ニ準シ行フヘシ

二 注油孔ニハ轉輪ニ依リ齒車ヲ回轉シツツ時計油(要スレハ耐寒性ノ時計油)ヲ注入スヘシ

手入

品	屬
信管測合機	象限儀
信管廻	象限儀
信管測合機	象限儀

其二 使用時ノ手入

第十二 火砲ノ使用ニ方リテハ其目的ニ應シ豫メ必要部位ノ手入ヲ十分ニ行ヒ且使用間ハ時々緊要部ノ砂塵ヲ拭淨シ又要スレハ摩擦部ニ給油シ其磨滅ヲ豫防スヘシ

第十三 雨雪天又ハ泥濘甚シキトキ使用ノ場合ニ於テハ左ノ要領ニ依リ手入ヲ實施スルモノトス

一 使用前

砲腔、閉鎖機及雨雪ニ露出スル各樞要部ニハ稍、多量ニ塗油スヘシ

二 使用後

1 手入後ノ塗油ハ一般ニ稍、多量ニ施シ且爾後ノ手入ヲ頻繁ニ實施シテ各部ノ發錆ヲ豫防スヘシ

2 水洗スル場合ニ於テハ砲身、搖架、照準機ノ内部又ハ注油孔等ニ水濕ヲ及ホササル如ク注意シ且洗滌後十分ニ各部ノ水分ヲ除去スヘシ

第十四 連日使用ノ際ハ使用間時々照準機、砲耳室等塵埃ヲ蒙リ又ハ摩擦ノ爲其機能ヲ害スル虞アル部分ハ之ヲ分解拭淨シテ塗油シ特ニ車軸、制轉機等ノ手入ヲ十分ナラシムルヲ要ス

手入

第十五 射撃ニ於ケル手入ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

一 射撃前

區分	實	施	要	領
砲身	一 砲腔、閉鎖機室及閉鎖機ハ塵埃、污垢ヲ留メサル如ク丁寧ニ拭淨シ各部ニ適度ニ塗油スヘシ	1 藥室ノ塗油過量ナルトキハ藥莖ニ凹痕ヲ生スルコトアリ	2 「アスベスト」塞環ヲ使用スル火砲ノ注意ハ日常手入ニ同シ	二 擊發機ハ分解シテ各部品及其室ニ塵埃、污垢ヲ留メサル如ク拭淨シ適度ニ塗油スヘシ但極寒地ニ於テ適當ナル耐寒性「スピンドル」油ヲ得ラレサル場合ニ在リテハ反テ塗油セサルヲ可トスルコトアリ
閉鎖機	三 鋼製塞環及同室ハ之ヲ拭淨シタル後稍、多量ニ塗油スヘシ	又擊莖ノ塗油過量ナルトキハ爆管不發ヲ生スルコトアリ		
照準機	要スレハ各部ヲ分解シテ手入ヲ行フヘシ			
駐退機	一 分解制限品ノ外精密手入ニ準シ要スレハ分解手入ヲ行フヘシ			
復坐機	二 分解手入ヲ行ハサルモノニ在リテモ少クモ駐退液ヲ排出シテ濾過清淨シ且之ヲ補充スヘシ			

其他 射撃直前ニ於テハ射撃間ノ手入ニ準シ實施スヘシ

二 射撃間

區分	實	施	要	領
砲身	一 腔綫起部附近、藥室及抽筒子室ハ時々之ヲ拭淨シ又射撃中止間ニ於テ狀況之ヲ許セハ勉メテ砲腔ノ拭淨手入並塗油ヲ實施スヘシ此際腔中油ヲ塗布シ置クトキハ爾後ノ手入ヲ容易ナラシムルノ利アリ	二 長時間射撃ヲ續行スルトキハ機會アル毎ニ砲身ノ各摩擦部ニ塗油シ注油箇所ニハ時々注油スヘシ	三 連續急射ヲ爲シ砲身過熱シタルトキハ要スレハ砲身外部ニ注水シ冷却ヲ圖ルヘシ	四 不發火又ハ「ガス」ノ漏洩アルトキハ擊發機能ヲ點檢シ要スレハ之ヲ分解シテ各部品及同室ヲ手入スヘシ
閉鎖機	五 閉鎖機ノ前面、擊莖孔、擊發機及同室等ハ時々拭淨シテ塗油スヘシ	門管室ヨリ「ガス」漏洩スルトキハ室ヲ十分拭淨塗油シ門管ノ螺著ヲ確實ナラシムヘシ	門管室ハ燼渣附著シ且燒蝕ヲ生シ易キヲ以テ屢々手入ヲ行フヘシ	

手入

砲身 閉鎖機	<p>六 塞環ヲ使用スルモノハ毎發塞環室ニ注意シ「ガス」漏レノ跡ヲ認メタルトキハ之ヲ拭淨シ且塞環位置ヲ變更シ或ハ補助銅板ヲ使用シ又ハ局部ニ「グリース」ヲ塗ル等ノ處置ヲ爲スヘシ</p> <p>鋼製塞環ハ毎發拭淨シ閉鎖直前ニ於テ其緊塞面ニ薄ク且一樣ニ「グリセリン」ヲ塗布スヘシ</p> <p>七 「アスベスト」塞環ヲ使用スルモノハ毎發塞環室ヲ拭淨スヘシ</p> <p>又過熱スルトキハ塞環過軟トナルヲ以テ要スレハ清水ニテ冷却スヘシ</p>
其他	<p>砲身及搖架ノ滑走面(砲架ノ後退スルモノハ架匡側梁上面)ノ塵埃ヲ拭淨シ注油箇所ニハ時々注油スヘシ</p>

三 射撃後

砲	<p>一 射撃後ニ於ケル腔中手入ノ良否ハ其保存ニ影響スルコト最大ナリ故ニ成ルヘク速ニ砲腔及閉鎖機ノ手入ヲ實施スルヲ要ス其他ノ部位ハ普通手入ニ準シ行フヘシ</p> <p>二 腔中手入實施ノ方法ハ時期及材料ノ有無等狀況ニ依リ一定スルヲ得サルモ爲シ得ル限り最善ヲ盡スヲ必要トス而シテ狀況已ムヲ得サル場合ニハ假令水洗スルモ之ヲ行ハサルニ優ルモノトス砲腔、閉鎖機ノ内部ニ附著セル燼渣、蠟等ハ一回ノ</p>
---	---

手入ニ於テ完全ニ除去スルコト困難ナル場合アルヲ以テ爾後布片ニ汚物ノ全ク附著セサルニ至ルマテ(大口徑砲ニ在リテハ少クモ三日間)日々手入ヲ復行スヘシ

三 手入實施ノ要領左ノ如シ

腔	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="486 630 1216 718">各場合ニ應ズル手入法</td> <td data-bbox="486 718 1216 1072"> <p>一 射撃後直ニ腔中洗滌液ニテ洗滌手入ヲ實施シ得ル場合</p> <p>二 射撃後直ニ手入ヲ實施シ得サルカ又ハ燒蝕、腐蝕等ノ爲射撃後ノ最初ノ手入ニテ完全ニ燼渣ヲ除去シ得サル場合</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="486 1072 1216 1161">區分</td> <td data-bbox="486 1072 1216 1827"> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="486 1072 1216 1161">實</td> <td data-bbox="486 1161 1216 1827"> <p>1 砲腔ハ腔中洗滌液(以下洗滌液ト略稱ス)又ハ燼渣ニテ洗滌ス</p> <p>2 藥室ハ洗滌液ヲ浸マセタル布片ヲ以テ拭淨ス</p> <p>3 閉鎖機ノ各部ハ分解ノ上洗滌液ニテ十分洗滌ス</p> <p>4 洗滌後各部ニ附著セル液ヲ拭除シ腔中ヲ検査シタル後「スピンドル」油ヲ塗布ス</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="486 1161 1216 1249">施</td> <td data-bbox="486 1249 1216 1827"> <p>1 前號ニ依リ洗滌液ニ依ル洗滌ヲ實施シタル後殘液ヲ拭除ス</p> <p>2 腔中油ヲ浸マセタル布片ヲ洗桿頭ニ纏ヒ腔面ニ等齊ニ之ヲ塗布シ數時間乃至十數時間放置シテ發錆ノ素因タル燼渣等ヲ浮出セシム</p> <p>3 要スレハ前二項ノ手入ヲ反復シタル後布片ヲ以テ拭淨シ腔中ヲ検査シテ「スピンドル」油ヲ塗布ス</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="486 1249 1216 1338">要</td> <td data-bbox="486 1338 1216 1827"> <p>注意 本場合ニ於テ腔中油ニ依ル手入ヲ行フコトナク直ニ「スピンドル」油ヲ塗布スルトキハ鏽中ニ浸入セル燼渣ハ油膜下ニ在リテ腐蝕作用ヲ行フモノトス</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="486 1338 1216 1426">領</td> <td data-bbox="486 1426 1216 1827"></td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	各場合ニ應ズル手入法	<p>一 射撃後直ニ腔中洗滌液ニテ洗滌手入ヲ實施シ得ル場合</p> <p>二 射撃後直ニ手入ヲ實施シ得サルカ又ハ燒蝕、腐蝕等ノ爲射撃後ノ最初ノ手入ニテ完全ニ燼渣ヲ除去シ得サル場合</p>	區分	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="486 1072 1216 1161">實</td> <td data-bbox="486 1161 1216 1827"> <p>1 砲腔ハ腔中洗滌液(以下洗滌液ト略稱ス)又ハ燼渣ニテ洗滌ス</p> <p>2 藥室ハ洗滌液ヲ浸マセタル布片ヲ以テ拭淨ス</p> <p>3 閉鎖機ノ各部ハ分解ノ上洗滌液ニテ十分洗滌ス</p> <p>4 洗滌後各部ニ附著セル液ヲ拭除シ腔中ヲ検査シタル後「スピンドル」油ヲ塗布ス</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="486 1161 1216 1249">施</td> <td data-bbox="486 1249 1216 1827"> <p>1 前號ニ依リ洗滌液ニ依ル洗滌ヲ實施シタル後殘液ヲ拭除ス</p> <p>2 腔中油ヲ浸マセタル布片ヲ洗桿頭ニ纏ヒ腔面ニ等齊ニ之ヲ塗布シ數時間乃至十數時間放置シテ發錆ノ素因タル燼渣等ヲ浮出セシム</p> <p>3 要スレハ前二項ノ手入ヲ反復シタル後布片ヲ以テ拭淨シ腔中ヲ検査シテ「スピンドル」油ヲ塗布ス</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="486 1249 1216 1338">要</td> <td data-bbox="486 1338 1216 1827"> <p>注意 本場合ニ於テ腔中油ニ依ル手入ヲ行フコトナク直ニ「スピンドル」油ヲ塗布スルトキハ鏽中ニ浸入セル燼渣ハ油膜下ニ在リテ腐蝕作用ヲ行フモノトス</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="486 1338 1216 1426">領</td> <td data-bbox="486 1426 1216 1827"></td> </tr> </table>	實	<p>1 砲腔ハ腔中洗滌液(以下洗滌液ト略稱ス)又ハ燼渣ニテ洗滌ス</p> <p>2 藥室ハ洗滌液ヲ浸マセタル布片ヲ以テ拭淨ス</p> <p>3 閉鎖機ノ各部ハ分解ノ上洗滌液ニテ十分洗滌ス</p> <p>4 洗滌後各部ニ附著セル液ヲ拭除シ腔中ヲ検査シタル後「スピンドル」油ヲ塗布ス</p>	施	<p>1 前號ニ依リ洗滌液ニ依ル洗滌ヲ實施シタル後殘液ヲ拭除ス</p> <p>2 腔中油ヲ浸マセタル布片ヲ洗桿頭ニ纏ヒ腔面ニ等齊ニ之ヲ塗布シ數時間乃至十數時間放置シテ發錆ノ素因タル燼渣等ヲ浮出セシム</p> <p>3 要スレハ前二項ノ手入ヲ反復シタル後布片ヲ以テ拭淨シ腔中ヲ検査シテ「スピンドル」油ヲ塗布ス</p>	要	<p>注意 本場合ニ於テ腔中油ニ依ル手入ヲ行フコトナク直ニ「スピンドル」油ヲ塗布スルトキハ鏽中ニ浸入セル燼渣ハ油膜下ニ在リテ腐蝕作用ヲ行フモノトス</p>	領	
各場合ニ應ズル手入法	<p>一 射撃後直ニ腔中洗滌液ニテ洗滌手入ヲ實施シ得ル場合</p> <p>二 射撃後直ニ手入ヲ實施シ得サルカ又ハ燒蝕、腐蝕等ノ爲射撃後ノ最初ノ手入ニテ完全ニ燼渣ヲ除去シ得サル場合</p>												
區分	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="486 1072 1216 1161">實</td> <td data-bbox="486 1161 1216 1827"> <p>1 砲腔ハ腔中洗滌液(以下洗滌液ト略稱ス)又ハ燼渣ニテ洗滌ス</p> <p>2 藥室ハ洗滌液ヲ浸マセタル布片ヲ以テ拭淨ス</p> <p>3 閉鎖機ノ各部ハ分解ノ上洗滌液ニテ十分洗滌ス</p> <p>4 洗滌後各部ニ附著セル液ヲ拭除シ腔中ヲ検査シタル後「スピンドル」油ヲ塗布ス</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="486 1161 1216 1249">施</td> <td data-bbox="486 1249 1216 1827"> <p>1 前號ニ依リ洗滌液ニ依ル洗滌ヲ實施シタル後殘液ヲ拭除ス</p> <p>2 腔中油ヲ浸マセタル布片ヲ洗桿頭ニ纏ヒ腔面ニ等齊ニ之ヲ塗布シ數時間乃至十數時間放置シテ發錆ノ素因タル燼渣等ヲ浮出セシム</p> <p>3 要スレハ前二項ノ手入ヲ反復シタル後布片ヲ以テ拭淨シ腔中ヲ検査シテ「スピンドル」油ヲ塗布ス</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="486 1249 1216 1338">要</td> <td data-bbox="486 1338 1216 1827"> <p>注意 本場合ニ於テ腔中油ニ依ル手入ヲ行フコトナク直ニ「スピンドル」油ヲ塗布スルトキハ鏽中ニ浸入セル燼渣ハ油膜下ニ在リテ腐蝕作用ヲ行フモノトス</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="486 1338 1216 1426">領</td> <td data-bbox="486 1426 1216 1827"></td> </tr> </table>	實	<p>1 砲腔ハ腔中洗滌液(以下洗滌液ト略稱ス)又ハ燼渣ニテ洗滌ス</p> <p>2 藥室ハ洗滌液ヲ浸マセタル布片ヲ以テ拭淨ス</p> <p>3 閉鎖機ノ各部ハ分解ノ上洗滌液ニテ十分洗滌ス</p> <p>4 洗滌後各部ニ附著セル液ヲ拭除シ腔中ヲ検査シタル後「スピンドル」油ヲ塗布ス</p>	施	<p>1 前號ニ依リ洗滌液ニ依ル洗滌ヲ實施シタル後殘液ヲ拭除ス</p> <p>2 腔中油ヲ浸マセタル布片ヲ洗桿頭ニ纏ヒ腔面ニ等齊ニ之ヲ塗布シ數時間乃至十數時間放置シテ發錆ノ素因タル燼渣等ヲ浮出セシム</p> <p>3 要スレハ前二項ノ手入ヲ反復シタル後布片ヲ以テ拭淨シ腔中ヲ検査シテ「スピンドル」油ヲ塗布ス</p>	要	<p>注意 本場合ニ於テ腔中油ニ依ル手入ヲ行フコトナク直ニ「スピンドル」油ヲ塗布スルトキハ鏽中ニ浸入セル燼渣ハ油膜下ニ在リテ腐蝕作用ヲ行フモノトス</p>	領					
實	<p>1 砲腔ハ腔中洗滌液(以下洗滌液ト略稱ス)又ハ燼渣ニテ洗滌ス</p> <p>2 藥室ハ洗滌液ヲ浸マセタル布片ヲ以テ拭淨ス</p> <p>3 閉鎖機ノ各部ハ分解ノ上洗滌液ニテ十分洗滌ス</p> <p>4 洗滌後各部ニ附著セル液ヲ拭除シ腔中ヲ検査シタル後「スピンドル」油ヲ塗布ス</p>												
施	<p>1 前號ニ依リ洗滌液ニ依ル洗滌ヲ實施シタル後殘液ヲ拭除ス</p> <p>2 腔中油ヲ浸マセタル布片ヲ洗桿頭ニ纏ヒ腔面ニ等齊ニ之ヲ塗布シ數時間乃至十數時間放置シテ發錆ノ素因タル燼渣等ヲ浮出セシム</p> <p>3 要スレハ前二項ノ手入ヲ反復シタル後布片ヲ以テ拭淨シ腔中ヲ検査シテ「スピンドル」油ヲ塗布ス</p>												
要	<p>注意 本場合ニ於テ腔中油ニ依ル手入ヲ行フコトナク直ニ「スピンドル」油ヲ塗布スルトキハ鏽中ニ浸入セル燼渣ハ油膜下ニ在リテ腐蝕作用ヲ行フモノトス</p>												
領													

手入

砲	腔	機退駐
<p>三 洗滌液ヲ有セサルカ又ハ之ニ依ル洗滌手入ヲ行フ餘裕ナキ場合</p> <p>1 腔中油ヲ浸マセタル布片ヲ洗桿頭ニ纏ヒ腔面ヲ拭淨シタル後前號2及3ニ依リ手入ヲ行フ</p> <p>2 若「スピンドル」油ヲ塗布スル前ニ洗滌液ヲ得タル場合ニハ先ツ之ニテ洗滌ヲ行フヲ有利トス</p>	<p>四 洗滌液及腔中油共ニ之ヲ有セサル等已ムヲ得サル場合</p> <p>此場合ニ在リテハ「スピンドル」油ヲ以テ洗滌スルコトヲ得ルモ其效果ハ十分ナラサルコトニ注意スルヲ要ス</p>	<p>腔中洗滌ノ方法概ネ左ノ如シ</p> <p>一 打殼藥莢等ヲ用ヒ藥室ヲ閉塞シ適宜ノ方法ニ依リ之ヲ支持シ又砲口ニハ砲口保護器ヲ裝ス</p> <p>二 洗桿頭ヲ洗滌液ニ浸シ腔中ニ挿入シテ洗桿ヲ進退セシメ屢々洗桿頭ニ液ヲ注キ概ネ三十回洗滌シテ渣ヲ除去ス</p> <p>三 洗滌液ヲ洗桿頭及洗桿内ヲ通シ注流スル如ク製作セル給水旋回式洗桿頭ヲ用フルカ又ハ旋回式洗桿頭ヲ用ヒ液ヲ砲尾栓(例ヘハ打殼藥莢等)ノ中央ノ孔ヨリ注入スル如クシテ洗滌スレハ操作容易ナリ</p>
<p>各場合ニ應ル手入法</p>		
<p>腔中洗滌液ノ使用スル洗滌ノ方法概ネ左ノ如シ</p> <p>一 打殼藥莢等ヲ用ヒ藥室ヲ閉塞シ適宜ノ方法ニ依リ之ヲ支持シ又砲口ニハ砲口保護器ヲ裝ス</p> <p>二 洗桿頭ヲ洗滌液ニ浸シ腔中ニ挿入シテ洗桿ヲ進退セシメ屢々洗桿頭ニ液ヲ注キ概ネ三十回洗滌シテ渣ヲ除去ス</p> <p>三 洗滌液ヲ洗桿頭及洗桿内ヲ通シ注流スル如ク製作セル給水旋回式洗桿頭ヲ用フルカ又ハ旋回式洗桿頭ヲ用ヒ液ヲ砲尾栓(例ヘハ打殼藥莢等)ノ中央ノ孔ヨリ注入スル如クシテ洗滌スレハ操作容易ナリ</p>		
<p>腔中ニ氣泡混在セルトキハ鋼部腐蝕ノ原因ト成ルモノトス故ニ射撃間ニ於テ其疑アリタルモノハ射撃後駐退機ヲ分解シテ手入ヲ行フヘシ</p>		

復坐機

二 隔板ヲ有セサル空氣復坐機ハ射撃ノ震動ニ由リ液中ニ空氣混入シテ多數ノ氣泡ヲ生シ特ニ活塞桿ニ附著セルモノハ消失シ難キ爲腐蝕ヲ發生シ易シ故ニ此種ノ復坐機ハ狀況ノ許ス限り之ヲ分解シテ手入ヲ行フヘシ

第二款 精密手入

第十六 精密手入ハ射撃演習又ハ秋季演習後並格納ニ際シ之ヲ行フモノトス

大口徑固定砲架ハ概ネ五年ニ一回砲身ヲ後退シ(爲シ得レハ砲身、砲架等ノ連結ヲ解キ)其接際部及平常實施シ難キ部分ノ手入ヲ行フヘシ

第十七 精密手入ハ當該火砲ノ取扱法ニ依リ各部ヲ分解シテ之ヲ行ヒ又要スレハ塗料ノ塗換若ハ補修塗ヲ行フヘシ

分解手入ニ方リテハ齒車、齒弧、軸筒、樞軸部等ノ反起、偏磨或ハばね、「ボルト」、駐栓等ノ衰損、屈曲、折損又ハ緊塞革、革環及革筒等ノ衰損セルモノハ修正若ハ交換シ日常外部ヨリ拭淨シ能ハサル部分特ニ樞軸部及摩擦部等ハ拭淨後十分ニ塗油シテ結

手入

合スヘシ又注油孔、油溝等ノ閉塞セルモノハ之ヲ開通セシメ油壺、脂溜ニハ總テ脂油ヲ填實スルヲ要ス

第十八 舊油ノ除去困難ナルモノハ小部品ニ在リテハ加熱セル「スピンドル」油ニ浸漬シ其他ハ「スピンドル」油又ハ「テレピン」油ニテ之ヲ溶解セシメテ除去スヘシ

第十九 各部ノ手入ハ普通手入ニ準スルノ外左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス但「ペトロラタム」ヲ塗布スルモノノ外普通手入ノ區分ニ依リ塗油スルモノトス

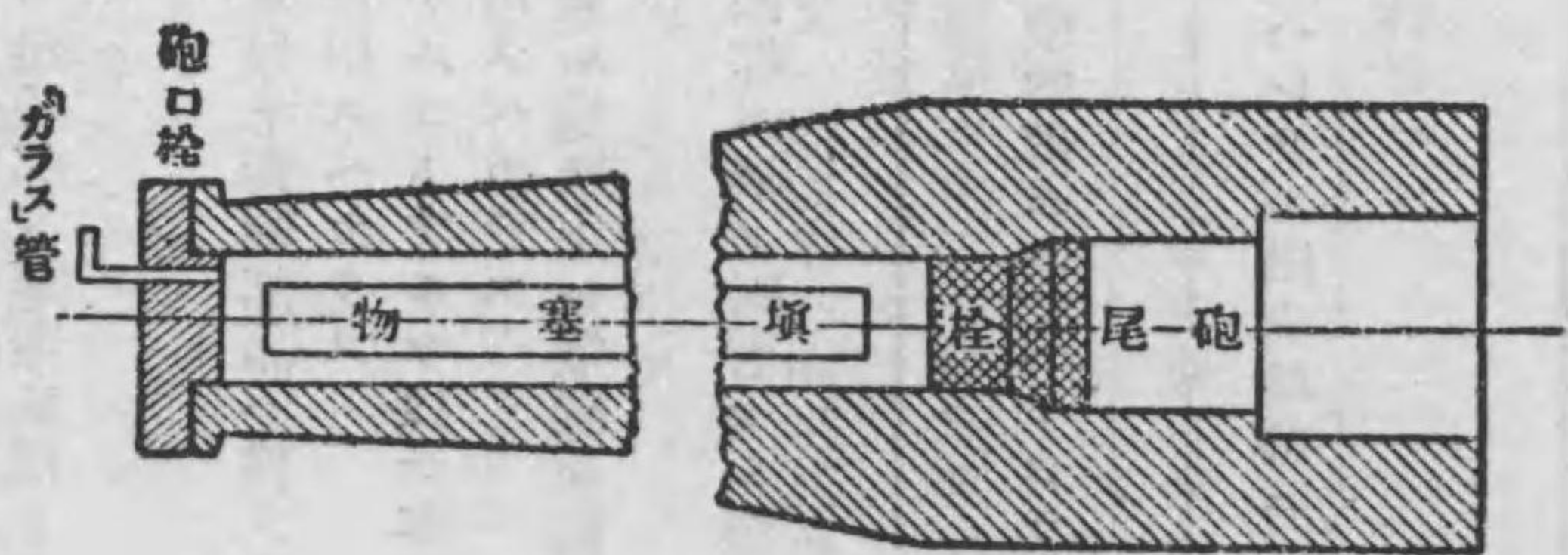
區分	實	施	要	領	
砲	<p>一 結合部ニ手入ヲ實施シ得サル部分ノ手入ヲ綿密ニシ防塵板ヲ有スルモノハ絨毛ノ污垢ヲ除去スヘシ</p> <p>二 砲腔面ニ附著セル銅ノ除銅液ニ依ル除去法左ノ如シ</p>	<p>一 準備</p> <p>砲腔ヲ清拭シタル後揮發油ニテ殘油ヲ十分除去シ砲身ノ兩端ニハ砲口栓及砲</p>	<p>一 備考</p> <p>砲口栓ハ適宜ノ方法ニ依リ緊縛スヘシ</p> <p>二 砲尾栓ハ閉鎖機又ハ適宜ノ方法ニ依リ支撐スヘシ</p>		

機 鎖 閉 ・ 身

手 入

領	要	施
	<p>尾栓ヲ裝シテ閉塞シ栓ト砲身トノ接觸面ニハ「ペトロラタム」ヲ塗布スヘシ</p> <p>又要スレハ腔内容積ヲ減スル爲填塞物ヲ挿入シ且砲身ニ適度ノ射角ヲ附與ス</p>	<p>二 實 施</p> <p>砲口栓ノ一方ノ「ガラス」管ヨリ液ヲ徐々ニ注入シ滿量ト爲リタルトキハ管ヲ閉塞シ二十四時間以上放置ス然ルトキハ液ハ藍色ニ變化スルヲ以テ銅附著ノ程度ニ應シ液ノ變色少キニ至ルマテ要スレハ之ヲ復行スヘシ</p>
	<p>三 洗 滌</p> <p>除銅作業終了後ハ除銅液ノ殘存セサル如ク洗滌用「ポンプ」等ヲ使用シテ完全ニ水洗シタル後水分ヲ除去シ「スピンドル」油ヲ塗布スヘシ</p>	

圖 二 第



砲身・閉鎖機		砲架
<p>注 意 事 項</p> <p>一 藥室ハ除銅ノ必要ナキヲ以テ砲尾栓ノ前端ハ起綫部ト藥莖口部トノ中間ニ在ラシムヘシ</p> <p>二 除銅液ハ使用直前ニ調製スヘシ</p> <p>三 液ハ銅合金ヲ腐蝕セシムルヲ以テ後坐尺等ノ如キ黃銅部品ハ豫メ除去スヘシ又砲尾栓トシテ藥莖其他ノ銅合金ヲ使用スヘカラス</p> <p>四 液ハ亞鉛ト作用スルトキハ鐵部ニ對シ有害ナルコトアルヲ以テ容器又ハ填塞物ハ亞鉛鋼「メツキ」板製ノモノヲ使用スヘカラス</p> <p>五 作業實施者ハ「アンモニアガス」ノ刺戟ヲ避クル爲風上ニ位置シ尙要スレハ鼻覆ヲ使用スルヲ可トス</p> <p>六 作業後液ノ洗滌十分ナラサルカ又ハ砲身外面等ニ液ノ附著セル儘放置スルトキハ發錆ノ原因トナルコトアリ</p>		<p>一 中小口徑砲ハ各部ヲ分解シテ拭淨シ結合時外部ニ露ハレサル鐵素地部ニハ「ペトロラタム」ヲ塗布スヘシ</p> <p>二 分解式大口徑砲ハ普通手入ニ準シ各部ヲ拭淨スヘシ</p>
<p>三 砲腔ノ拭淨及閉鎖機ノ手入ハ普通手入ニ同シ</p> <p>但自働閉鎖裝置ハ分解ノ上各部ヲ拭淨シばね及ばね室内部ニハ「ペトロラタム」ヲ塗布スヘシ</p>		

駐退機・復坐機		照準機	砲床
<p>一 分解制限品ノ外各部ヲ分解シテ左ノ要領ニ依リ手入ヲ行フヘシ</p> <p>1 駐退管、唧筒(又ハ空氣罐)等ハ布片ヲ以テ外部ヲ拭淨シ内面ハ濕布又ハ油布ヲ纏ヒタル桿ヲ以テ拭淨要スレハ水洗シタル後水分ヲ拭除スヘシ</p> <p>又管壁ニ設ケタル漏溝、準溝等ニ附著セル金屬屑粉又ハ塵埃等ハ刷毛又ハ布片ヲ纏ヒタル木片等ヲ以テ之ヲ除去スヘシ</p> <p>2 駐退液ヲ注入シテ結合スル様式ノモノハ其注入直前ニ必ス拭淨ヲ行フヘシ又直ニ結合セサルトキハ内部ニ塵埃侵入シ且發錆シ易キヲ以テ布片等ヲ以テ其口部ヲ閉塞シ稍、長ク分解ノ儘置クトキハ「スピンドル」油、「ワセリン」等ヲ用ヒ一時防錆ノ處置ヲ講スヘシ</p> <p>三 活塞桿ハ日常手入ニ準シ手入スヘシ</p> <p>4 瓣、緊塞用具、塞螺、壓螺等ハ凝著セル污垢ヲ拭除スヘシ</p> <p>5 檢液裝置ハ污垢及錆ヲ除去シ其移動ヲ圓滑ナラシムヘシ</p> <p>6 「ゴム」彈褥ニ附著セル污垢、油分等ハ乾布ヲ以テ拭淨スヘシ</p> <p>7 ばね復坐式駐退機ノ駐退管外部及爲シ得レハ空氣復坐機空氣罐内部ニ「ペ</p>		<p>一 各部ヲ分解シテ拭淨スヘシ</p> <p>二 平衡機ハ各部ヲ分解シ平衡ばね其他ノ鐵部ニ「ペトロラタム」ヲ塗布スヘシ</p>	<p>一 固定砲床ハ普通手入ニ準シ手入スヘシ</p> <p>二 移動砲床ハ附著セル泥土ヲ水洗シ要スレハ補修塗ヲ行フヘシ</p>

手入

駐 退 機 復 坐

- 8 トロラタム」ヲ塗布スヘシ
- 8 復坐ばね、隔板ばね等ハ要スレハ舊油ヲ除去シテ「ペトロラタム」ヲ塗布スヘシ
- 9 駐退液ヲ濾過清淨シ要スレハ新液ヲ補充スヘシ
- 二 分解制限品ト雖概ネ毎年一回駐退液ヲ排出シ濾過清淨ヲ行フヘシ
- 三 駐退(復坐)液ノ種類及使用法左ノ如シ
- 1 液ノ種類
  - イ 駐退液ハ舊式火砲中ニハ純「グリセリン」ヲ使用スルモノアルモ通常「グリセリン」ニ容ト水一容トノ混合液ヲ使用ス
  - 復坐液ハ通常駐退液ニ同シキモ兵器ニ依リ鑛油(純良ナル「スピンドル」油)ヲ使用スルモノアリ
  - ロ 「グリセリン」ニ容ト水一容トノ混合液ハ各種ノ配合比中凝固點最低キモノニシテ常溫ニ於テ「ボーマー」浮秤ニ依ルニ〇度ノ濃度ヲ有スルモノトス
  - ハ 「グリセリン」ハ弱酸性ヲ有シ活塞桿、駐退管等腐蝕ノ原因トナルヲ以テ之ヲ中和スル爲前號駐退液ニ苛性「ソーダ」又ハ消石灰ヲ添加セルモノアリ
  - ニ 「グリセリン」ニ配合スヘキ水ハ酸又ハ「アンモニア」微量ヲモ含有スヘカラス
- 2 舊液ノ使用法
  - イ 使用中ノ液ヲ再用スルニハ之ヲ濾過シテ金屬屑粉又ハ汚塵等ヲ去リ且液ヲ靜置シテ不純物ヲ沈降セシメ其上澄液ヲ使用ス

機

- ロ 液ヲ完全ニ濾過スルニハ深キ容器ニ容レ約一晝夜之ヲ靜置シ浮物ヲ沈降セシメ其上澄液ヲ採リ數重ノ木綿布等ニテ濾過ス
- ハ 液ノ容器ハ液ヲ不純ナラシメサル爲清淨ナルモノヲ使用シ且蓋ヲ施スヘシ
- ニ 舊液ハ濾過清淨後比重ヲ測定シ其誤差ヲ調整スル如ク加減シツツ新液ヲ注加ス
- ホ 液ノ甚タシク變色セルモノハ「リトマス」試験紙等ニテ點檢シ酸性ナルカ、「アルカリ」性特ニ著シキトキハ交換スルヲ要ス

第二節 格納品ノ手入

第一款 格納前ノ手入

- 第二十 火砲ヲ格納スルトキハ前節ニ準シ精密手入ヲ行ヒ鐵部ノ防錆、革製品ノ防微、麻及毛製品類ノ防虫等格納間ニ於ケル損傷豫防ノ處置ヲ十分ニ行フモノトス
- 第二十一 鐵素地部ニハ左記ノ外一般ニ「ペトロラタム」ヲ塗布スルモノトス但小部品類ハ液體浸漬格納ヲ行フコトヲ得

手 入



一時格納

閉鎖機、照準機等ノ如キ塗替ヲ行ハサルモ直ニ使用シ得ル部位ニハ「バラワセリン」ヲ塗布スルコトヲ得

二期長期格納

- 1 「ボルト」、「ナット」及黒皮肌ヲ有スルばねニシテ分離格納スルモノハ「サビ」止「ペイント」ヲ塗布スルコトヲ得而シテ使用ニ際シテハ特ニ之ヲ剝脱スルヲ要セス
- 2 鐵製輪帶ニハ「コールタール」ヲ塗布ス
- 3 露天格納砲ノ砲口栓、砲尾栓ノ目塗ニハ防錆脂ヲ、其他ノ素地露出部ニハ防錆脂又ハ「サビ」止「ペイント」ヲ塗抹ス

第二十二 「ペトロラタム」ハ各部等齊ニシテ緻密ナル被膜ヲ構成セシムルヲ要ス之カ爲長期格納品ニ在リテハ小部品ハ熔融セル「ペトロラタム」ニ浸漬スルヲ可トシ其他ハ刷毛等ニテ塗布シタル後要スレハ微熱ヲ加ヘテ熔融セシムルコトヲ得

第二十三 塗料ノ剝脱セルモノ又ハ塗料ノ部位ニ發錆ノ徵アルモノハ之ヲ剝脱シテ手入ヲ行ヒタル後補修塗又ハ塗替ヲ實施スヘシ

第二款 格納間ノ手入

第二十四 格納間ノ手入ヲ抽出検査ノ結果必要ト認メタルトキ全部又ハ局部ニ對シ前款ノ要領ニ依リ之ヲ行フモノトス

第二十五 長年射撃ヲ實施スル機會ナキ火砲ニシテ駐退機ヲ結合ノ儘格納セルモノニ在リテハ少クモ三年ニ一回駐退液ヲ排出シテ濾過シ若異狀ヲ認メタルトキハ駐退機ノ分解手入ヲ實施シ駐退液ヲ更新スヘシ

第二十六 大口徑固定砲架ノ手入ハ第十六ノ後段ニ依ルモノトス

## 第二章 取扱

### 第一節 分解結合上ノ注意

第二十七 火砲各部ノ分解ハ濫ニ必要以外ノ部位ニ互ラサルヲ要ス精度及緊塞ヲ必要トスルモノニ於テ殊ニ然リトス

第二十八 分解ノ制限ニ關シテハ當該火砲取扱法ノ規定ニ從フヘシ  
一般ニ分解ヲ制限セラレアルモノ概ネ左ノ如シ

制限範圍	制限部位	摘要
表尺架、觀準儀室ノ取附部		
象限儀室(大口徑砲)		

造兵廠ノ外分解スヘカラサルモノ		精密手入、修理交換等ノ爲ニ必要アルトキニ限リ分解シ得ルモノ	
表尺、觀準儀	象限儀、眼鏡	氣壓計、電壓電流計	空氣罐(唧筒)
遊動活塞式駐退復坐機		砲塔火砲駐退復坐機	搖架、砲架、架匡及匡礎
制轉機、照準機		駐退復坐機ノ塞螺、壓螺及節制機關ノ一部	
表尺、觀準儀及「パノラマ」眼鏡ノ本分畫ト補助分畫トノ一致セサルモノノ修正ノ如キハ分解ノ範圍ニアラス		體ヲ搖架體ヨリ離脱スルコトヲ制限スルモノトス	
本式ノモノハ各部ノ緊塞ニ技術ヲ要スル爲メ技術者以外ノ者ニ對シ分解ヲ禁スルモノトス但「隔板」「グリース」ノ填實及檢液裝置手入ノ爲ニ必要ナル局部ノ分解ハ此限リニアラス			

精密手入、修理交換等ノ爲必要アルトキニ限リ分解シ得ルモノ	閉鎖機頭螺	修理交換ノ場合ニ限ル
	撐轉架樞軸 空氣減壓瓣(砲塔)	

第二十九 分解、結合ノ準備上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 分解、結合ヲ行フニハ先ツ之ニ要スル諸器具及材料ヲ準備検査スルコト  
作業中器具ノ破損、切斷等ニ基因シ不慮ノ危険、損傷等ヲ招クコトアルヲ以テ作業前ニ於ケル此準備竝検査ハ最確實ニ實施スルヲ要ス
- 二 「スバナ」其他分解器具ノ取扱ハ最鄭重ニシ勉メテ變形、損傷等ヲ來ササル如ク注意スルコト又已ムヲ得サル場合ノ外部品ニ相當セサル「スバナ」類ヲ使用スヘカラス
- 三 鋼索ニ鋼條ヲ捲纏シテ作製セル環索ハ確實ニ抗力ヲ檢知シタルモノノ外使用スヘカラス柔軟鋼索ニハ索條ヲ捲纏セサルモノヲ安全トス
- 四 重量大ナルモノヲ分解、結合スルニハ周到ナル準備ヲ行ヒ落下、擊突等ノコトナ

キ様注意スヘシ特ニ大ナル軸桿等ニシテねぢ込ミタルモノヲ抽出スルトキハねぢヲ廻スニ從ヒ支撐面減少スルカ故ニ自然ニ垂下シテ屈撓又ハねぢノ毀損ヲ來スヲ以テ注意ヲ要ス

- 五 諸装置中複雑ナル部分ノ分解ニ際シテハ分解前能ク其狀況ヲ知悉シ置クコト緊要ニシテ要スレハ之ヲ記録シ又ハ必要ナル部分ニハ符號ヲ附シ置クコト
- 六 二装置以上ノ分解ヲ同時ニ行フトキ或ハ上下、左右又ハ前後同一寸法ノ部品或ハ類似ノモノ多キトキハ豫メ其方向、位置等ノ符號ヲ附シ結合ノ際反轉又ハ間違ハサル如クスルコト
- 七 大口徑砲及砲塔内諸装置ノ分解、結合ニハ起重機又ハ鏈鎖捲吊器ヲ使用スルコト多キヲ以テ其取扱、操法ニ習熟シ置クヲ要ス

第三十 分解、結合ノ實施上一般ニ注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 「ボルト」類ヲ緊緩スルニハ成シ得ル限り指頭ヲ以テ行ヒ必要ノ時期ノミ「スバナ」

取扱

類ヲ使用スルコト

「ボルト」類ハ特ニ調整ノ必要アルモノノ外必スねぢノ盡クルマテ十分螺著スヘキモノトス又數箇ノ「ボルト」類ヲ以テ螺著セルモノヲ緊緩スルニハ相對スルモノヲ交互ニ少量宛旋回スヘシ

二 分解、結合ニ際シ敲打ノ必要アルトキハ適當ナル圓材又ハ鉛鈍等ヲ使用シ此際必ス木板又ハ布片ヲ間シテ之ヲ行ヒ直接衝動ヲ與ヘサルコト

三 割「ピン」、駐栓等ノ挿入方向一定セサルモノニ在リテハ發射ノ激動、砲身ノ進退等ニ依リ容易ニ緩脫セサル方向ヲ選ヒテ挿入シ且割「ピン」ハ必ス其尖端ヲ少シク擴開シ置クコト(ばね性ノモノヲ除ク)

四 分解、結合ニ使用セル器具材料ハ確實ニ整理シ使用後ハ其品目數量ヲ嚴密ニ點檢シ結合ニ際シ誤テ機構ノ内部溝隙等ニ遺留スルカ如キコトナキ様注意スルコト

五 結合終ラハ必ス試動ヲ行ヒ其状態ヲ檢シ機能ヲ十分調整シ置クコト

六 砲塔内諸裝置ノ結合ニ際シ最考慮ヲ要スルモノハ其支坐、支基、托坐等ニシテ各部軸線ノ一致、平行、接觸等ノ良否等ハ概ネ此作業ノ巧拙ニ因ルモノナレハ其取

附、結合ニハ特ニ周密、慎重ナル技能ト注意ヲ必要トス

第三十一 各部分分解、結合ノ爲注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

區分	注	意	事	項
砲身	一 砲身ノ分解、結合ハ通常閉鎖機ヲ離脱シテ行フモノトス 二 砲身ノ上方ニテハ適宜ノ時機ニ砲尾ヲ支持シ且最後ノ離脱時機ニ砲口部ヲ搖架等ノ後面ニテハ突シメサル如ク砲口下面ヲ支持スルコト 三 結合ニ際シハ砲身ノ滑走面ト搖架等ノ上面トノ方向ヲ一致セシメ且滑走ノ終期ヲ緩徐ナラシムルコト 四 該部ノ保護ニ十分注意スルコト 五 砲身ヲ離脱セルトキ誘導溝、準溝又ハ防塵板等ヲ變形セサル如ク特ニ注意スルコト	砲身ノ上方ニテハ適宜ノ時機ニ砲尾ヲ支持シ且最後ノ離脱時機ニ砲口部ヲ搖架等ノ後面ニテハ突シメサル如ク砲口下面ヲ支持スルコト	砲身ノ上方ニテハ適宜ノ時機ニ砲尾ヲ支持シ且最後ノ離脱時機ニ砲口部ヲ搖架等ノ後面ニテハ突シメサル如ク砲口下面ヲ支持スルコト	砲身ノ上方ニテハ適宜ノ時機ニ砲尾ヲ支持シ且最後ノ離脱時機ニ砲口部ヲ搖架等ノ後面ニテハ突シメサル如ク砲口下面ヲ支持スルコト
閉鎖機	一 閉鎖機ノ小部品ハ往々紛失シ易キヲ以テ要スレハ小箱ヲ準備シテ之ニ容ルルヲ可トス 二 擊發機關等分解ノ際ハばねノ撥力ニ依リ部品ヲ取落スコトアリ			

取扱

機	退	駐	具準照	機鎖閉
式	坐	復	ね	ば

三 「アスベスト」塞環ハ屢々分解スヘカラス又手入後ハ直ニ筐ニ容レ其變形ヲ豫防スルコト

四 塞環ニ補助銅板ヲ使用シアルモノハ組立ニ方リ之ヲ忘レサル如ク注意スルコト

砲塔火砲ノ照準具ノ裝脫ハ容易ナラサルノミナラス往々屈撓セシムル等ノコトヨリ誤差ヲ生スル虞アルヲ以テ一旦裝著セラレタルモノハ已ムヲ得サルトキノ外之ヲ解脫スヘカラス

一 駐退機ノ分解ハ通常砲身ヲ離脱シタル後行フモノトス

若砲身ヲ離脱セスシテ之ヲ行ヒタル場合ニハ砲身ノ滑落ヲ防止スル爲搖架ニ俯角ヲ與フルカ又ハ麻索ヲ以テ之ヲ緊縛シ且高低照準機轉把ノ回轉ヲ防止スルコト

二 活塞桿ノ抽出及結合困難ナルトキハ活塞桿分解結合器ヲ使用スルヲ可トス(第三圖)

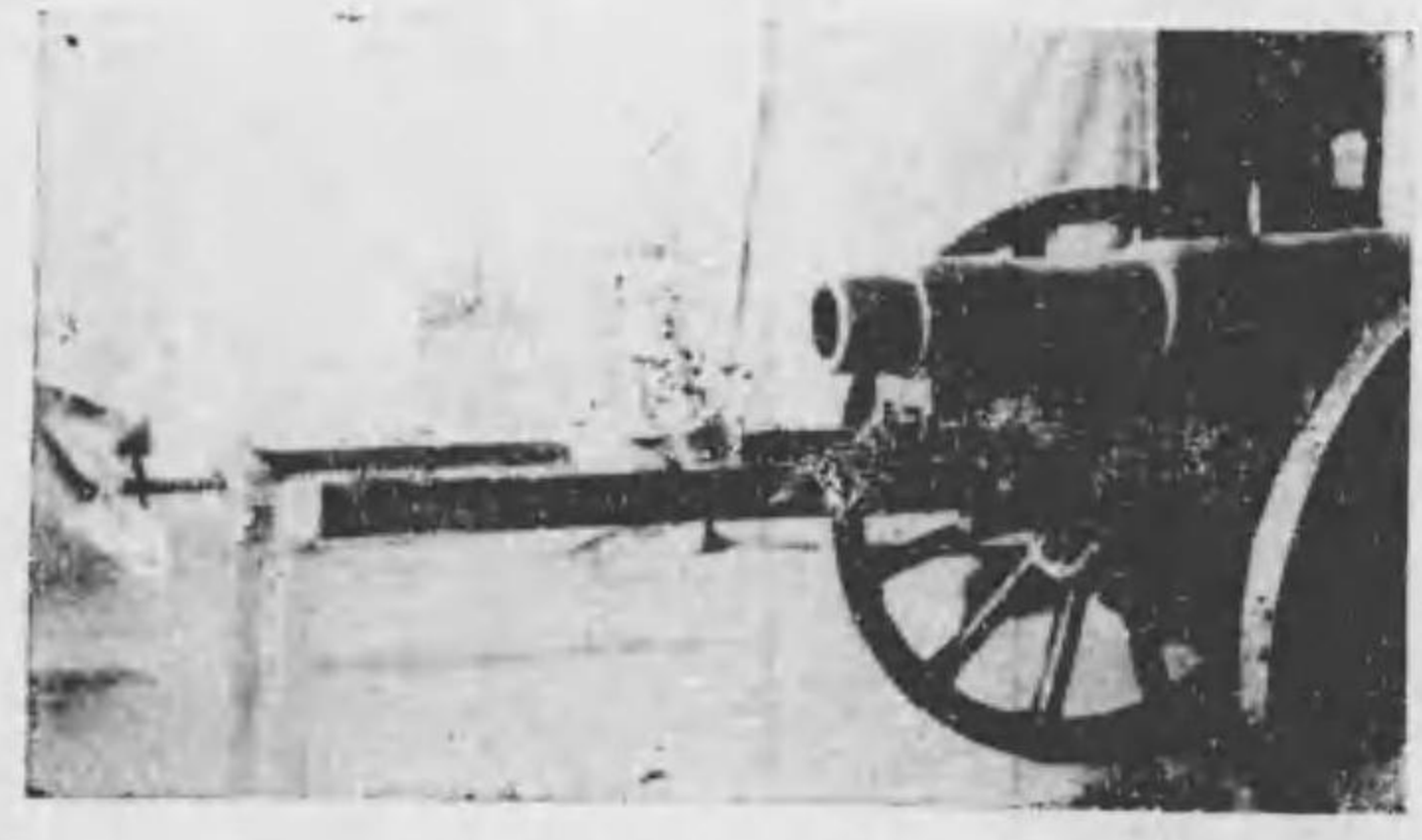


圖 三 第

機	坐	復	駐
(砲兵歩及式一四・式八三)	機	退	駐

三 伸縮螺(豫壓螺桿)緩解ノ終期ニ於テばねノ撥力ニ依ル駐退管ノ奔出ヲ防キ又結合初期ノ操作ヲ容易ナラシムル爲駐退管分解結合器ヲ使用スルヲ可トス(第四圖)

器具ノ使用法

1 活塞桿分解結合器

三八式十二糎榴彈砲ニ就キ一例ヲ示セハ次ノ如シ

本器ハ二名ヲ以テ操作スルヲ便トス而シテ先ツ砲身ヲ水平ニシ搖架駐帽螺桿ヲ緩メ本器ヲ取附ケタル後一名ハ轉把ヲ旋回シ活塞桿ヲ徐々ニ抽出ス此際一名ハ駐退管ノ前方ニ在リテ

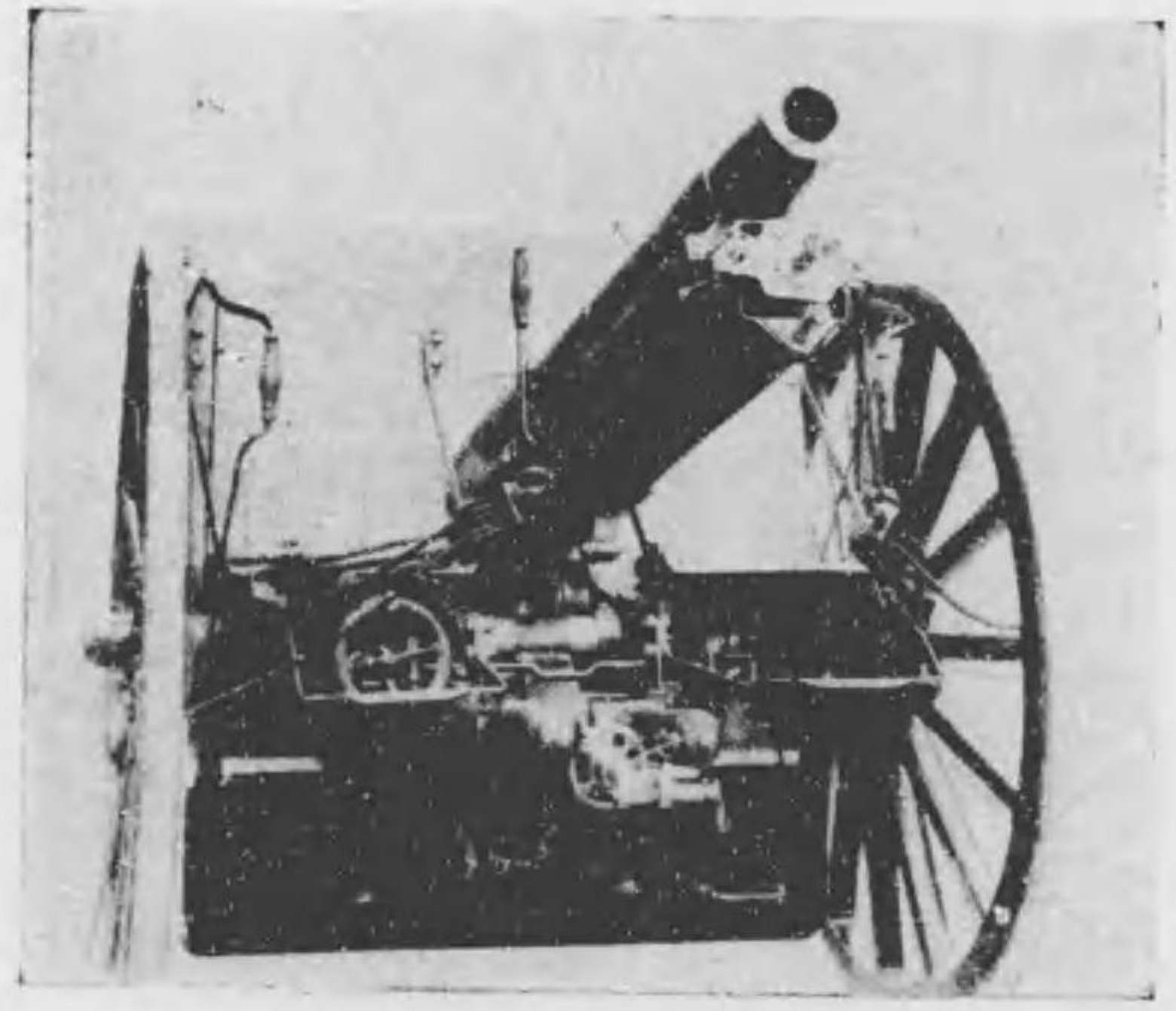


圖 四 第

取 扱

駐 退 機  
ば ね 復 坐 式

活塞桿全部抽出時ニ於ケル激突ヲ豫防シ且駐退液ノ流出スルヲ容器ニ受ケ駐退管ヨリ活塞桿全部抽出セハ取附「ボルト」ヲ緩メ活塞桿ヲ分解器ヨリ離脱ス挿入ハ抽出ト反對ニ操作ス

2 駐退管分解結合器

三八式野砲ニ就キ一例ヲ示セハ次ノ如シ  
三名ヲ以テ操作スルヲ便トス甲ハ砲尾ニ近ク乙、丙ハ各、砲前方車輪ノ左右ニ位置ス甲ハ砲身ニ若干射角ヲ附與シ乙、丙ハ搖架帽ヲ離脱シ壓塞螺ニ器具ヲ嵌装シ滑車ヲ用具端末ノ鋼索環部ト腕索鉤ニ懸ケ乙、丙ハ綱ノ一端ヲ握リ要スレハ片足ニテ車輪ノ鞞帽ヲ支ヘ綱ヲ引キ緊メ復坐ばねヲ若干壓縮シテ甲ノ作業ヲ容易ナラシム次テ甲ハ「スパナ」ヲ以テ伸縮螺ヲ戻回シテ逐次離脱スルニ從ヒ乙、丙ハ徐々ニ力ヲ緩メ復坐ばねヲ全部伸長セシムルマテ操作シタル後本器具ヲ脱シ駐退管、復坐ばね及其他ノ部品ヲ離脱ス結合ハ分解ト反對ニ行フ  
本器具ヲ使用シテ分解結合ヲ行フ際駐退管ヲ眞直ニ出入セシメ伸縮螺ノ結合ヲ容易ナラシムル如ク操作スヘシ

圖 五 第



四 復坐ばねハ其端末ヲ保護スル爲中間ニ坐板(隔環)ヲ装スルノ外其一端又ハ兩端ニモ之ヲ装スルモノアリ  
坐板(隔環)ハ通常黃銅板ナルモ端末ノモノハ鋼球入防擦環ヲ使用セルモノアリ

復 坐 機  
駐 退 機 (砲兵歩及式一四式八三)

シテ搖架ノ前端ニアルモノハ分解ノ際殘留シ結合時誤リヲ生スルコトアルヲ以テ注意スルコト

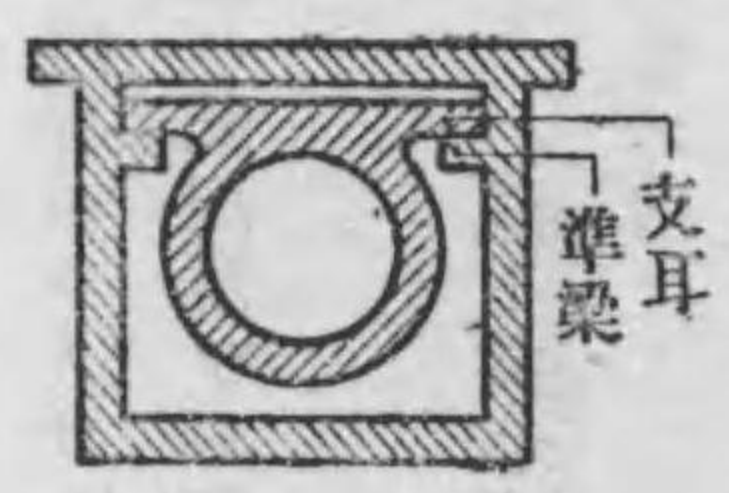
又坐環ノ内徑ハ最後部ノモノヲ大ナラシメ以テ結合ヲ容易ナラシメタルモノアリ故ニ其適用ヲ誤ラサルコト

五 復坐ばねハ左卷及右卷ノ二種ヲ有シ交互ニ之ヲ装スヘキモノトス而シテ其組合ハセノ順序ハ中隊毎ニ之ヲ一定シ置クヲ便トス

ばねハ壓縮ニ伴ヒ一端撓回スルヲ以テ同方向ノモノヲ結合スルトキハばねニ無理ナル力ヲ加ヘ之カ折損ノ原因ト成ルヲ以テナリ

六 駐退管ノ結合ニ方リテハ駐退管支耳又ハばね支管支耳等ヲ搖架内準梁ニ撃突セシメサル如ク靜カニ之ヲ行フコト

圖 六 第



七 活塞桿ヲ駐退管ニ装入スルニ方リ活塞及節制頭導子ノ上下ヲ誤リ又ハ活塞ノ導溝ト節制頭ノ導溝トヲ誤リタル儘強テ装入セントシテ導子ヲ毀損スルコトアリ(野砲、騎砲)  
活塞又ハ規整筒ノ導子ハ上下其幅ヲ異ニシアリ

取 扱

駐 退 機

（十ルセ立獨機兩）機坐復氣空・機退駐壓水  
（砲徑口大及加五）

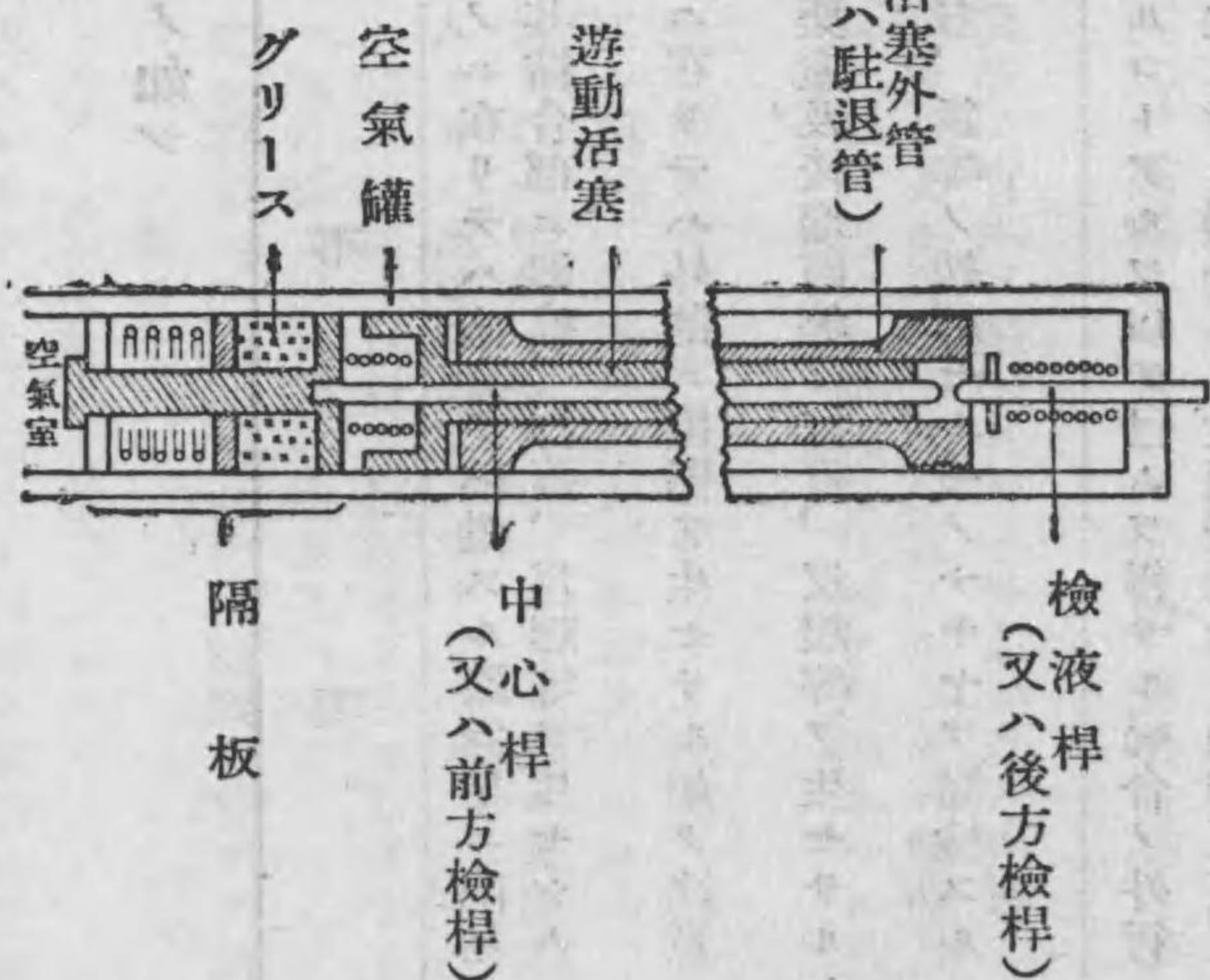
- 一 駐退液ノ排出ニ際シ其流出少クナリタルトキハ數回搖架ヲ俯仰スルヲ可トス  
排液ノ際無數ノ氣泡ヲ混スルハ空氣混入ノ微ナリトス
- 二 駐退液ノ注入ハ搖架ニ俯角ヲ與ヘ徐々ニ之ヲ行ヒ管内ニ空氣ヲ殘存セシメサル  
ヲ要ス駐退機ノ構造複雑ナルニ從ヒ空氣ノ逃避困難ナルヲ以テ特ニ此注意ヲ必要  
トス
- 三 空氣壓ハ當該火砲履歷ニ記載セル竣工試験時ノモノヲ標準トシテ規正スヘシ  
履歷記載ノ氣壓ハ通常最大射角ニ於テ復坐不足ヲ生セス又最小射角ニ於テ復坐終期ノ激突  
ナキ如ク規正シアルモ大口徑砲ニ在リテハ砲身ヲ水平ト爲シタルトキ自動的ニ復坐スルヲ  
限度トシテ復坐不足ヲ許容セルモノアリ其量ハ履歷ニ記載シアルヲ以テ參照スルヲ要ス

復 坐 機

（徑口小・中ルセ繋連機兩）機坐復退駐壓氣水

- 一 隔板ハばねニ依リ「グ  
リース」ヲ管壁ニ壓迫シ  
テ空氣ト液トノ緊塞作用  
ヲ行フモノトス之カ爲隔  
板裝入後更ニ一定量ノ  
「グリース」ヲ壓入シテ規  
定ノ壓力ニ達セシムルモ  
ノトス故ニ「グリース」減  
耗スルトキハ空氣カ駐退  
液中ニ混入スルニ至ルヘ  
シ
- 二 檢液裝置ヲ有スルモノ  
ハ注液ノ際其機能ノ良否  
ニ注意スルヲ要ス
- 三 其他前項ノ各號ニ依ル  
ヘシ

圖 七 第 遊動活塞外管  
(又ハ駐退管)



### 第二節 使用時ノ注意

#### 第三十二 使用上一般ニ注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

區分	注 意 事 項
砲 身	<p>一 放列姿勢ト途上姿勢トヲ異ニスルモノニ在リテハ砲身ヲ移動スル際過早ニ砲尾ノ連結ヲ解キテ砲身ヲ滑脱セシメ爲ニ其結合部ニ擦痕、打痕、反起等ヲ生セシムルコトナキ様注意スルコト</p> <p>二 砲身カ搖架内ヲ後復坐運動スルモノニ在リテハ外部ニ損傷ヲ生セサル如ク注意スルコト</p> <p>三 彈丸ヲ裝填又ハ抽出スルニ際シテハ藥室及後端面等ニ打痕、反起等ヲ生セサル如ク注意スルコト</p> <p>四 運動ノ前後ニハ外部ノ損傷又ハ小ねぢ、鉸等ノ緩解セルモノナキヤヲ點檢スルコト</p>
機 鎖 閉	<p>一 空撃ハ屢、引鐵ばね折損ノ原因トナルコトアルヲ以テ已ムヲ得サル場合ノ外行ハサルコト特ニ冬季ニ於テ已ムヲ得ス之ヲ行フ場合ニハ數回緩徐ナル操作ヲ反復シタル後實施スルヲ可トス砲塔火砲ノ撃發發火裝置ハ屢、空撃ヲ行フトキハ之ヲ毀損セシムルニ至ル又發火裝置各部ノ戻回、弛緩等ハ擊針ノ位置、突出量等ニ影響スルヲ以テ時々點檢スルヲ要ス</p> <p>二 閉鎖機ハ使用前必ス靜ニ閉閉ヲ試ミ異狀ノ有無ヲ點檢スルノ外必要以外頻繁ニ閉閉ヲ行フヘカラス又大口徑砲ハ之ヲ開放シタル儘長時間放置スルトキハ螺體及撐轉架ハ其重量ノ爲垂下シ自然閉閉機能ヲ害シ延テハ斷隔ねぢ部ヲ毀損スルニ至ルヘシ</p> <p>三 螺體ノ斷隔ねぢ室ノ相當ねぢ部ト啖合シ以テ火藥「ガス」ノ強大ナル壓力ニ堪エルヘキモノナルヲ以テ常ニ取扱ヲ丁寧ニシ磨滅、缺損ヲ招カサル如クスルコト</p> <p>四 藥筒ヲ完全ニ裝填シ得サルトキ閉鎖機ヲ以テ無理ニ壓入スヘカラス特ニ螺式閉鎖機閉鎖ノ終期ニ速度ヲ加ヘテ閉鎖スルトキハ危險ヲ生スルコトアリ</p> <p>五 螺體ノ斷隔ねぢ部、鎖栓ノ下面等ニハ特ニ打痕、反起、擦痕等ヲ生セシメサルコトニ注意シ若反起等ヲ生シタルトキハ細目鑿ヲ以テ靜ニ除去スヘシ</p> <p>六 塞環ノ外周塞環室ト接觸スル部分ハ最モ緊要ナル部位ニシテ且毀損シ易キヲ以テ常ニ取扱ヲ慎重ニシ該部ヲ清淨平滑ニ保ツヲ要ス</p> <p>七 門管ヲ挿入スルコトナク閉鎖機ヲ閉閉スルトキハ之ヲ開クト同時ニ指頭ニテ抽出子ヲ復位セシムルコト(砲塔)</p>

機 鎖 閉
<p>一 空撃ハ屢、引鐵ばね折損ノ原因トナルコトアルヲ以テ已ムヲ得サル場合ノ外行ハサルコト特ニ冬季ニ於テ已ムヲ得ス之ヲ行フ場合ニハ數回緩徐ナル操作ヲ反復シタル後實施スルヲ可トス砲塔火砲ノ撃發發火裝置ハ屢、空撃ヲ行フトキハ之ヲ毀損セシムルニ至ル又發火裝置各部ノ戻回、弛緩等ハ擊針ノ位置、突出量等ニ影響スルヲ以テ時々點檢スルヲ要ス</p> <p>二 閉鎖機ハ使用前必ス靜ニ閉閉ヲ試ミ異狀ノ有無ヲ點檢スルノ外必要以外頻繁ニ閉閉ヲ行フヘカラス又大口徑砲ハ之ヲ開放シタル儘長時間放置スルトキハ螺體及撐轉架ハ其重量ノ爲垂下シ自然閉閉機能ヲ害シ延テハ斷隔ねぢ部ヲ毀損スルニ至ルヘシ</p> <p>三 螺體ノ斷隔ねぢ室ノ相當ねぢ部ト啖合シ以テ火藥「ガス」ノ強大ナル壓力ニ堪エルヘキモノナルヲ以テ常ニ取扱ヲ丁寧ニシ磨滅、缺損ヲ招カサル如クスルコト</p> <p>四 藥筒ヲ完全ニ裝填シ得サルトキ閉鎖機ヲ以テ無理ニ壓入スヘカラス特ニ螺式閉鎖機閉鎖ノ終期ニ速度ヲ加ヘテ閉鎖スルトキハ危險ヲ生スルコトアリ</p> <p>五 螺體ノ斷隔ねぢ部、鎖栓ノ下面等ニハ特ニ打痕、反起、擦痕等ヲ生セシメサルコトニ注意シ若反起等ヲ生シタルトキハ細目鑿ヲ以テ靜ニ除去スヘシ</p> <p>六 塞環ノ外周塞環室ト接觸スル部分ハ最モ緊要ナル部位ニシテ且毀損シ易キヲ以テ常ニ取扱ヲ慎重ニシ該部ヲ清淨平滑ニ保ツヲ要ス</p> <p>七 門管ヲ挿入スルコトナク閉鎖機ヲ閉閉スルトキハ之ヲ開クト同時ニ指頭ニテ抽出子ヲ復位セシムルコト(砲塔)</p>

取 扱

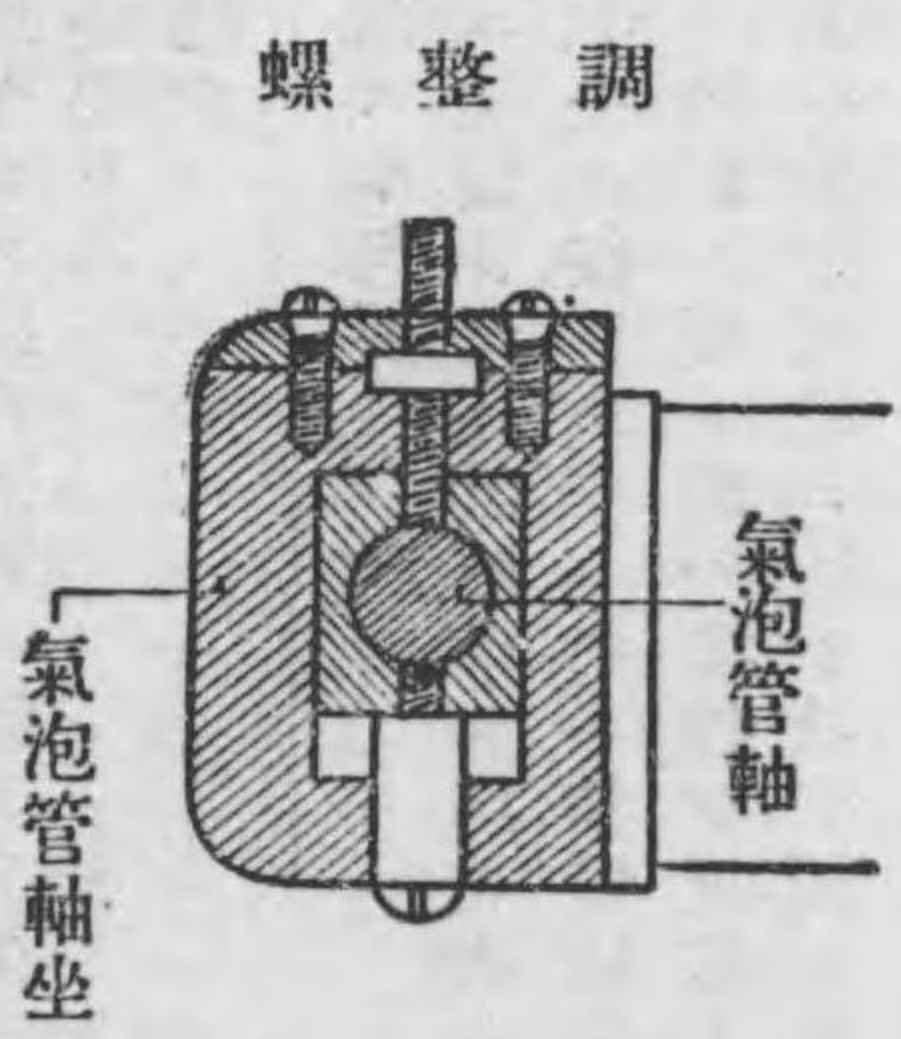


機 準 照	架 砲	架 搖
<p>一 高低及方向照準機摩擦板裝置ノ緊定強キニ過クルトキハ反動量ヲ減少スルノ利アルモ發射激動ノ緩衝不十分トナリ連繫各部ノ機能ヲ害シ照準操作ヲ困難ニスル虞アルヲ以テ反動量相當大ナルモ緩衝作用良好ナルトキハ強テ摩擦板ヲ緊定セサルヲ可トス</p> <p>二 旋回用齒圈ノ取附「ボルト」ハ大ナル荷重ヲ負擔スルモノナルヲ以テ往々緩ミヲ生スルコトアリ故ニ時々緊締度ヲ檢スルヲ要ス</p>	<p>一 駐鋤ハ十分ニ地中ニ吻入シ置クヲ必要トス若土地堅クシテ吻入セサルトキハ駐鋤止部ヲ掘開スヘシ堅硬ナル路面、岩石上又ハ凍土、結氷上等ニ於テハ土囊、雪囊等ヲ敷置シ衝力ヲ緩和スルコト</p> <p>二 駐杭ヲ打入スルニ方リテハ其打入スヘキ方向ヲ履板ノ駐杭室ノ方向ニ一致セシムルコト</p>	<p>一 搖架上面ヲ砲身滑走スルモノハ閉鎖機ノ「五」ニ準シ保護スルコト</p> <p>二 照準具取附部小ねぢノ封線ハ之ヲ切斷セサルコトニ注意シ若切斷シタルトキハ直ニ封線及封鐵ヲ施シ照準具ニ誤差ヲ生セシメサル如ク注意スルコト</p> <p>又封線ハ緊張ヲ容易ニスル爲總テ軟化セル銅線ヲ使用シアルモノトス</p> <p>三 表尺桿ノ挿脱大量移動又ハ眼鏡回轉盤ノ大量移動其他解脫裝置ニ依リ小移動ヲ大量移動ニ變更スルモノニ在リテハ十分之ヲ解脫シタル後移動セシムルコト</p>

品 屬 要 主	具 準 照	機 準 照
儀 限 象	<p>一 照準具ハ火砲ノ生命ニシテ其保存ノ良否ハ火砲ノ精度ニ影響スルモノトス故ニ之ヲ取扱ハ特ニ慎重ニスルコト</p> <p>二 照準具ノ裝脱ニ方リテハ桿部ト托架ノ方向ヲ一致セシメ以テ兩者ニ偏磨ヲ生セシメサルコト、弧形表尺ニ在リテハ特ニ其顧慮ヲ必要トス</p> <p>三 照準具ニ眼鏡ヲ挿脱スルトキノ注意モ低前號ニ同シ</p>	砲 塔 照 準 裝 置
		<p>一 俯仰、旋回ノ機能ヲシテ常ニ良好ノ狀態ヲ保持セシメンカ爲時々此等機構ヲ運轉スルヲ要ス然レトモ必要ノ度ヲ超ユヘカラス又運轉ハ終始一小區域ニ止ムルコトナク必ス其極度マテ施行スルコト肝要ニシテ此注意ヲ怠ルトキハ機構ノ一局部ノミヲ磨耗セシメ機能ヲ害スルニ至ルモノトス</p> <p>二 砲塔ヲ旋回セントスルトキハ必ス先ツ塔外所定方向射界内ニ人員又ハ障害物ノ有無ヲ檢シ且高低照準機ヲ準備シ所要ニ應シ直ニ俯仰ニ差支ナカラシムルヲ要ス一時砲塔ノ運轉ヲ中止シ再ヒ之ヲ開始セントスル時モ亦然リ特ニ中止時間長キニ亘リタルトキハ一層注意スルコト</p>

取 扱

主 要 屬 品			
象 眼 儀	氣 壓 計	氣 蓄 罐	電 纜
置ヲ移動シ又ハ調整螺ヲ旋回シテ氣泡ヲ中央ニ導クヘシ 調整螺ノ旋回ハ適宜ノ器具ヲ以テス但此際同螺ノ頭部ヲ毀損セサル如ク十分注意スルコト	一 氣壓計ノ誤差ハ復坐機空氣壓ノ調整ヲ誤リ不測ノ危害ヲ生スルコトアルヲ以テ常ニ正確ナラシムルコト 二 氣壓計ハ所定ノ檢定ヲ經タル正確ナルモノヲ備ヘ之ヲ標準トシテ時々點檢ヲ實施スルコト	一 壓縮空氣ヲ填實セル氣蓄罐ハ内壓ノ爲破裂スル虞アルヲ以テ其取扱ニハ特ニ注意スルヲ要ス 二 取扱ハ第一篇第十八章氣蓄罐ノ部ニ依ルヘシ	砲塔用發砲電纜ハ暑氣烈シキトキハ絶緣「ゴム」溶解シテ絶緣ヲ損シ短電路ヲ爲スコトアリ又寒冷甚シキトキハ電纜内ノ心線脆弱トナリテ時々内部ニ於テ切斷シ爲ニ電路不通トナルコトアルヲ以テ暑熱烈シキトキハ冷處ニ移シ寒冷ノ際ハ急激ナル緊張屈曲等ヲ爲ササル如ク取扱ニ注意スルコト



四六

豫 備 品
一 閉鎖機及駐退機ノ豫備品ハ托架ヲ有スルモノハ確實ニ其室ニ裝填シ否ラサルモノハ木綿、革屑又ハ木毛等ヲ填實シテ其移動ヲ防止スルコト 二 匣蓋裏面ノ員數表ハ汚損シ易キヲ以テ要スレハ「ボール」紙等ヲ介在セシムルヲ可トス

### 第三節 射撃時ノ注意

第三十三 射撃前各部ノ檢査及手入ヲ綿密ニシ射撃間ニ於ケル故障特ニ危害ノ豫防ニ注意スルヲ要ス駐退液量及空氣壓ノ點檢ハ特ニ緊要ナリ

第三十四 極寒地ニ在リテハ衝擊ニ依リばね類ノ折損スルコト多キヲ以テ最初ヨリ急激ニ作用セシムルコトナク數回緩徐ナル操作ヲ行ヒタル後使用スルヲ可トス

長ク寒氣ニ曝シタル火砲ハ狀況之ヲ許セハ最初ヨリ大初速又ハ尖銳彈射撃ヲ行フコトナク先ツ數發榴彈、榴霰彈又ハ弱裝藥ヲ以テ射撃ヲ行ヒ火砲各部ヲ馴致セシメタル後所望ノ射撃ヲ行フヲ可トス

取扱

第三十五 「アスベスト」塞環ハ極寒ノ季ニ於テハ射撃ニ先タチ五〇度附近ノ温湯ニテ温  
メテ使用スルヲ可トス

第三十六 射撃間特ニ注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 「ガス」漏レ、不發火又ハ遲發等ヲ生シタルトキハ其原因ヲ調査シ所要ノ處置ヲ講  
スルコト

二 空包ハ特ニ燼渣ヲ生スルコト多キヲ以テ續テ實射ヲ行フ場合ニハ豫メ腔中ヲ掃除  
スルヲ可トス

三 射撃中後坐長規定ノ範圍ヲ脱シ又ハ漸次不良ノ結果ヲ生スルトキハ一時射撃ヲ中  
止シ原因ヲ探究シ液又ハ空氣壓ニ依ルトキハ之ヲ補充スル等修正ノ後ニアラサレハ  
射撃ヲ續行スヘカラス後復坐ノ景況ニ異狀ヲ認ムル場合モ亦同シ

1 後坐尺ノ機能不良ナルトキハ後坐長ヲ過大ニ現示スルコトアルヲ以テ注意スル  
コト

2 後坐變換裝置ヲ有スルモノニ在リテハ變換裝置ノ點檢ヲ行フヲ要ス

3 檢液桿ヲ有スルモノニ在リテハ其動キニ注意スヘシ檢液桿ノ機能不良ナルヲ知  
ラスシテ液ノ不足若ハ過剩ニ氣付カサルトキハ不慮ノ害ヲ被ルコトアリ

四 空氣室内ノ空氣ハ氣温ノ低下ニ依リ氣壓ヲ減ス故ニ極寒地ニテハ之カ爲後坐長ノ  
延伸又ハ復坐不足ヲ生スルヲ以テ空氣ノ補充ヲ必要トスルコトアリ然レトモ多數  
ノ彈丸ヲ發射スルトキハ反テ空氣壓上昇ノ爲機能ヲ損スルコトアルヲ以テ注意ス  
ヘシ之カ爲小口徑砲ニ在リテハ約二〇〇發發射後各部ノ點檢ヲ行フヲ可トス

五 高低照準機ニ摩擦板ヲ有スルモノハ其緊定適度ナルヲ要ス若緩ニ過クルトキハ後  
坐ノ終期ニ於テ砲身仰起スルコトアリ

六 大口徑榴彈砲ハ發射後腔中ニ彈底支桿ヲ殘存セサルヤニ注意スヘシ

第三十七 斜面後復坐式固定火砲ニ在リテハ特ニ左ノ諸件ニ注意スヘシ

一 駐退機ノ取附「ボルト」、駐頭牝螺及火門軸ハ射撃ノ當初ニ於テ緩解シ易キヲ以テ

取 扱

二、三發間ハ毎回必ス之ヲ點檢シ要スレハ之ヲ緊定スヘシ但火門軸「スバナ」ヲ使用  
 スルトキハ塞環ヲ毀損セサル如ク「スバナ」ニ布片ヲ纏結シ又火門軸ヲ緊定シタルト  
 キハ駐頭牝螺緩解スルコトアルヲ以テ注意スヘシ  
 二 發射後閉鎖機ノ抽出困難ナルトキハ左ノ方法ニ依ル

- 1 抽機具轉把ヲ抽機具軸幹ニ裝シ之ヲ旋回シテ少シク螺體ヲ抽出ス
- 2 前號ニ依リ螺體ノ抽出困難ナルトキハ駐頭牝螺ヲ緩メテ強ク螺體ヲ之ニ觸突セ  
 シメ塞環ヲ後退セシム但此場合ニ於テハ再ヒ駐頭牝螺ヲ緊メタル後ニアラサレハ  
 螺體ヲ抽出スヘカラス

第三十八 砲塔火砲ニ在リテハ彈藥裝填後發音器音響ヲ發セサルトキハ先ツ門管ヲ換裝  
 シ尙音響シ發セサルトキハ發火裝置、電路又ハ發音器等ヲ檢シ補修調整ヲ行フヘシ  
 發砲電纜ノ懸垂セル部分ハ發射ノ激動、俯仰操作等ノ爲不知不識ノ間ニ砲架ノ突起部  
 ニ絡マリ切斷セラルルコト尠カラサルヲ以テ注意ヲ怠ルヘカラス

第三十九 擊發機能不良ノ原因概ネ左ノ如シ

區分	藥		莢		式	
	ガ <sup>レ</sup> ス漏		不發		火發	
	莢口部		雷管		發不	
故障ノ種類	雷管破レ		管破		發不	
原因	藥室ノ磨滅	擊針突出量過多	蠟劑ノ緊塞不良	擊力不足又ハ打擊セズ		
摘要	連續發生スルトキハ擊針ヲ交換スヘシ	ねぢ部ニ塗蠟シ緊塞スルモノトス	一 擊莖(擊針)尖端部ノ變形又ハ折損 二 同寸法過短 三 擊莖ばね衰損、折損 四 擊針室ノ汚損 五 擊針ニ塗油ノ過多 六 擊莖ノ早落 七 安全裝置ノ故障 八 遊嘴ノ結合不良 九 身管前進			
摘要	一 不發ノ際閉鎖機ヲ開クニハ遲發ニ因ル危害豫防上中小口徑砲ニ在リテハ十五秒乃至三十秒、大口徑砲ニ在リテハ一分以上ヲ間シテ之ヲ行フ					

取扱

取 扱	式 左 薬			
	火 發 不	管 門	レ	漏
	砲 發 塔 裝 火 置 砲	螺 門 管	塞 「ア ス ベ ス ト」 環	鋼 製 塞 環
	一 擊針ノ突出不定 二 擊針ノ發錆及「ガス」附著 三 電路ノ短絡、離脱又ハ接 觸ノ不完全	門管不良	一 「アスベスト」環ノ變質ニ 因ル彈力ノ喪失 二 塞環室ノ磨滅	一 塞環ノ磨滅又ハ疵痕 二 塞環室ノ磨滅
	二 擊發火ニテ不發ヲ生シタル トキハ發音器音響ノ有無、高低 等ニ依リ故障箇所ヲ判斷シ適當 ノ處置ヲ爲スヘシ 通常發音器ノ音響アル場合ハ發火 裝置ヲ、音響ナキトキハ門管ヲ交 換シテ發射ヲ試ムヘシ 三 擊發發火ニテ不發ヲ生シタル トキハ先ツ門管底ノ擊針痕跡ヲ 點檢シ門管又ハ發火裝置ヲ換裝	更ニ拉繩ヲ牽引シ尙發火セサルト キハ門管ヲ交換スヘシ	鋼製塞環ニ同シ 但豫備品トノ交換ハ部品交換ヲ行 ハス全部ヲ交換スヘシ	一 塞環ノ位置ヲ變更スヘシ 二 補助銅板ヲ裝スヘシ 三 豫備品ト交換スヘシ

「ス ガ」	式 英 薬			
	螺 門 管	遲	火 發 不	不 裝 發 不 管 爆
擊 砲 發 塔 裝 火 置 砲	螺 門 管	發	不 發 火	發 不 管 雷
出 過 ノ 針 擊	門管ノ緊塞不良又ハ門管室ノ 燒痕 門管ノ菊座ヲ害シテ短電 路ヲ形成ス(電氣發火)	擊 發 機 ノ 障 礙 遊 嘴 接 觸 面 ニ 擦 痕、 反 起 ヲ 生 シ 滑 脱 セ ス 引 鐵 ヲ 離 シ タ ル 反 動 ニ 因 リ 吻 合 ヲ 解 キ 擊 發 ス	點 火 藥 囊 偏 倚、 離 隔	極 影 響 擊 發 機 ノ 塗 油 粘 度 增 大 爆 管 底 面 ノ 蠟 及 水 分 ノ 凍 結
門 管 底 突 破 (擊 發)	間 座 ノ 厚 薄 增 減 ニ 依 リ 突 出 量 ヲ 調 整 ス ヘシ		特 ニ 變 裝 藥 ノ 場 合	故 障 部 品 ト 豫 備 品 ト 交 換 ス ヘシ 不 凍 油 ヲ 使 用 シ 又 ハ 拭 淨 ス ヘシ 射 擊 前 除 去 ス ヘシ 爆 管 ヲ 交 換 ス ヘシ
				二 不發ノ彈藥ヲ 抽出スルトキハ 墜落又ハ擊突等 ニ因ル危害ヲ防 止スルコト二十 分注意スヘシ

第四十 駐退機、復坐機能不良ノ原因概ネ左ノ如シ

機退駐式坐復ねば		區分
能	機退駐	故障ノ種類
後坐長過少	後坐長過大	原因
<p>一 活塞及節制頭ノ磨滅</p> <p>二 駐退液ノ不足又ハ稀薄</p> <p>三 復坐ばねノ折損</p> <p>四 各部磨損(主トシテ緊塞部)</p>	<p>一 活塞及節制頭ノ燒付</p> <p>二 砲身滑走部ノ燒付</p> <p>三 復坐ばねノ結合不良ナル爲駐退管ノ運動ヲ妨害スルトキ</p> <p>四 復坐ばね、防擦環ノ回轉不良</p> <p>五 緊塞具ノ緊定過度ニシテ活塞桿ノ運動ヲ阻止スルトキ</p> <p>六 後坐變換機ノ組立不良</p>	摘要
<p>一 連續發射數十發ニ及フトキハ復坐不足ヲ生ス之溫度上昇ニ伴フ駐退管内殘留空氣ノ影響及液ノ膨脹ニ原因スルモノニシテ駐退機ニハ支障ナキモ其量甚シキトキハ後坐長ニ影響スルコト大ナルヲ以テ復坐ヲ完了セシムル程度ニ駐退液ヲ排出スルヲ可トス而シテ冷却ノ後液ヲ補充シ滿量ト爲スヘシ(以下同シ)</p> <p>二 前記原因ニ依ル復坐不足ハ漸進的ニ生起ス若急ニ復坐不足ヲ生シ其量大</p>		

取扱

五五

式

式		門管不發火
裝藥不點火	砲塔發火	砲發裝置
<p>藥囊カ頭體(火門軸頭)ノ頭部ト離隔シアル爲</p>	<p>四 電流ノ不足</p> <p>五 門管ノ不良</p>	
砲塔發火	<p>三 スヘシ</p> <p>不發ヲ生シタル場合ハ二、三回發火操作ヲ反復シタル後原因ノ探究ニ著手スヘシ</p> <p>四 門管又ハ發火裝置ノ交換ハ不發火ヨリ一分時經過後閉鎖機ヲ閉鎖シタル儘行フヘシ</p>	
<p>一 不發後三十分ヲ經タル後ニアラサレハ閉鎖機ヲ開クヘカラス但實戰ニ在リテハ此限ニアラス</p> <p>二 閉鎖機ヲ開クトキハ砲後ニ在ル人員及彈藥ニ危險ヲ及サル如ク注意シ又噴氣ノ裝置ノ作動ヲ停止シ噴氣ノ藥室ニ進入スルヲ防止スヘシ</p>	<p>閉鎖機ヲ開キ藥囊カ頭體ニ近接シアルヤヲ檢スヘシ又此場合ニハ不慮ノ危險ヲ避クル爲特ニ若干分時ノ後之ヲ行フヘシ</p>	

五四

（砲徑口中大式立獨機兩）機坐復氣空・機退駐壓水

取  
扱

能機ノ機坐復	能機ノ機退駐	
復坐不足	後坐長過少	後坐長過大
<p>五 塞 四 駐退機活塞桿ノ復坐漏孔ノ閉 三 駐退機内ニ空氣ノ殘存 二 駐退機又ハ復坐機内部故障、 一 復坐機内空氣初張力過小、 摩擦大</p>	<p>五 後坐變換機組立不良 四 駐退液ノ濃度過大 三 連續射擊ノ爲液ノ膨脹 二 復坐機内空氣ノ初張力過大 一 駐退機活塞頭ノ摩擦、過緊又ハ擦痕</p>	<p>四 後坐變換機ノ衰損、磨滅又ハ組立不良 三 復坐機内空氣壓ノ初張力過小 二 駐退液ノ不足又ハ稀薄 一 駐退機活塞頭周圍ノ磨滅</p>
<p>最大射角ニ於ケル復坐不足 ハ砲身ヲ水平ニ復シタルト キ自動的ニ復坐スル程度ノ モノハ許容スルコトヲ得</p>	<p>ハ場合ニハ少クハ認メタ ニ原因ノ少クハ認メタ 但復坐ノ完了ハ認メタ テ復坐ノ完了ハ認メタ 背心ノ完了ハ認メタ 不足ノ完了ハ認メタ 上テ復坐ノ完了ハ認メタ テ復坐ノ完了ハ認メタ 斜面ノ完了ハ認メタ 二 射擊ノ完了ハ認メタ</p>	<p>一 射擊ノ完了ハ認メタ 増加スルモ復坐終期ノ強 突著シカラサルモノハ強 テ調整ヲ要セサルモノハ強 ス（以下同シ） 二 射擊ノ完了ハ認メタ</p>

五七

機退駐式坐復ねば

能機ノ機坐復	能機ノ機退駐	
節制作用不良	復坐速度過大	復坐不足
<p>三 弁ノ密合不良ノトキ ナルトキ</p>	<p>一 復坐節制作用不良 二 後坐長過短ナルトキ 三 液中ニ空氣ノ混在スルトキ</p>	<p>一 復坐ばね衰損又ハ折損 二 連續射擊ニ依リ駐退液膨脹ス ル爲 三 搖架底部ノ變歪又ハ異物介在 四 復坐節制機ノ作用不良 五 緊塞具ノ緊定過度ニシテ活塞 桿ノ運動ヲ阻止スルトキ 六 活塞、節制頭等ノ燒付及過緊 七 砲身滑走部ノ磨損増大 八 極寒地ニ於ケル潤滑油ノ凝固</p>
<p>四 最大射角ニ於ケル少量 ノ復坐不足（片手ニテ押 シテ輕ク復坐スル程度） ハ許容シ得ルモノトス</p>	<p>此場合ニハ其端末ヲ鑄劑シ 置ケル</p>	<p>ナルトキハ他ノ原因ニ基 クテ注意スヘシ（以 下同シ） 三 復坐ばねノ折損ハ後復 坐ノ際搖架内ニ響音ヲ發 スルニ依リ推知スルヲ得 ヘシ而シテ端末ニ於ケル 半周程度ノ折損ハ尙使用 スルコトヲ得</p>

五六

式 駐 退 復 坐 機	
能 機 坐 復	能 機
復坐速度過少	後坐長過少
<ol style="list-style-type: none"> <li>一 復坐機內空氣ノ初張力過小</li> <li>二 駐退液中ニ空氣ノ混在</li> <li>三 復坐常數漏孔ノ閉塞</li> <li>四 駐退復坐機內部ニ故障ヲ生シ</li> <li>五 摩擦過度</li> <li>五 砲身滑走部燒付</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>一 復坐機內空氣ノ初張力過大</li> <li>二 後坐專用弁ノ機能ヲ害シ復坐時ノ閉塞不良</li> <li>三 連續射擊ノ爲駐退液ノ膨脹</li> <li>四 駐退液中ニ多量空氣ノ混在</li> <li>五 節制不良</li> </ol>
	<ol style="list-style-type: none"> <li>四 駐退液ノ濃度過大</li> <li>五 駐退液過量</li> <li>六 砲身ノ滑走部ニ塵砂異物ノ介在ニ因リ擦痕生シ摩擦增大</li> <li>七 隔板ノ機能不良</li> <li>八 後坐變換機ノ組立不良</li> </ol>
	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 變換不良</li> <li>2 外部ノ支障ニ因リ變換不良</li> <li>3 結合不良</li> </ol>

水 氣 壓		水 壓 駐 退 機	
退	駐	機 坐 復	機 坐 復
	後坐長過大	復坐速度過大	復坐速度過大
<ol style="list-style-type: none"> <li>一 復坐機內空氣ノ初張力過小</li> <li>二 駐退液ノ不足</li> <li>三 駐退液ノ稀薄</li> <li>四 隔板ノ機能不良</li> <li>五 後坐變換機ノ衰損、磨滅又ハ組立不良</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>一 復坐機內空氣ノ初張力過大</li> <li>二 連續射擊ノ爲駐退液ノ膨脹</li> <li>三 駐退復坐機內部ニ故障ヲ生シ</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>一 復坐機內空氣ノ初張力過大</li> <li>二 駐退機活塞頭弁ノ閉鎖不良</li> <li>三 節制不良、液ノ濃度不良</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>一 塞螺、壓螺ノ緊定不良</li> <li>二 緊塞用革具ノ磨損、變形</li> <li>三 注液、注氣及排液弁ノ密塞不良</li> </ol>
<ol style="list-style-type: none"> <li>一 駐退復坐機內部故障ノ種類左ノ如シ</li> <li>1 活塞桿頭部ノ緊塞過度又ハ擦痕</li> <li>2 後坐專用弁ノ燒付及密合不良</li> <li>3 後復坐節制部ノ燒付</li> <li>4 隔板ノ機能不良</li> <li>二 後坐變換機故障ノ種類左ノ如シ</li> <li>1 傳動部磨滅變歪ノ爲</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>一 漏氣ノ部位ヲ探究スルニハ疑ハシキ箇所ニ石鹼水ヲ塗布シ其膨脹ニ依リ之ヲ知ルコトヲ得(以下同シ)</li> </ol>		

水壓駐退機  
復坐機  
式  
兩大斜式  
機中面  
獨後式  
立砲復  
式



水 氣 壓 式 駐 退 復 坐 機	
緊 塞 作 用	檢 液 機 能
一 塞螺、壓螺ノ緊定不良 二 緊塞具金具ノ磨減、變形 三 緊塞具、革具、「ゴム」ノ磨損、變形、變質 四 注液及注氣弁ノ密塞不良 五 隔板ノ「グリース」ノ不足	檢液桿進退不良
一 ばねノ衰損及折損 二 緊塞具緊定過度 三 桿部ノ擦痕又ハ發錆ニ因ル摩擦過大	

第四十一 射擊終了後ハ概ネ左ノ事項ニ就キ綿密ニ各部ノ點檢ヲ實施スヘシ

- 一 腔面、閉鎖機等ニ瑕疵ノ有無
- 二 駐退機及復坐機ノ空氣又ハ液ノ漏洩ノ有無
- 三 震動ニ因ル各部ノ緩解又ハ龜裂等ノ有無

### 第三章 格 納

第四十二 火砲ハ他兵器ニ比シ形態大ナル爲之カ格納ニ方リテハ格納容積ヲ要スルコト比較的多キヲ以テ其保存、整備、手入、檢査、出納等ノ實施ニ支障ナキ限り格納容積ヲ縮少シ砲廠、兵器庫ヲ節用スル如ク格納スルモノトス

#### 第一節 長期格納

#### 第四十三 格納場所

- 一 砲及前車ハ砲廠又ハ兵器庫階下ニ格納ス  
但二段格納臺ノ設備アル場合ニハ前車ヲ臺上ニ格納ス
- 二 歩兵砲其他ノ輕量火砲ハ階上ニ格納スルコトヲ得
- 三 砲臺備附火砲ハ要スレハ露天ニ裝備ノ儘格納スルコトヲ得

格 納

四 屬品ハ之ヲ分離シ特ニ示スモノノ外第一篇通則ニ依リ格納ス

第四十四 格納前及格納間ノ處置

格納前及格納間ニハ第一章第三節ニ依ル手入及第四章第二節ニ依ル検査ヲ實施シ保存上遺漏ナカラシムヘシ

第四十五 格納法

一 輕量火炮 要スレハ砲身等ヲ分解シ集團格納ス床板ヲ有スルモノハ支板上ニ並列ス

二 裝輪火炮 前車等ヲ脱スルノ外砲ハ途上姿勢ト爲シテ格納ス

三 固定火炮 砲身、搖架、砲架、架匡、防楯等ニ分離シ大口徑砲ハ閉鎖機ヲ離脱格納ス

露天格納ノモノニ在リテモ閉鎖機其他容易ニ離脱シ得ルモノハ取外シ格納ス  
第四十六 格納ノ細部ハ概ネ左ノ如クスルモノトス

區分	實	施	要	領	
機坐復・機退駐	一 中、小口徑砲ハ砲口ニ亞鉛又ハ亞鉛「メツキ」鋼板製假砲口蓋ヲ裝シ又外部ニ露ハレタル塗油部ニ防塵ノ爲假砲身覆ヲ裝ス	二 大口徑砲ハ閉鎖機ヲ脱シ砲口栓及砲尾栓ヲ裝シ其接際ニハ防錆脂ヲ以テ目塗ヲ施ス但砲塔火炮ノ閉鎖機ハ其儘トス	三 要スレハ砲身ヲ分解シ前後ニ配置セル枕木上ニ水平ニ並列格納ス	四 砲身ヨリ離脱セル閉鎖機及同部品ハ亞鉛板ヲ敷キタル箱内ニ格納ス	五 自動閉鎖機ノ閉鎖ばねハ其張力ノ衰損ヲ豫防スル爲之ヲ抽出シ別ニ格納スルヲ可トシ「アスベスト」塞環ハ必ス容器ニ收メ十分ねぢヲ緊定シ膨脹ヲ防止スヘシ
	一 駐退機及復坐機ハ通常結合ノ儘格納ス但格納ノ期間及火炮ノ種類ニ依リテハ液ヲ排出シ緊塞具又ハ隔板等ヲ別ニ格納スルヲ有利トスルコトアリ	二 駐退機ヨリ液ヲ排出シ格納スルトキハ駐退管復坐管内面、活塞桿等ニ「ベトロラタム」ヲ塗布シ發錆ヲ豫防スルヲ要ス又液ハ變敗セサル如ク適宜ノ容器ニ密閉シ置クヲ可トス	三 駐退機ヲ結合ノ儘格納セルモノノ活塞桿ノ手入ハ常用品ニ同シ	四 空氣復坐機ノ氣壓ハ當該火炮取扱法ノ規定ニ基キ之ヲ低下シ置クヘシ	五 ばね復坐機ニ在リテハ分解困難ナルカ又ハ危險ノ虞アルモノノ外復坐ばね及坐

格納

駐復  
機坐

環各一箇ヲ抽出シテ別ニ格納シ其衰損ヲ豫防スルモノトス抽出スヘキばねハ結合ニ際シ捲キノ方向ヲ誤ラサル爲同方向ノモノヲ抽出シ置クヲ可トス

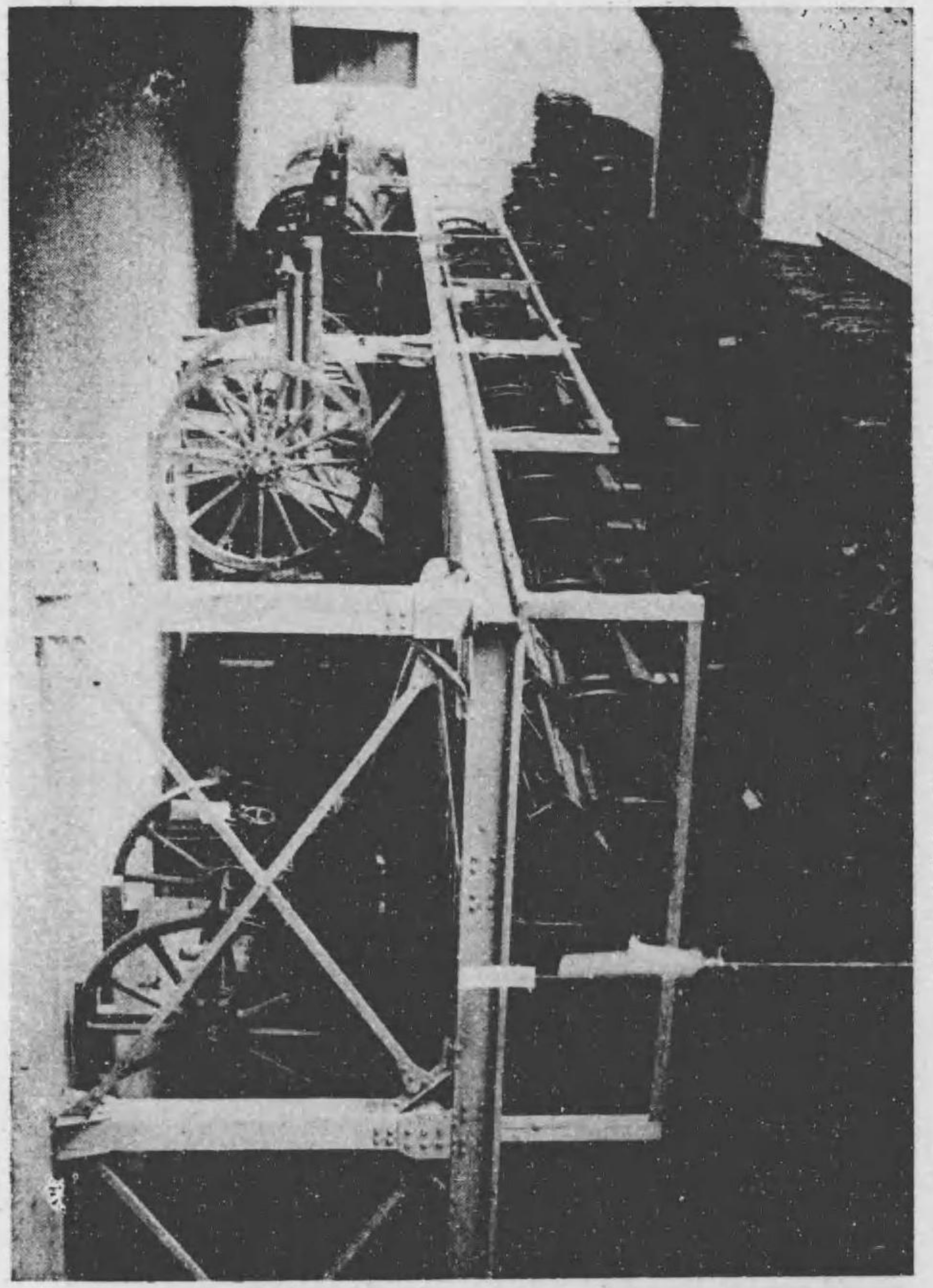
搖架

- 一 砲身ヲ離脱セル搖架ノ上面及距離板(表尺)托架、觀準機室等ニハ防塵ノ爲布又ハ亞鉛板ノ類ヲ以テ覆ヲ施スヲ可トス
- 二 高低照準機ニ平衡機ヲ有スルモノハばねノ衰損ヲ豫防スル爲復坐ばねニ準シ其一箇ヲ離脱シ別ニ格納スルモノトス

砲架

- 一 床板式砲架  
枕木上ニ並列シテ格納スヘシ
- 二 裝輪式砲架  
架尾ヲ床(木板ヲ敷ク)ニ接シ車輪ヲ扛上シテ格納スヘシ但鐵製輪帶ノモノハ已ムヲ得サルトキハ床上ニ置クコトヲ得此場合注意スヘキ事項左ノ如シ
- 一 床上ニ於ケル車輪ノ接點ハ各輦ノ中央部ニ在ラシメ且時々其位置ヲ變換ス
- 二 車輪下ニハ要スレハ支楔ヲ裝ス
- 三 固定式砲架
  - 1 搖架、砲架、防楯ハ枕木上ニ整置シ砲床ハ各門毎ニ、架匡ハ亞鉛板並支材ヲ介シテ重疊堆積シ「ピン」、「ボルト」及「キー」類ハ箱内ニ格納スヘシ
  - 2 大口徑砲及十五糎加農ノ各部ノ如ク移動困難ナルモノハ格納位置ニ於テ貯藏間ノ手入ヲ實施シ得ルコトヲ顧慮シ配置スルヲ可トス

砲架



納格ノ砲火圖八第

格納

露 天 格 納

- 露天格納ノ火炮ハ前諸項ニ準スルノ外左ノ要領ニ依ルモノトス但所在地附近ノ氣象、標高等ノ關係上寒暑、乾濕度、濃霧等ノ影響ヲ受クル虞アルモノハ防錆脂ノ目張りノ效力維持ニ關シ特ニ注意ヲ要ス
- 一 砲身ハ特ニ規定アルモノノ外僅ニ俯角ヲ與ヘ支材ヲ以テ重量ヲ支撐ス
  - 二 寒環ハ寒環用ノ箱ニ格納シ箱板ニ接觸スル部分ニハ亞鉛板ノ類ヲ介在セシムヘシ
  - 三 轉把(轉輪)、指針、遊標、揚彈機ノ柱及揚彈臂、彈路軌板、方向照準機鏈鎖、轉踏板並其他ノ部品ニシテ著脱容易ナルモノハ解脫シテ兵器庫内ニ格納ス
  - 四 側梁上面、制轉機、揚彈機、高低及方向照準機、扛起機ニハ木製又ハ亞鉛板製ノ覆ヲ施スモノトス
- 但砲身ハ暑熱ニ因ル「ベトロラタム」ノ流下ヲ防ク爲木製覆ヲ施シ又「ベトン」ノ反射熱ヲ防ク處置ヲ講スルヲ可トス
- 五 制衝機及高低照準機保護ノ爲砲身ト架匡並砲架ト架匡間ニ支材ヲ裝ス
  - 六 匡頭輪及匡尾輪ハ遊動シ得ル程度ニ緩メ置クモノトス
  - 七 火炮ノ重心砲床ノ中心ヨリ甚ク偏在セル木造砲床ノ負重ヲ均等ニシ保存ヲ良好ナラシムル爲其偏心ノ程度ニ從ヒ時々方向ヲ交換スヘシ但砲床ノ傾斜シアル場合ニ在リテハ復位ヲ促ス如ク方向ヲ定ムルモノトス

品 屬

- 一 火炮ヨリ離脱シテ格納スル革製品及麻製品ハ第一篇第五、第六章格納要領ニ依リ若干門分宛集團格納スルヲ可トス
- 二 火炮ノ屬品タル各種匡、箱、囊等ノ收入品中分離格納ヲ有利トスルモノハ之ヲ取出シ合番號ヲ有スルモノハ彼此混淆セサル如ク區分シ格納棚又ハ格納箱ニ格納ス若干門宛集團納法ニ依ルヲ可トス但合番號ヲ有スルモノハ各門毎ニ區分セルモノヲ集團スルヲ要ス
- 三 諸屬品箱及匣ハ屬品格納場所ニ近接セル位置ニ重疊堆積シテ格納スルヲ可トス
- 四 駐退機ヨリ分離セル復坐ばねハ其屈撓ヲ豫防スル爲直桿ノ架ニ貫通シ又ハ棚若ハ箱内等ニ平置格納ス平衡機ばねモ亦同シ
- 五 洗桿頭ハ包裝ノ儘之ヲ懸吊シ柄ハ其屈撓ヲ豫防スルタメ成ルヘク之ヲ懸吊シ又ハ三點以上ニテ支フル如ク枕木上ニ水平ニ並列スヘシ
- 六 洗桿頭ハ植毛ノ虫害ヲ豫防スル爲「サリチル」酸紙ヲ以テ包裝シ内部ニ「ナフタリン」ヲ收容シ外部ヲ更ニ厚紙又ハ厚麻布ニテ被包結著ス
- 七 穀帽縛革ハ之ヲ離脱シテ別ニ格納シ麻絲又ハ亞鉛「メツキ」鐵線ノ類ヲ以テ之ニ代用シ置クヘシ
- 八 緊塞革、革環、革筒ハ麻絲又ハ綿帶等ヲ纏卷スルカ或ハ型ニ入レ其膨脹變形ヲ豫防ス又油脂ニ接觸セシムヘカラス
- 九 駐退復坐機等ノ部品中黃銅品等ニシテ他ト觸突ノ爲毀損シ易キモノハ適宜包裝ヲ爲シ又ハ小箱ニ收容シテ格納スヘシ